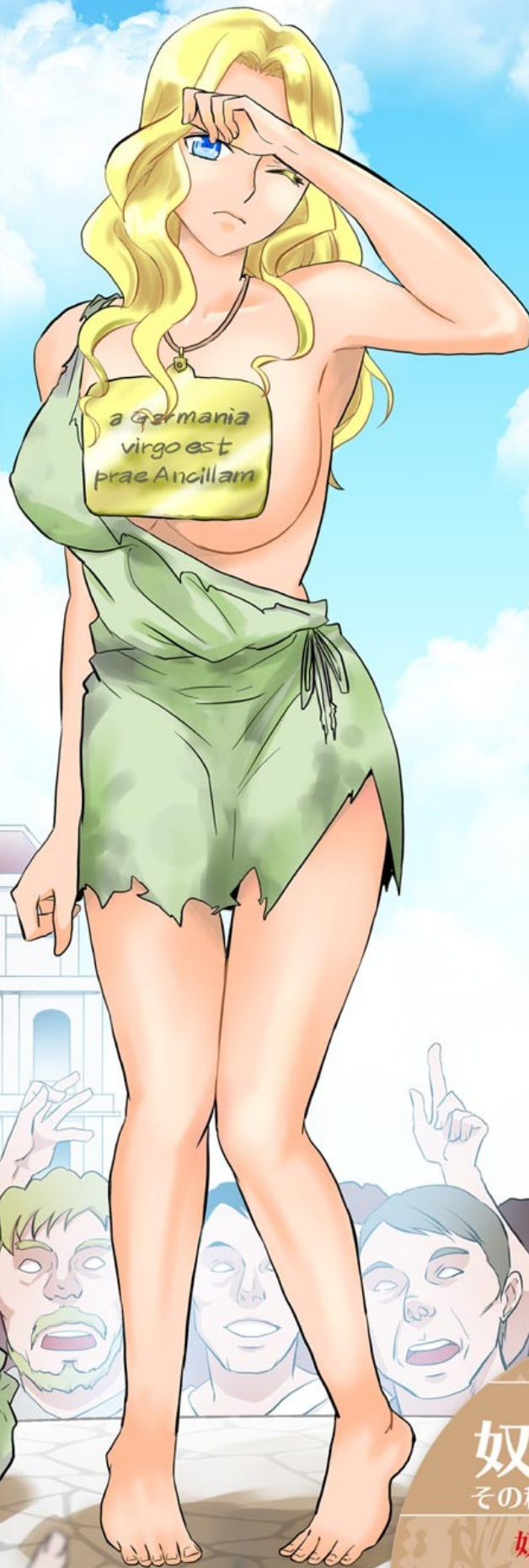


SANWA MOOK

ローマ式  
奴隷  
との  
生活

Vitae Cum Selvuris



古代ローマ伝来  
奴隷飼育術  
その秘密の一端が明らかに

奴隷制度が自明だった  
古代ローマ。  
そこでは少数の裕福な人々が、  
多数の奴隷を性的な  
慰みものにする権利があった。

著:トウリヌス 翻案:鳥山仁 イラスト:大和テクノ

SANWA MOOK

ローマ式

奴隸  
との  
生活

Vitae Cum Selvuris

古代ローマ伝来

奴隸飼育術

その秘密の一端が明らかに

奴隸制度が自明だった  
古代ローマ。

そこでは少数の裕福な人々が、  
多数の奴隸を性的な  
慰みものにする権利があった。

著:トウリヌス 翻案:鳥山仁 イラスト:大和テクノ

## はじめに

本書は古代ローマ期の文筆家トゥリヌス（生没年不明）が書いたとされる『ウィータエ・クム・セルウリス』（*Vitae Cum Selvuris* = 奴隷娘たちとの生活）の現代語訳である。

トゥリヌスの詳しい経歴は分かっていない。本文中に主人公が名乗る箇所から著者名が推定されている。また本書には祖本がなく、恐らく十八世紀頃に作成されたとされるラテン語による写本が現存するのみである。

そこで、本書は十八世紀に書かれた偽書説、あるいは祖本に加筆された作品だと推測する研究者もいる。そして、前者は議論の余地があるが、後者は確実だと考えられている。

本書は裕福なローマ市民男性トゥリヌスが、妻や奴隷との性生活を綴った日記風のハーレム小説であるが、まず古代ローマに日記文学と呼べるようなジャンルは存在しなかった。執筆に必要なパピルス紙や羊皮紙の価格が高かったため、日記を書く習慣が広まらなかったからである。最終刊を除いてガイウス・ユリウス・カエサルが書いたとされる『ガリア戦記』は近い作品だが、元老院に対する報告書という体裁をとっており、むしろ紀行文の一種として分類すべきだろう。

次に作品の内容と文体である。古代ローマ時代に恋愛や性愛を描いた作品は、主にエレゲイア（哀歌＝エレジーの語源となった）と呼ばれる二行連詩か、ミムス劇と呼ばれる踊りやパントマイムを取り入れた一種の道化劇、やや時代が下って古代ギリシア恋愛小説のいずれかの形式を採っていた。エレゲイアの中で恋愛をテーマにした作品は恋愛エレゲイア詩と呼ばれ、カリコマス（？紀元前二四〇）の強い影響を受けたローマの詩人達が一大ジャンルを形成した。代表的な詩人として、セクストゥス・プロペルティウス、ガイウス・ウァレリウス・カトゥルス、ティブルス、そしてオウイディウスが挙げられる。

彼らが詠んだ詩は、基本的に一人の女性に対する心情の吐露という形式を採った（オウイディウスの『名婦の書簡』は性別が逆転しており、女性から男性への手紙という体裁なので、必ずしもこの基本が遵守されていたわけではない）。つまり、ラブレターのようなものであり、同時に何人もの女性を相手にすることは想定されていない。

次のミムス劇だが、本書資料の【娯楽・その3】を参照していただきたい。

最後の古代ギリシア恋愛小説だが、一世紀から四世紀初頭までギリシア周辺で盛んだった散文系の恋愛小説で、『カイレアスとカッリロエ』（カリトン）、『レウキッペとクレイトポン』（アキレウス・タテイウス）、『ポイメニカ（ダフニスとクロエ）』（ロンゴス）、『エペシアカ（エフェソス物語）』（クノセポン。ただし、ソクラテスの弟子だった同名の哲学者とは別人）、『アイテイオピカ（エチオピア物語）』（ヘリオドロス）などが現存している。

これらは冒険を伴う少女少女、あるいは青年男子と女子の健全な、すなわち肉体関係が描かれない恋愛小説で、その極度に形式化した作品群の作者をエロチコイ（恋愛冒険物語作家）と呼ぶ。

けれども、研究者の一部が疑義を呈しているように、写本が作成された時期のキリスト教的な倫理観に沿ったものだけが選別されている可能性がある。つまり、過度にエロティックな描写を含んだ作品は意図的に翻訳や写本がされず、消滅している可能性があるのだ。

こうした疑問は、古代ギリシア恋愛小説のパロディとして書かれたと考えられている『サテュリコン』（ペトロニウス）の存在によって仄めかされている。『サテュリコン』も祖本は存在せず、14、15、16巻の計3巻、それも抄訳が現存しているのみである。しかし、古代ギリシア恋愛小説に比較すると性描写が格段に多い。『サテュリコン』がミムス劇の強い影響下にあり、なおかつギリシアとローマの文化的な差異を考慮したとしても、この違いは無視できるものではない。

そして、本書で紹介する『ウイータエ・クム・セルウリース』は上記3種類のいずれのカテゴリとも文体が異なる上に、性描写の量が『サテュリコン』すら比較にならないほど多い。本書は一〜二世紀の首都ローマを舞台にしていると推定されているが、当時の出版事情を鑑みると、とても公的に発表できたとは思えない。それに加えて、当時の作品の相当数から確認できる詩文が完全に削除されている。

以上の理由から、『ウイータエ・クム・セルウリース』の写本は最低でも抄訳されており、更に写本作成者によって性行為のシーンが加筆されているのではないかと考えられているのである。

既に本文をお読みの方はお解りの通り、十八世紀のヨーロッパにおける検閲基準でも“Vitae Cum Selvris”を出版

decorative

できる可能性は皆無だった。わいせつ性だけでなく非キリスト教的な内容が、発禁の対象となるのは間違いないかったと思われる。従って、写本作成者にこの作品を世に出す意図はなく、ただ実用（マスターベーション）に耐えうる目的でリライトされていのではないだろうか？

翻案者が本書の存在を知ったのは、二〇一三年に発表した『本当に正しいフェティシズム（性的嗜好大事典）』がきっかけだった。同書は様々な性的嗜好の持ち主とメールでやりとりをしたり、直接会って話を聞いていくなどして、性的嗜好の分類及びに原理を考察するという内容だったのだが、その過程で私はA氏（仮名）と知り合った。

彼はある性的嗜好の界隈では非常に有名な人物で、特に海外文学関係の造詣が深い。そのA氏が編集部を持ち込んできたのが『ウィータエ・クム・セルウリス』のラテン語写本と、彼自身が翻訳した日本語版だったのである。編集部で検討した結果、

- (1) 作品中に登場する古代ローマの生活習慣や世情が、読者にも理解できるように解説文をつける。
- (2) 文章を読み易いよう一行一文に変更し、それでも読みづらい箇所は翻案・校閲する。
- (3) タイトルを分かり易く『ローマ式奴隷との生活』に変更する。

という3点の条件をつけた上で出版することを決定した。

それが本書である。

翻案及びに校閲作業は鳥山仁が担当した。

なお、最後になるが本書はあくまでもフィクションであり、実在の人物・団体・事件などとは一切無関係であることを強調しておきたい。歴史小説にありがちだが、かつて実在した社会を舞台にしているからといって、そこに書かれていることが実際に起きたとは限らないのである。

はじめに

目次  
キャラクター表

003

II 古代ローマの日常生活

102

I	XVIII	XVII	XVI	XV	XIV	XIII	XII	XI	X	IX	VIII	VII	VI	V	IV	III	II	I
【奴隷】	【複雑な階級制度】	【軍制の変化】	【ローマ市民】	【産業】	【インフラ・科学技術】	古代ローマの政治経済												
100	099	097	096	095	095	088	083	077	072	070	065	063	056	054	050	042	038	033

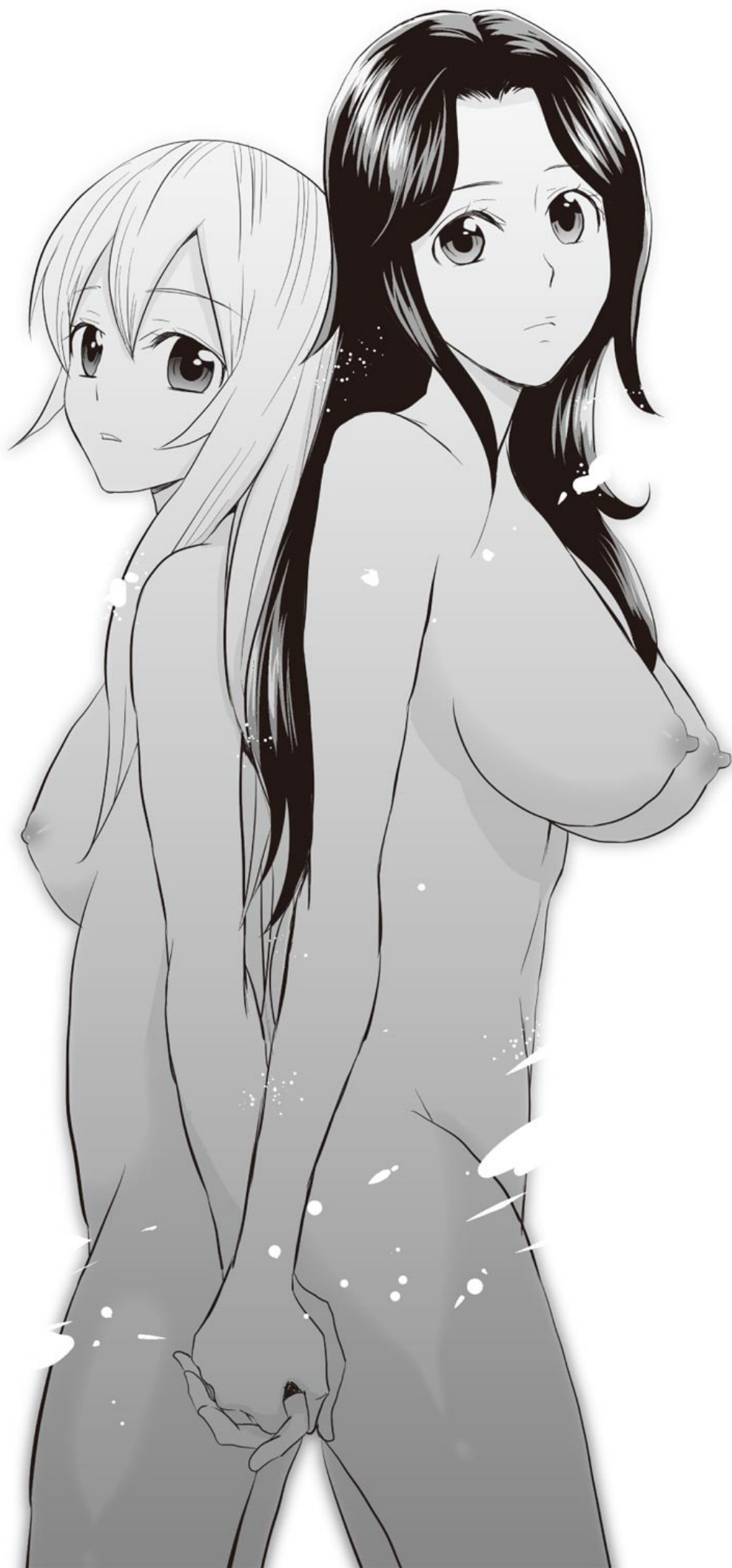
【名前】	【寿命】	【教育・その1】	【教育・その2】	【書籍】	【衣類】	【靴】	【化粧と装飾品・その1】	【化粧と装飾品・その2】	【時計】	【照明】	【通貨】	【住宅・その1】	【住宅・その2】	【家具・調度品】	【寝具】	【火】	【水】	【下水】	【トイレ・その1】	【トイレ・その2】	【食事・その1】	【食事・その2】	【食事・その3】	【浴場】	【娯楽・その1】	【娯楽・その2】	【娯楽・その3】	【娯楽・その4】	【結婚・その1】	【結婚・その2】	【結婚・その3】	【セックス】
102	103	104	104	106	107	108	109	109	110	111	111	113	113	114	114	115	115	116	117	117	118	119	121	123	124	125	126	127	128	130		

奥付

130

# 奴隷娘 たちの 生活

Vitae Cum Selvuris



### ■ユリア

トゥリヌスの少女妻で、恐らくユリウス氏族の娘。年の差婚のため、主人公を自分の父親のように慕っている。



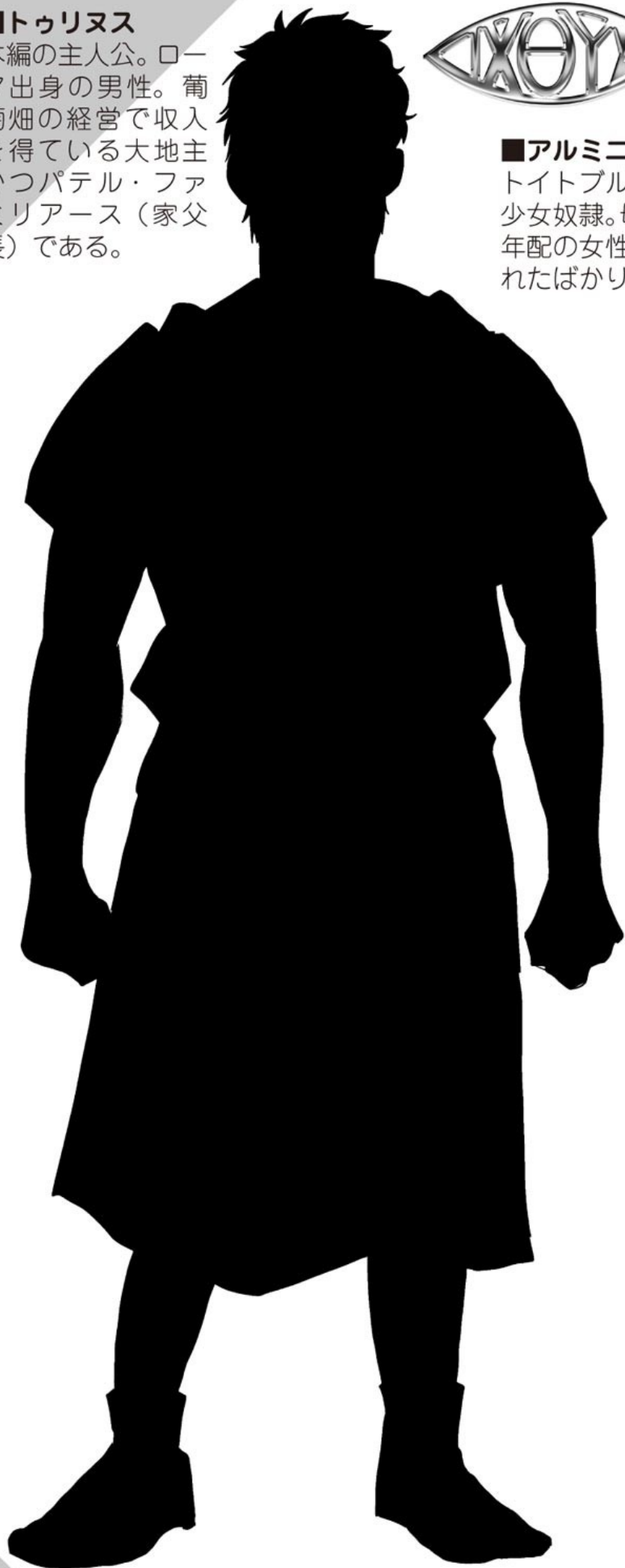
### ■エゲリア

カデス（現スペイン、カディス）出身の少女奴隷。ユリアよりも先に主人公によって買われ、愛玩されていた。踊りが得意。



## ■トゥリヌス

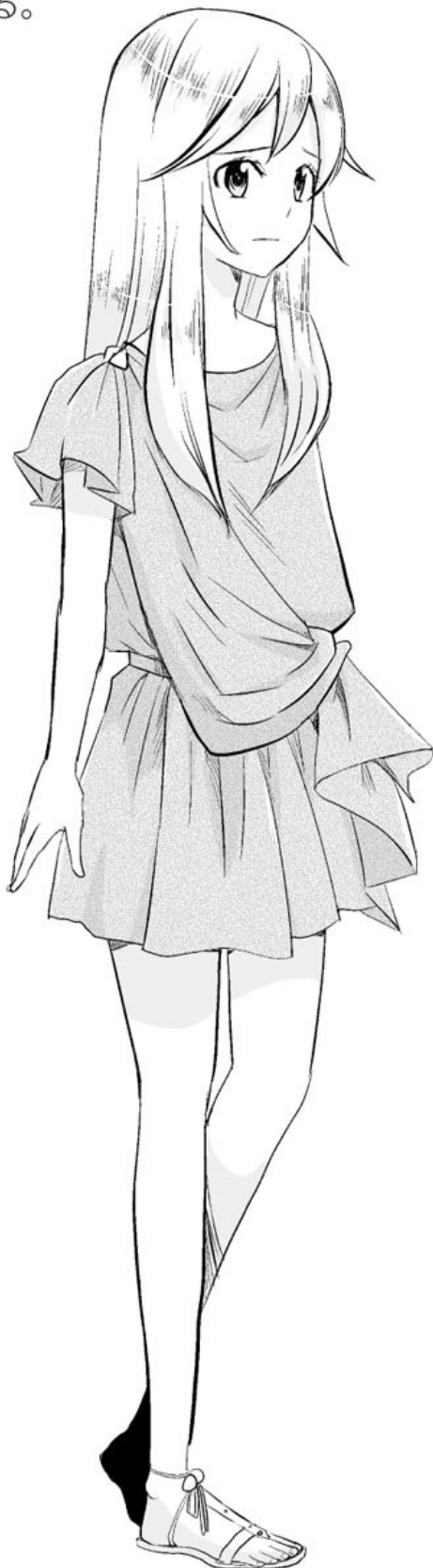
本編の主人公。ローマ出身の男性。葡萄酒の経営で収入を得ている大地主かつパテル・ファミリアース（家父長）である。



## 登場人物紹介

## ■アルミニア

トイトブルク（現在のドイツ）出身の少女奴隷。母親に虐待されていたため、年配の女性を嫌う。トゥリヌスに買われたばかりである。



I

サルタテイオ（表敬訪問）の最後に、パウサニアスが来た。書字工房を経営している解放奴隷だ。

私が子供の頃、まだ奴隷だった彼にグラマティクス（中等教育）を教わった。

体罰を減多にしない良い教師だった。

今は私に本や板絵を売りつけてくる良い商人になった。

彼とは好みが似ているので、持ち込まれた作品の大半を言い値で買ってしまふ。

本日、パウサニアスが手にしていたのは、金髪の少女が描かれた板絵だった。

作者はピクトル。

少女の絵を描かせたら、ローマで一番の絵描き奴隷だ。

「どうですか？ ゲルマニアから連れてきた女奴隷の裸婦像です」

「幾らだ？」

「三〇セステルティウスでございます」

「高いな」

「奴隷を買うよりはお安いでしょう」

「分かった」

私はデナリウス銀貨（一デナリウス＝4セステルティウス）で支払いを済ませ、絵を引き取った。

パウサニアスのお陰で、私のクビクルム（寝室）は少女絵でいっぱいだ。

掃除奴隷からは白い目で見られている。

しかしウエヌス（ヴィーナス。性愛の女神。性的衝動を喚起させると信じられていた）の気まぐれで、この趣味が止められない。

「ところで、小耳に挟みたいことが……」

私が少女の絵をためつすがめつしていると、解放奴隷が小声になった。

「何？」

私もつられて音量を落とす。

「奴隷商人のパルティウスはお知り合いですよね？」

「ああ。何人か買ったことがある」

「出物があると、ご主人に伝えて欲しいと言われました」

「出物？」

「トイトブルク（現在のドイツ西部にあった森林地帯）出身の少女奴隷が入ってきたそうです。年齢は十二歳ぐらい。顔はご主人の好みだそうです」

「どうして本人が来ない？」

「まとまった取引があったようで、奴隷の世話に忙しいそうですよ」

「奴隷は自分の目で確かめないと」

「明日までにご主人が店に来なければ、物乞いにでもするしかない」と

「難ありということか？」

「恐らく」

「分かった。ありがとう」

私がパウサニアスに礼を言うと、彼はタブリヌム（執務室）から退出した。

サルタティオを終え、契約書の整理にかかった後も、トイトブルクの少女奴隷のことが頭から離れない。

トイトブルク出身と言うことはゲルマン人だろう。

（翻案者注・古代ローマ人はゲルマン系の金髪を美しいと考えていた。このため、ゲルマン人の毛髪を刈り、人毛のカツラを作っていたほどである）

だが、難ありというのはどういうことだろう？

想像ばかり膨らんでしまう。

パルティウスは変わり種を集めてくるのが得意な奴隷商人だ。

その代わり、普通よりも値が張るので取引相手は限られる。

特に多いのは床屋やオルナトリスク（美容師）などの美容技術の持ち主で、物をいとして売りさばくことは減多に無いはずだ。

執務を終え、食事をとり、浴場に行つて家に戻るあたりで、私はようやくパルティウスの店に顔を出すことを決める。

明日はそれなりの出費がありそうだ。

## II

起床、祈祷、朝食、サルタティオ（表敬訪問）を終えた後に外出の準備をする。

貴重品箱からアウレウス金貨を十二枚用意して革袋に入れた。

これ以上の金を、パルティウスに支払うつもりは無い。

強盗に襲われぬよう、二人の奴隷に護衛を命じようとしていたところで、二階からエゲリアが下りてきた。

カデス（現スペイン、カディス）出身の踊り子奴隷だ。

彼女を十二歳の時に買って、もう五年は経つ。

バエティカ（ヒスパニア・バエティカ属州。現在のスペイン）で働いていた時期に、現地の解放奴隷から勧められた。

妻以上に関係が深く、私には従順だが、時折ユーノー（女性の結婚生活を司る女神で、ギリシア神話のヘーラーと同一視された。非常に嫉妬深い）に呪われる。

私の姿を見たエゲリアは、小走りで近づいてきて僅かに身を屈めた。

「お買い物ですか、ご主人様」

「ああ。これから出かける」

「どこに行かれるのですか？」

「サエプタ・ユリア（現在のサンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ教会近辺）だ」

「まあ。あのあたりにいるのは奴隷商人だと聞いたことがあります」

「そうだ。奴隷を買いに行く」

私は主人らしい冷淡な返事をしたつもりだったが、エゲリアは私の手を掴むとクビクルム（寝室）の一つに引っ張っていき、首に両腕を巻き付けてからサーウィウム（ディープリキス）をしてくる。

「悪い人！ 可愛い女の子を買いに行くって聞いたわ」

「誰から聞いたんだ？」

「秘密よ」

「お仕置きするぞ」

「どうぞ、お好きなように」

エゲリアはそう言うのと私に背中を見せ、トゥニカ（貫頭衣）の裾を大きく捲くつて臀部を露わにした。

つられた私が指で彼女の脚の間を探ると、べつとりと濡れている。

「これから商談だから、そんなことをしてはならない」

毒気を抜かれた私はエゲリアの衣服の乱れを直し、何度も頭を撫でてやった。

だが、彼女は得心がいかぬといった面持ちで、私を睨みつけている。

「お仕置きもしない？ 私に興味なくなった？」

「ユピテル（ローマ神話における最高神。ギリシア神話のゼウスと同一視された）に誓って違う。商談の前に骨抜きにされたくないだけだ」

「帰ってきたら、続きをしてくれる？」

「もちろんだ」

「分かった」

エゲリアは不満そうな顔のまま、私を残してクビクルムから出て行った。

妻のユリアに駄々をこねている現場を見られなくなかったのだらう。

私は改めて二人の奴隷を呼び、ドムス（二戸建て住宅）からサエ

プタ・ユリアに向かう。

市中はいつものようにごった返していた。

先導する奴隷に人混みをかき分けさせ、目的地にたどり着く。

パルティウスの店を探し、店頭に立っていた若い男に名前を告げる。

男が店内に消えると、間を置かずにパルティウスが現れた。

浅黒い肌をした、顔に皺の多い人物だ。

年齢は分からない。

私はこの男から、合計で五人の奴隷を買っていた。

一年前に、オルナートリスク（美容師）を妻のために買ったのが最後だったはずだ。

彼女の値段は市場よりも五割増しだったが腕は確かだった。

「パウサニアスから話を聞いたぞ」

「パウサニアスの旦那が、写字のできる奴隷を欲しがって来たんで、その時に相談させていただきました」

「仲が良いのか？」

「うちは知っての通り、芸のできる奴隷を売ってますんで」

「それで、私を呼んだのは？」

「へえ。細かいことは中で」

パルティウスに促された私は店内に足を踏み入れた。

彼が持ってきた椅子に腰掛ける。

「半年ほど抱えている奴隷がいましてね。年は十二歳ぐらい。蛮族の子です」

「トイトブルクの出身だと聞いた」

「へえ。母親と一緒に買ったんですよ。ところが、こいつがとんだ食わせ物でしてね」

「というと?」

「母親が娘を殴るんですわ。しかも毎日。何が気に入らないんだか」

「その母親をどうしたんだ?」

「売り飛ばしました。どこかは訊かないでくださいよ」

「分かった。それで、私を呼んだ理由を教えてください」

「性格は従順。物覚えも早く、片言なら言葉を話せます。ただ、一つ難がありましたね」

「なんだ?」

「母親に殴られている内に、女嫌いになっちゃったんですよ。女なのに」

「なるほど」

「これじゃ、売り物になりません。ルバーナル（娼館）で男相手に商売をさせるにしても、先輩の娼婦と上手くやっていけないと私に苦情が来る」

「うちにだって女奴隷はいるぞ。妻もいる」

「旦那を見込んでの話ですよ。パウサニアスの旦那からも、いろいろ聞いてますよ。若い女奴隷を扱うのが上手だそうで」

「パウサニアスの奴、そんなことを言ってるのか」

「褒めちぎってましたよ。そこで、愚痴を聞いて貰ったというわけで」

「本人を見なければ何とも言えない」

「連れてきますか?」

「そのために私を呼んだのではないのか?」

「もちろんさあ」

奴隷商人は手を打って若い男を呼ぶと、少女を連れてくるようにと言いつける。

しばらく座って待っていると、少女が現れた。

髪は金色で長い。

肌は白い。

目は緑色をしている。

背は低く、やせ細っている。

娼婦にしても客がつきそうにない体格だが、あいにく私は痩せた女が好きだ。

たぶん、パウサニアスが私の趣味をパーティウスに教えたのだろう。

少女は若い男に背中を押されて私の前に立った。

「どうぞ。検分してください」

奴隷商人は顎で彼女を指し示した。

私は奴隷を買うときに、いつもしている命令を一通り下すことにする。

「片足で立て」

「反対側の足で立て」

「その場で跳ねろ」

「両手を回せ」

「両手を背中に回せ」

「口を開ける。歯を見せろ」

「声を出せ。フオルトゥーナ（幸運の女神）には後ろ髪がない」と  
 言え」

少女は私の指示に、おずおずと従った。

幸いなことに、どこにも障碍はなさそうだった。

続いて私は少女に服を脱ぐようにと命じた。

彼女は言われたとおり全裸になった。

立ち上がった私は、彼女の身体を凝視した。

足の裏は白く汚れていない。

手首や足首に枷の痕がない。

ローマに来てから時間が経っている証拠だ。

その代わり、背中や太股に痣がある。

これが母親に叩かれた痕だろうか？

だとしたら、親と引き離されたのは、つい最近ということになる。

「母親と別れさせたのは？」

「三日前でさあ」

「あれは親が殴った痕か」

「へえ」

「他に怪我は？」

「全部見ていただいて結構ですよ」

「分かった」

パルティウスに許可を取った私は少女に命令した。

「そこにあるテーブルに仰向けに寝ろ。足を広げて自分の手で持つんだ。股ぐらを見せてもらおうぞ」

彼女は顔を真っ赤にしながら、言いつけ通りの姿勢になった。

私はテーブルに近づいて、少女の股間を調べた。

アヌス（肛門）にもクンヌス（女性器）にも傷はない。

陰毛もまばらにしか生えていない。

「誰かこの子を犯したことは？」

「処女です。保証しますよ。確かめますか？」

「ここで調べるのは無理だろう。信じるよ」

「ありがとうございます」

吟味を終えた私は、椅子に座り直した。

「もう、立って服を着ていいぞ」

パルティウスが少女に申しつける。

「それで、この子は何の役に立つと思う？」

「ベッドを暖めるのに良いでしょう。そうでなければマッサージ係

だ」

「女の仕事はできないと言うことだな？」

「女嫌いの女ですから」

「分かった。幾らだ」

「この子はローマに着いてから、半年も経っています。母子で一緒に

売りに出す予定だったんでさあ」

「さっき聞いたよ。当てが外れたんだな。それで？」

「今日までの食費を上乗せさせてくださいよ。一二〇〇セステルティ



ウスだ」

「子供にか？ 高すぎる。普通は六〇〇だぞ。欲深め」

「なら、このお可哀想なおガキ様の目を潰して物乞いでもやらせませうかね」

「冗談は止めろ」

「旦那が買わないなら関係ないでしょう」

「七〇〇セステルティウス」

「もう一声」

「八〇〇」

「商談成立でさあ。書類を持ってきます」

笑顔を浮かべたパルティウスは、店の奥に引っ込んで契約書を持って戻ってきた。

契約書の内容を確認していると、奴隷商人が思い出したように問いかけてくる。

「名前はどうしますか？」

「この娘のか？」

「へえ」

「元の名前は？」

「アルミニアでさあ」

「じゃあ、それで良いだろう」

「不吉な名前ですぜ」

（翻案者注・アルミニアはアルミニウスの女性形。アルミニウスは紀元九年にトイトブルクの森でローマ軍を全滅に追い込んだケルス

キ族の族長で、非常に優秀な戦闘指揮官だった。パルティウスが「不吉だ」と言っているのは、この歴史的事実を指しているものと思われる）

「博学だな」

「仕事の都合でさ。そういうのにうるさい人がいるんで」

「私は気にしない」

契約書の内容が、高等アエディリス（按察官）告示に沿ったものであることを確認した私は、書類に自分の名前や身分を記入した。

「保証人を連れてきませう」

私の書き込んだ箇所を読み上げたパルティウスは店から出て行った。

（翻案者注・奴隷売買の際には契約書が正しいことを証明するため、奴隷商人側に保証人を立てる義務があった）

しばらくすると、恐らく同じ出自の若い男を連れてくる。

「シユルスです」

そう名乗った男は顔をしかめ、書類に目を通した。

彼はパルティウスと恐らくアラム語でやりとりしてから、私に語りかける。

「トゥリヌスの旦那。書類は確かめました。俺が保証人になります」

「分かった」

シユルスは書類にサインをすると、その場にとどまって私とアルミニアと奴隷商人の顔を交互に盗み見た。

「ではお代を」

全ての書類の記入が終わると、パルティウスが支払いを要求する。

私は用意した革袋から、アウレウス金貨を八枚出した。

パルティウスは私から受け取った金貨が、本物かどうかを重さで確かめている。

「検分してくれ」

「旦那との取引は六人目ですよね？」

「多分」

「私も旦那を信じさせていただきます」

奴隷商人はそう言うと、代金を自分の革袋にしまった。

取引を終えたパルティウスは、彼が雇っている若い男に言葉をか  
けた。

すると、彼は店の奥から小さなカルバティナ（一枚革でできたサ  
ンダル）を持ってくる。

「おまけでさ。いりますか？」

「貰うよ。足の裏を怪我されちゃたららんからな」

私はアルミニアにサンダルを渡した。

彼女は慣れない手つきで履き物に足を通す。

「行こう。今日から私がお前の主人となるトゥリヌスだ」

「よろしくお願いします、ご主人様」

私はただどしい口調で返事をしたアルミニアの手を握り、パル  
ティウスの店を出た。

店の前で立っていた護衛の奴隷達に声を掛け、奴隷市場から退散  
する。

通りは相変わらずごった返していた。

アルミニアの歩幅は狭い。

苛ついた私は、少女を抱え上げた。

彼女は驚いた顔をしたが、なすがままにされている。

「腹は減ったか？」

「はい」

「これから飯を食いに行く」

「私も一緒にして宜しいでしょうか？」

「他の二人も一緒だ」

「はい」

食事の話をすると、心なしか少女の顔が明るくなった。

私は護衛と共に、行きつけのポピーナ（軽食堂）に顔を出した。

四人で昼食を食べる。

アルミニアは体格に似合わぬ大食漢だった。

彼女にローマまで来た経緯を訊いたが、こちらの言葉を完全に理  
解しているわけではないので、上手く意思疎通ができない。

ただし、大筋でパルティウスの話が事実であることは確認できた。

奴隷商人に捕まる前から、いつも母親に殴られていたため、年上  
の女性が怖いそうだ。

ということは、この店の実質的な経営者であるユステイナを近寄  
らせるのは得策ではないということになる。

「今日は時間がない。改めて顔を出す」

奴隷達をせっついて食事を済ませた私は、カウンターから興味

津々といった顔つきで、こちらを見ている中年女性に金を支払いながら長話ができないことを詫びた。

「何時かお話しただけなんですか、坊ちゃま」

亡父の解放奴隷は、そう言うアルミニアに好奇の視線を向ける。

「もちろんだ。またすぐに来る」

私は別れの挨拶もそこそこに、奴隷達と店を出る。

我が家に戻り、二人の護衛を任務から解放した私は、アルミニアの足からサンダルを抜いた。

彼女の手を引いて、アトリウム（翻案者注・雨水を溜めるための貯水槽がある広間。天井はなくコンプレウイウムという天窗が空いていた）に隣接するクビクルム（寝室）の一つに招き入れる。

「ここで待っている。意味は分かるか？」

「はい」

「後で家族に紹介する」

「はい」

「オシッコがしたくなったら、その尿瓶に。眠くなったら、その布団で寝て良いぞ」

「ありがとうございます」

「その代わり、ここから出るな。知らない人が来たら、主人から動くなと言われていると言え」

「はい」

金髪の少女に最低限の指示を出した私は、クビクルム（寝室）を出て伸びをした。

もう、護衛として連れて行った奴隷達の口から、私が新しい奴隷を買って帰ってきたことが、家中に広まりつつあるはずだ。

その中には、間違いなくエゲリアがいるだろう。

貴重品箱を開き、残った金貨を仕舞った私は、タブリヌム（執務室）に戻ってソファに腰を下ろす。

パウサニアスが言っていた通り、奴隷は高い。

私は決して貧しくないが、それでも購入には勇気が要る。

しかも、交渉の相手は奴隷商人だ。

パーティウスは誠実な部類に入るが、その分だけふっかけてくる。知人に「少女を八〇〇セステルティウスで買った」と言ったら物笑いの種にされるだろう。

後は奴隷達と妻にアルミニアを紹介せねばならない。

考えるだけで疲れてくる。

「よろしいですか？」

背もたれに寄りかかった私が天井を見ていると、エゲリアの声が聞こえてきた。

「入れ」

私が許可を出すと、入り口に立てかけた衝立の影からエゲリアが姿を見せる。

「新しい子、見てきましたよ。金髪で、可愛いですね」

「名前はアルミニアだ。覚えていたか？」

「ええ」

「母親に殴られていたせいで、年上の女性が怖いそうだ」

「私でも？」

「お前なら平気だろう。三十代を超えたあたりからじゃないか？」

「それなら、奥様も大丈夫そうですね」

「多分な」

「それより、もう『おいた』は済ませたんですか？」

「まさか。大金を持つていたから護衛をつけていたんだぞ」

「その人達から、ユステイナのポピーナ（軽食堂）に行ったと聞いたんですが」

（翻案者注・ポピーナは軽食堂兼風俗店だった。店のウェイトレスは売春をしていた。ここでは、アルミニアをポピーナに連れ込んで犯したことを疑っている）

「誤解だ」

「私を連れて行く時はしているのに？」

「主人を問い詰めるなら罰を与えるぞ」

「どうぞ。お仕置きしてください」

エゲリアそう言うと、私の隣に腰掛けた。

この家の主人しか座ってはいけない場所だ。

「悪い子だ」

私はエゲリアの髪の毛を掴んで引っ張った。

彼女は恍惚の面持ちで口を開く。

「どんなお仕置きですか、ご主人様」

「プリアープス（翻案者注・豊穡神で男根の象徴。この場合は男性器そのものを指す）にお祈りして貰おうか」

「喜んでお仕置きを受けます。ですから、トゥニカの裾を捲つてください」

エゲリアの髪の毛を離れた私はソファから立ち上がり、ベルトを外してトゥニカの裾をへソまで引っ張った。

まるで用を足すような格好でソファに座り直した私の股間にエゲリアが覆い被さってくる。

彼女はスブリガークルム（下着）の紐を解き、勃起したハスタ（男根）を解き放つと嬌声を上げる。

「もう、お祈りしちゃって良いですか？」

「いいぞ」

私が許可を出した途端、エゲリアがプリアープスを頬張った。片手でウィルガ（陰茎）をしごき、もう片方の手で睾丸をくすぐってくる。

ユステイナの店で性技を仕込ませた甲斐があった。腰が溶けてしまいそうだ。

私はしばらくエゲリアの髪を撫でながら、彼女の愛撫を愉しんだ。やがて我慢ができなくなったので、太股に力を込める。

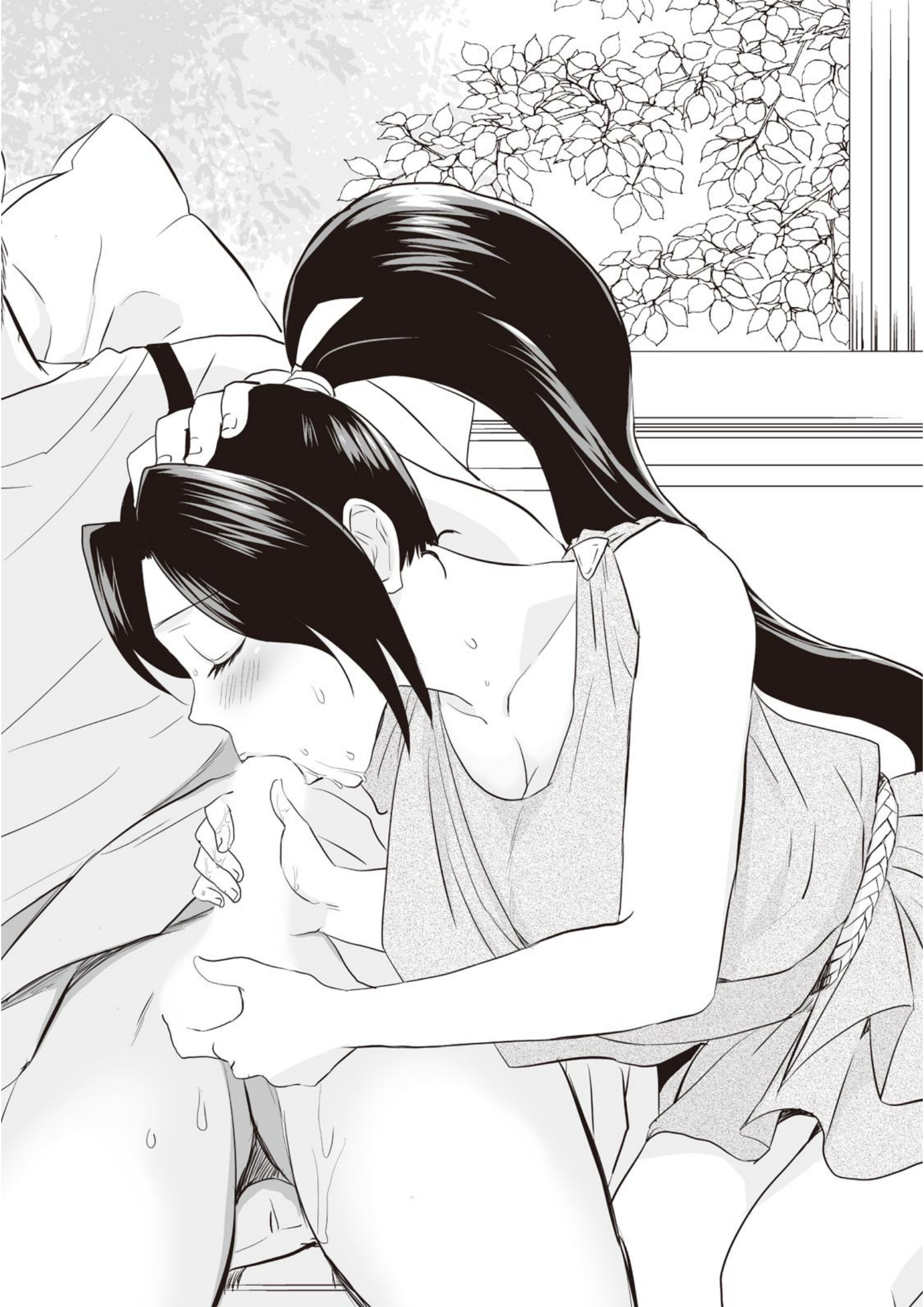
「出すぞ」

私が果てても、エゲリアはプリアープスを口から離さなかった。しばらくしてから、ようやく彼女が顔を上げる。

「たくさん出た。嘘じゃなかった」

彼女は口の周りを濡らしながら、満足そうに微笑んだ。

私は呆れながらソファから立ち上がって衣服の乱れを直す。



「お前はそれが確かめたかったのか」

「はい」

「主人の言うことを信用できないのか？」

「はい」

「また罰を与えるぞ」

「お願いします。二回目は普通にしてください」

「前言を撤回する。たまには嫌がれよ」

「なんだ。詰まらないの」

「そういえば、お前は最初から嫌がらなかったな」

「ご主人様の仕込みが上手だったからです」

手の甲で口を拭ったエゲリアは、身体をくねらせ私にすり寄ってきた。  
額に皺を刻んだ私は、タブリヌム（執務室）から踊り子奴隷を追い出しにかかる。

「これから仕事だ。出て行け」

「今晚、寝室にお邪魔しても良いですか？」

「今したばかりだぞ」

「私はしてもらってないです」

「私から搾り取るつもりか？」

「はい。新しい奴隷が来たのに、大人しく黙っているほど馬鹿ではないので」

「分かった。後で考えるから、今は出て行け」

エゲリアを衝立の向こうに追放した私は、今日の支払いをパピルスに記録した。

それが終わると、ストウルクトル（食事の配膳係）を呼んでアルミニアの面倒を見るように命じ、やり残していた執務に取りかかる。

日が傾き始めた頃に、実家に顔を出していた妻のユリアが、コメス（女性が外出した時に警護兼浮気監視としてついていく奴隷）と一緒に戻ってきた。

「お帰り」

私は椅子から立ち上がり、妻を抱きしめる。

「ただ今戻りました」

「何か変わったことは？」

「葡萄畑のことで、父から色々話を聞いて参りました」

「ケーナ（夕食）の時に聞かせてくれ」

「分かりましたわ。それで、話が変わるのですが、新しい奴隷を手に入れたとか」

「ああ。パルティウスから頼まれた。母親との相性が悪くて、ずっと殴られていたらしい。私を買わなければ、目を潰して物乞いをさせると言われたので、つい買ってしまった」

「そうでしたか。オルナートリスク（美容師）の見習いなら、間に合っていると言おうと思っていたのですが」

「母親と同年代の女性が怖いそうさ。美容師は無理だろう」

「ということは、旦那様の玩具ですか？」

「まあ、その、なんだ。君には迷惑をかけない」

「まだ、子供ができていないのですか？」

「ここに来るまでに、彼女を見てきたんだらう？ 私もさすがにあの年齢の子供とフォトウエレ（性行為）しようとは思わんよ」

「でしたら、今晩は寝所にお邪魔してよろしいですか？」

（翻案者注・古代ローマの上流階級では、夫婦別室が自明だった）

ドムスに二階がある場合は、妻や女奴隷が寝所として利用した）

「もちろん良いとも」

「嬉しいですわ」

ユリアを抱き寄せながら、私は心の中で焦っていた。

今晩はエゲリアも寝室に来ると言っていたはずだ。

だが、妻であるユリアの誘いを断るわけには行かない。

「エゲリアも妬いているのでしょうか？」

私が困惑していると、ユリアが見透かしたように問いかけてきた。

「まあな」

虚を突かれた私は、つい本音を漏らしてしまふ。

妻とエゲリアがお互いを意識していることは、私も十分に承知している。

年齢が一つしか違わないからだ。

おまけに、エゲリアの方がユリアよりも先に私と知り合っている。

ユリアとの婚約が成立したのは三年前で、私が属州からローマに帰還した後のことだ。

そこから一年間同居をして、お互いの気持ちを確認合ってから正式に結婚した。

一方、エゲリアは私と一緒に属州からローマに戻り、ユリアが来

る前からこの家にいる。

これで採め事が起こらないわけがなく、実際に起こったのだが、幸いと言うべきか私はエゲリアを手元に置いたままユリアと結婚することができた。

とはいうものの、三者の関係が安定しているわけではない。

そこに私が己の欲望に負けて新たな奴隷を買い足した。

既にエゲリアは臨戦態勢に突入している。

ユリアもつられて動き出すに違いない。

「それでは、私の方からエゲリアに話しておきますわ」

妻は私の抱擁をほどき、悠然とタブリヌム（執務室）から出て行った。

私は執拗に髭をさすった。

妻と奴隷が主人である私を差し置いて密談する？

とても良い兆候には思えない。

### III

今夜は宴会の予定もなかったもので、夕食は簡素に済ませ、改めてアルミニアを奴隷達に紹介する。

彼らの態度は様々だが、私の趣味である事は理解しているだろう。陰口を叩いている輩もいるに違いないが、そんなことを気にして

いられない。

いまわの際に「ああしておけば良かった。こうしておけば良かった」と嘆くぐらいなら、この瞬間に好きなことをして、奴隷達から

蔑まれ、嗤われた方が良い。

新入りの紹介を終えると、彼女を改めて奴隷用のクビクルム（寝室）に連れ戻した。

アルミニアには、何かあったら私かストウルクトル（食事の配膳係）を頼るように念を押す。

我が家の配膳係は私には理解出来ないほどの年増好きで、子供に手を出す心配が無い。

また、そのせいか子供達も彼には安心してじゃれついている。

ストウルクトルにも、改めてアルミニアの面倒を見るように言い含め、自分の寝所に戻る。

ベッドに横たわり、ぼんやりしていると、入り口に人の気配がした。

半身を起こすと、薄暗い寝室にランプを持ったユリアとエゲリアが現れる。

二人とも全裸だが、ユリアは金の首輪を嵌めている。

「おいで」

私が手招きをすると、妻はテーブルの上にランプを置いて、奴隷と一緒にベッドをよじ上ってきた。

（翻案者注・古代ローマのベッドは脚が長く、踏み台を使わないと上に乗れなかった）

二人はそれぞれが両脇に座り、私のトゥニカを脱がしにかかる。

「二人で来るとは思っていたが、何を企んでいるんだ？」

「エゲリアと話しました」

全裸になった私の左側にユリアが腰掛けた。

エゲリアは私の服をたたんでいる。

「旦那様が趣味の奴隷をお買いになるなら、私達にも相応のご褒美を期待しても良いのではないかという話になりました」

「アルミニアを認める代わりに贈り物をしろと？」

「私もエゲリアも旦那様に誠心誠意尽くしてきたつもりですし、今後も尽くすつもりですが、それでも三人目を黙って見過ごすという気持ちにはなれません」

（翻案者注・ユリアは自分を奴隷の一人として数えているが、本来は妻である。そして、夫婦の性行為は子作りが目的であり、妻は性行為中に大声で悦びの声をあげたり、夫からセックスのイニシアティブを奪ってはならないという掟があった。更に性行為中の体位も、正常位か後背位に限定されていた。従って、ここでユリアが自分を奴隷に見立てているのは、妻としてすべき性行為中のルールを守らないという宣言をしたのと同じ意味がある。また、夫であるトゥリヌスがこれを咎めないのは、彼が妻に奴隷と同じような快楽を貪るためのセックスを要求しているからである）

「何が欲しいんだ」

「金の腕輪です」

「エゲリアは？」

「踊り用の衣裳を何着かお願いします」

「それでアルミニアの件に目をつむると？」

「はい」

ユリアとエゲリアは同時に言う、私が寝ている足下に腰を落とした。

彼女達は四本の手で、私のペニスと乳首を同時に愛撫した。

「悪い旦那様。妻の私に、奴隷と一緒に奉仕することを教えるなんて」

「君がこの家に来た時に、私とエゲリアがしているのを覗いていたのではないか」

「婚約者が見ている前で、あんな事をする男性がいますか？」

妻は私をなじりながら、男根を優しくごく手を止めなかった。

エゲリアは無言で私の肩の側に移動して、舌と指で乳首を刺激する。

私のプリアープスが、あつという間にそそり立った。

「参った、参った。ユピテルに誓う。欲しいものを買ひ与える」

二人の少女の拷問を受けた私は、続きをして貰いたくて即座に降参した。

「旦那様が懐の深い方で良かったですわ」

「君がメディアに呪われていなくて良かったよ」

(翻案者注・古代ギリシャの三大悲劇詩人の一人、エウリピデスの代表作『メディア』に登場する魔女メディアを指す。気が強く目的のためには平然と弟を殺害する残忍さと、自分を裏切った男に過激な復讐をする嫉妬深さを兼ね備えた苛烈な女性キャラクターとして描かれている)

安堵した私は脱力したが、二人の少女は愛撫を止めなかった。

「ユリア。しなさい」

私は手でウイルガ(陰茎)をさすっている妻に、口交を促した。彼女はただちにプリアープスを頬張って鼻を鳴らす。

「まあ。奥様にそんなことをさせるなんて。悪い人」

私の乳首を責めていたエゲリアが身体を起こし目を細めた。

(翻案者注・古代ローマで身分の高い男性が口で他人を愛撫するのはタブーだった。オーラルセックスに従事するのは奴隷か年少者で、この場合はエゲリアがフェラチオをすべきなのに、上流貴族の娘であるユリアにさせたのは、インモラルな行いと見做すことができる) 「二人きりの時はユリアにはいつもさせている」

私の説明を聞いたエゲリアは不服そうな面持ちになり、私に口づけを繰り返した。

「私がいるのに、奥様にさせるなんて！」

「いいのよ。今の私は奴隷だから」

踊り子が私を責めていると、顔を上げたとおぼしきユリアがなだめるような声を出した。

エゲリアを押しつけ頭を起こした私は、妻に新たな命令を下す。

「それでいい。今日は上に乗って娼婦のように腰を振りなさい」

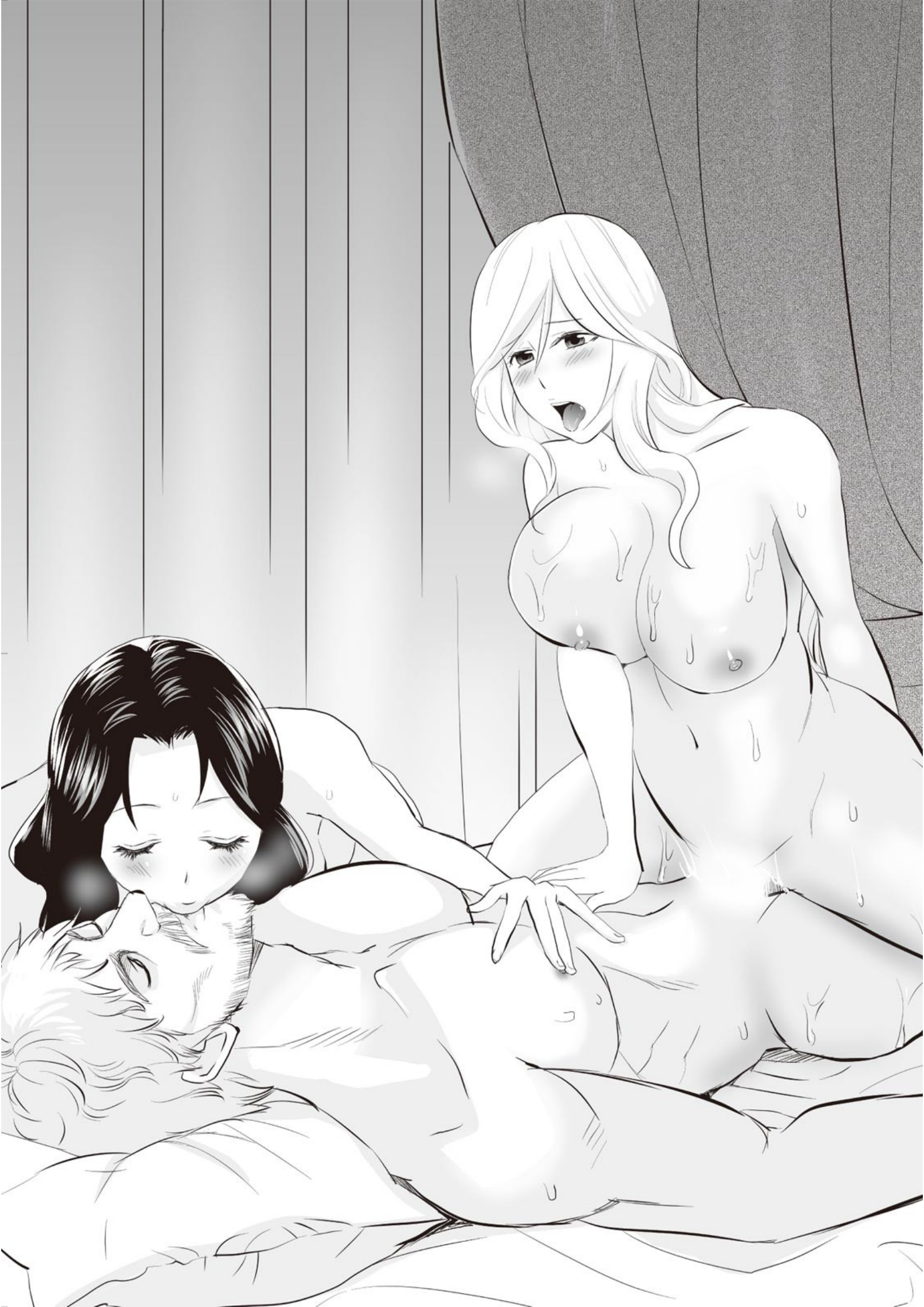
「はい」

ユリアはペニスを掴んで私に跨がると、腰を落として繋がった。彼女は私に覆い被さると、娼婦が男に奉仕するように腰を振る。

「そうだ。その調子だ」

私は顔を真っ赤にして息む妻を下から突いてからかった。

ついにユリアが狼のように唸り始めると、エゲリアが私の唇を塞



いで舌を絡めてくる。

「ずるい！ 奥様にばっかり！」

「お前は二番目だ」

「分かっているけど、ずるい！」

嫉妬の炎に包まれたエゲリアが私を呪いながらサーウィウム（ディープキス）している間にユリアが果てた。

彼女は私の身体の上で硬直すると、部屋中に響き渡るような声で吠える。

それでも私がプリアープスで彼女を突いてやると、泣いているのか笑っているのかよく分からない顔になって脱力した。

それでも私は妻への攻めの手を緩めなかった。

私の上半身にまとわりついたエゲリアを除け、身体を半回転させてユリアを組み伏せて更に突くと、彼女は泣きながら「死ぬ、死ぬ」と連呼し始める。

それで満たされた私は放精した。

汗まみれの妻は脚をだらしなく広げた格好で気を失っている。

ユリアから離れて一息ついていると、エゲリアが身体をくっつけてきた。

「奴隷の私じゃなくて、奥様にここまでやるんだ」

「金の腕輪を欲しがったからな。あれはお前の入れ知恵だろう？」

ユリアはあんなことを言うような女じゃない」

「うん。私もそろそろ新しい衣裳が欲しかったから」

「お前のお陰で大損だぞ」

「奥様より酷いお仕置きして」

エゲリアは情欲で虚ろになった顔を私の股間に埋め、一戦終えたばかりのペニスを舐め始める。

踊り子の熱心な奉仕のお陰で、私のウィルガ（陰茎）はすぐさま二戦目の準備を整えた。

#### IV

アルミニアを買ってから数日が過ぎた。

今のところ、彼女は病気も大きな問題も起こしていない。

食事をきちんと与え、なおかつ母親と同年代の女性が近づかなければ、場所がどこでも気にしないようだ。

ただし、文字が読めないのはまずい。

サルタティオ（表敬訪問）に来たパウサニアから書字板（翻案者注・板の上に蜜蝋を垂らして平らにしたもの。金属の棒で字を彫るように書く。字を消して再利用できた）を買ったので、しばらくしたら読み書きを教えねばならない。

残るは妻とエゲリアへの賄賂だ。

金の腕輪は我が家に来る商人から買うことが決まっている。

だが、奴隷のために仕立屋を呼ぶわけにはいかない。

昼前に仕事を済ませた私は、荷物持ち用の奴隷一名とエゲリアを連れて市場に赴いた。

踊り子用の衣裳を売っている店に行き、エゲリアに好みの服を選ばせる。

ついでに、男装用の裾が短いトゥニカ（貫頭衣）も買って、その場でエゲリアに着替えさせる。

女で脚が見える服を着るのは娼婦と相場が決まっているのでエゲリアは嫌がったが、男たちの注目を浴び始めると、すぐにまんざらでもない顔になる。

自分から踊り子になりたがったように、彼女は見られるのが大好きだ。

注目されるためならなんでもする。

キュベレー（翻案者注・フリギアで崇拜されていた地母神で、ローマにも伝わった。去勢された男性が神官を務め、祭りの際には女装して奇妙な踊りを踊った。また、女性神官がいる場合は乱交を采配したとされる。ローマ市民は祭事の参加を禁止されていた）の祭事に喜んで加わる手合いなのだ。

買物が終わり、荷物を奴隷に持たせた私は、エゲリアに下着を脱ぐように言い渡した。

彼女は顔を真っ赤にして抵抗する。

「無理！ こんな目立ってるのに！」

「お前ならできる。いつも腰をくねらせて踊っているだろう？」

「下着を脱ぐのと踊るのは違うから！」

「主人に逆らうのか？ こんなに服を買ってやったのに？」

私はわざとらしく凄んでから、エゲリアの耳元で囁いた。

「みんなお前を見てるぞ」

実際のところ、私とエゲリアのやりとりを聞いた男たちが店の前

に集まり始めていた。

服屋の親爺に小銭を握らせてやると、彼も「お嬢さん。脱いだ方が見栄えも宜しいですよ」などと適当な事を言って煽ってくれる。

より多くの視線に晒されたエゲリアは天を仰ぎ、その場でトゥニカの裾を捲り、スプリガークルム（下着）の紐を外しだした。

誰からも触れられていないのに彼女の息は荒くなり、両目が落ちて着きなくあちこちに動き回る。

指が震えているのか、スプリガークルム（下着）を脱ぎ終わるのに時間がかかった。

服屋の前ではエゲリア見たさの男共が蠅のようにたかっている。

これ以上騒ぎを大きくするのはまずい。

「行くぞ」

私はトゥニカの裾を抑えてもたつくエゲリアの背中を押して、その場から退散した。

荷物持ちの奴隷に先導させ、まだ人の流れが絶えない道に入ると、ユステイナのポピーナ（軽食堂）に向かう。

荷物持ち奴隷と私の間に挟まれたエゲリアは、執拗に太股を擦り合わせ、よろめきながら歩いていた。

その格好があまりにも面白かったので、私は思わず彼女のトゥニカの裾に手をつ突っ込んで尻たぶを掴んで揺すぶった。

すると踊り子は飛び上がり、振り返るや否や前屈みになって私を罵った。

「意地悪！ 分かってくるくせに！ 悪人！」

「何が分かっているんだ？」

「言えない！」

「そうか。それなら、話はここまでだ」

私はエゲリアに無理矢理前を向かせ、再び歩き出したところで尻をなで回してやった。

彼女は立ち止まると、恨めしそうにこちらを睨んで「悪人」と言ったが、声に力がこもっていない。

足取りは先ほどよりも更にふらついている。

ポピーナ（軽食堂）についた私は椅子に腰掛け、隣の椅子に手を置いた。

「ここに座れ」

エゲリアにそう言い付けると、彼女は観念した面持ちになり、トゥニカの裾を捲って手の平の上に腰を下ろす。

エゲリアの股間は雨が降った後の地面のようにぬかるんでいた。

顔を覗き込むと、だらしなく口を半開きになっている。

注文をとり私に近づいてきたユステイナは、すぐにエゲリアの様子がおかしい事に気付いて苦笑した。

「坊ちゃま。エゲリアちゃんが盛りのついた牝犬みたいになってますけど、何かあったんですか？」

「私を強請ったから罰を与えたんだ」

「あら。この前の女の子のことで、何かあったんですか？」

「相変わらず察しがいいな。新しい奴隷を買ったら、私を悪人呼ばわりした」

「本当の事じゃありませんか。坊ちゃんは大した悪人ですよ。普通の主人は、奴隷をこんな風に仕込んだりしないものです」

「その術を私に教えたのはどこの誰だったかな？」

「さあ。誰でしたっけね？ それでご注文は？」

ユステイナは笑いを押し殺した顔で注文を聞いてきた。

「肉が食べたいか？」

私は荷物持ちの奴隷に尋ねるふりをして目配せする。

「ええ。もちろんですとも」

荷物持ち奴隷はすぐに私の意図を汲み取って目を輝かせた。

「それじゃ、豚の煮込み、煮豆、ワインを人数分」

頷いた私は、店の女主人に料理の名を告げた。

その最中にもエゲリアの股間を優しくまさぐってやる。

「もう駄目。もう駄目」

ついに降伏を宣言したエゲリアは、私の股間に手を伸ばそうとした。

「何が駄目なんだ？ まだ言えないか？」

私は彼女の細い手を押さえると、虚ろになった瞳を覗く。

「ご主人様を罵った私に、きついお仕置きして下さい」

「良いだろう。それで、どこがいい？」

「ここでお願いします。もう、我慢出来ない」

エゲリアの返事を聞いた私は、椅子から立ち上がってユステイナに声を掛ける。

「奥の部屋は使えるか？」

「どうぞ。貸し切りにしますか？」

「いや、いい」

女主人に断りを入れた私は、エゲリアの手を引いて店の奥に入った。

梯子を上がって中二階に着くと踊り子は服を脱ぎ、壁に手をついて臀部を突き出してくる。

「お願い！ 早くお仕置きして！」

「反省しているか？」

「してます！」

私はエゲリアの臀部を手の平でひっぱたいた。

身体を強ばらせた奴隷は、金切り声を上げて失禁する。

「こら。ユステイナに叱られるぞ」

「申し訳ありません！ 嬉しくてお漏らししてしまいました！」

「更に仕置きが必要だな？」

「はい！ もっときついのをお願いします！ 申刺しにしてください！」

「い！」

「そうか」

スプリガークルム（下着）の紐をほどき、勃起したペニスを引っぱり出した私は、エゲリアの腰を掴んで背後からのしかかった。

プリアープスが女陰に飲み込まれるや否や、踊り子が低い呻き声を上げる。

男根が激しく締め付けられたせいで、彼女があっさり果てたことが分かったものの、後ろから突くの止めない。

エゲリアは階下に響くほどの大声で叫び、頭を振るが私から離れようとはしない。

華奢な身体をもてあそんでいると、限界が来たので射精した。

私がハスタ（男根）を引っこ抜くと、エゲリアはその場でしゃがみ込んだ。

私は彼女の毛髪を掴んで引っ張り、身体を半回転させる。

エゲリアは放心した面持ちでこちらを見上げたが、すぐに奴隷の役目を思い出したようで、プリアープスを頬張って後始末を開始した。

自らの蜜で汚した陰茎を綺麗に舐めると、彼女は改めて床に尻餅をつく。

「ああ、もう酷い人！」

「何が一番酷かったんだ？」

「歩いている最中に触ったこと！ 道の真ん中じゃ、今みたいな事できないのは分かってるくせに」

私は笑いながらエゲリアが脱いだ服を拾って手渡した。

トゥニカを身につけたエゲリアは、汗に濡れた髪を手ですいて整える。

私が下着を履こうとすると、少女は腰を落とし、萎えかけたペニスを頬張った。

彼女が舌を絡めると、プリアープスはみるみる力を取り戻す。

「お返しよ」

愛撫を途中で止めたエゲリアは、勃起したメントウラ（剛直）を



下着で包み込んだ。

「ご主人様も、たまには私がこんな気持ちだって分かれればいいんだわ」

私は頭を掻いて、奴隷の呪いを受け入れた。

二人で梯子を下りると、店内にいたほとんどの客が、こちらに視線を向けてくる。

「お前が大声を出したせいだ」

「ご主人様が出させたのよ。奥様だって大声で騒ぐじゃない」

「妻の話は止めろ」

私とエゲリアがお互いに責任をなすりつけながら席に戻ると、あきれ顔の荷物持ち奴隷とユステイナが待っていた。

V

日没間にプブリウスが来訪した。

彼は亡父の解放奴隷で、私が子供の頃、一緒に学校へと通った仲間でもある。

成人後、当家が所持する葡萄畑の管理人になった。

父が病死した際に遺言によって解放されたが、その後の年季奉公として今でも農園に残り続けてくれている。

優秀かつ信用のおける男だ。

私は彼を手放したくないために、平均的な小作人の三倍近い賃金を支払っている。

プブリウスが着くと一緒に軽めのケーナ（夕飯）をとり、二人の

奴隷に葡萄酒が入ったアンフォラ（首の長い陶器の一種。底部が尖っていた）を運ばせる。

ラエティア（現在のイタリア共和国、ヴェローナ）製だ。

私は開封したアンフォラから、ひしゃくで葡萄酒をすくい、濾したものに水を足した。

続いて銀のゴブレットにワインをついで、ユリアとプブリウスに渡す。

「甘い」

ワインに口をつけた妻は真剣な面持ちで唇を舐めた。

「甘いですね。干しぶどうのようだ」

プブリウスも同意の言葉を述べる。

「収穫した葡萄を陰干してからワインにするらしい」

私もワインを一口すすする。

「これだけ甘いと蜂蜜を入れる必要が無いな」

「ええ。当家のワインとは味が違いすぎます」

「しかし、同じ商売だ。ユリアはどう思う？」

私は何度もワインを含んでいる妻に感想を聞いた。

彼女はしばらく黙った後で口を開く。

「私なら、このワインをお湯で割って更に蜂蜜を足します」

「これ以上甘くするのか？」

「はい。コミッサティオ（無礼講）で飲んでいただければ、人気が出ると思いますわ」

（翻案者注・豪華なケーナ（夕食）の後に行われる宴会のようなも

ので、ワインの一気に飲みがよく行われていた。ただし、古代ローマ人はワインを薄めて飲んでいたため、急性アルコール中毒になる危険性は低かったものと思われる)

「甘口の方が飲みやすいのは間違いないでしょう」

プブリウスはまたしてもユリアの意見に賛同した。

お追従という口調ではない。

私も妻の着想に感心していた。

他人には口が裂けても言えないが、ユリアはワインの良し悪しが分かる。

しかも、それがどのようにすれば、より人気が出るのかを考える能力もある。

(翻案者注：古代ローマの上流階級において、女性の飲酒は厳禁だった。酔った勢いで不貞を働くおそれがあると考えられていたからである。飲酒をしているかどうかをチェックする目的で、妻には毎日夫にキスをする義務があった。これを「接吻制度」と呼ぶ。そこで飲酒していることが発覚した場合、餓死するまで部屋に閉じ込められたり、撲殺されることもあったという。トゥリヌスが「他人には口が裂けても言えない」と言っているのは、妻であるユリアの飲酒を容認している事態を指している)

「では、その飲み方を流行らせれば、このワインが今以上に売れると思うか？」

「はい。どうやって流行らせるかを考えなければなりません」

「シセンナと一緒に計画を練ろう」

「投機を持ちかけた方ですか？」

「そうだ」

「分かりました。でも、その前に試させてください」

ユリアは奴隷を呼び、蜂蜜と湯を持ってくるように申しつけた。

プブリウスは私に向かって妻を褒め称える。

「いい人を奥様にしましたね」

「君にそう言われると悪い気がしない」

「坊ちゃんまあちらの遊びがお盛んだったので、内心で心配しておりました」

「実は、その、なんだ。新しいのを買ってしまった。金髪の娘が欲しくてね」

「はあ。病気が治っておられないんですな」

「そう言うな。仕事はちゃんとしている。遊びに耽っているだけではないぞ」

「確かに、カデスで買って来た踊り子は、当家のワイン売り上げに貢献しているようですが」

「ああ。エゲリアをケーナで踊らせるだけで、我が家のワインが売れる」

「それでお願いが。そろそろ当家のワインを売るための宴会を開いてください」

「そろそろそんな時期か」

「来月あたりが頃合いかと」

「分かった。明日から準備を始めよう」

私とプブリウスが今後について話し合っている間に、ユリアがワインと蜂蜜を混ぜた飲み物を作っていた。

「どうぞ。美味しいですよ」

試飲した妻が、自信ありげな顔でゴブレットを手渡してくる。

私は勧められるまま、カップの縁に口をつけた。

ユリアの言葉は真実だった。

## VI

サルタテイオ（表敬訪問）終了後、サエプタ・ユリアに店を構える商人が来た。

ユリアと交わした金の腕輪をプレゼントするという約束を果たさねばならない。

タブリヌム（執務室）のテーブルに並べられた装飾品の数々を見るユリアの瞳はどんな金よりも美しく輝いている。

言うまでもないことだが、私の目は死んだ魚のようだ。

ユリアが自分に似合う腕輪を探している間、漫然と商人が持ってきた物品を眺めていると、手で掴める程度の大きさをした髑髏の像が目に入った。

恐らく黄銅製で、台座に文字が刻んである。

「明日を信じず、その日を摘め（*Carpe diem quam minimum credula postero*）」

ホラティウスが詠んだ詩の一節だ。

「これをくれ」

私が髑髏の像を所望すると、商人は愛想笑いを浮かべてくれた。

「分かりました」

私が購入を決めた像を手にとって眺めているうちに、ユリアも蛇を模した金のブレスレットを選んだ。

アルミニアを買った時の数倍という出費だったが、夫婦仲を円満に保つためにはやむを得ない。

商人が帰ると、ユリアは私に抱きついて盛んにオスクルム（唇を閉じたキス）をしてきた。

「綺麗だよ。グラティア（美と優雅の女神。英語ではグレイス）に祝福されている」

私も妻を褒めそやすことを忘れない。

「嬉しいですね、旦那様」

抱擁が終わると、ユリアは私の手を引つ張り、服の上から豊かな乳房に触れさせる。

「おい。まだ昼にもなっていないぞ」

「旦那様が綺麗だと言って下さる間に子を授けて貰わないと、妻としての務めも果たせません」

「確かに子供は欲しいな」

「それなら、すぐにでも」

苦笑した私は彼女をクビクルム（寝室）に向かわせた。

それからストウルクトル（食事の配膳係）を呼ぶと、鶏卵が入った深皿とぬるま湯を入れた深皿を持ってくるように言い付ける。

私はタンヌスを漁り、金箔を貼った重く小さなオリスボス（張り型）

を取り出した。

(翻案者注・古代ローマの張り型は、木の棒で作った芯に男根状に加工した革細工を被せ、中に詰め物をしたものだった。張り型の製作は革細工職人が行っており、オーダーメイドだったようだ。しかし、トゥリヌスが使用している張り型は、恐らく金属製で金箔を貼ったものであり、当時のアダルトグッズの中では特殊な部類に入るものと思われる)

ストウルクトルが持ってきた深皿の片方にオリスボス(張り型)を入れた私は、クビクルム(寝室)に足を踏み入れた。

ユリアは生まれたままの姿でベッドに腰を下ろしている。

「それをするのですか？」

彼女は私の持っている皿を目にすると、頬を赤らめてうつつむいた。

「子を授かりたいのだろうか？」

私は深皿と鶏卵をテーブルに置き、服を脱ごうとする。

すると妻が大きく首を振った。

「エゲリアには脱がせてもらっているのでしょうか？」

「まあ、そうだが」

「でしたら、私もそうします」

ユリアはベッドの上から私を手招いた。

彼女はかいがいしい手つきで私からトゥニカとスプリガークルム

(下着)を奪い去る。

「今から私は旦那様の奴隷ですよ」

妻はそう言って私を仰向けに寝かせると、両脚を割って間に潜り

込む。

「婚約した時は、まさかこんな事をするとは思いませんでしたわ」

彼女はウィルガ(陰茎)を指でしごきつつ頬張った。

ユリアに愛撫されている内に、彼女を娼婦のように振る舞えるように仕込んだ時の思い出が蘇ってくる。

すると、ペニスが驚くほど硬くそそり立った。

「まあ」

妻はうっとりとした眼差しで、私のファスキヌス(喜悦棒)を見つめている。

「そろそろ始めるか」

ユリアの奉仕が一段落したのを見計らった私は、一旦ベッドを下りて深皿に入れた湯に浸けていた張り型を引っ張り出した。

金属製のメントウラ(剛直)は人肌ほどに温まっていた。

私はそれをユリアに手渡し、鶏卵を割って深皿に卵白だけを落とす。

「牝ライオンのポーズをとれ」

妻から張り型を取り返した私は、彼女に四つん這いの姿勢をとらせた。

私は深皿に落とした卵白を指でかき回してから掬い、ユリアのアヌス(肛門)に塗りつけていく。

「怖い、怖い」

妻は怯えた声を上げたが、私は彼女の哀訴を無視して指を尻穴に潜り込ませた。

それから優しく愛撫をしてやると、あつという間に緩んでくる。

「入れるぞ」

頃合いを見計らった私は、張り型にも卵白を塗り、その先端でユリアのアヌス（肛門）を貫いた。

張り型が体内に埋没すると、妻はすすり泣きを漏らす。

しかし、彼女のクンヌス（女性器）からはとめどなく蜜が溢れていた。

「仰向けになれ」

私は彼女をベッドに寝かせると、身体を二つ折りにする。

「入れるぞ」

ペニスの先端を女陰にあてがった私は、ユリアの身体に上からのしかかった。

彼女の体内で、張り型と私のハスタ（男根）が擦れ合った。

二人の男から同時に犯されたような快楽を与えられたユリアは、両脚を私の肩に引っかけた姿勢で、部屋中に響き渡るような大声で吠える。

「旦那様！ 堪忍して下さい！ こんなことされたら、頭がおかしくなってしまうす！」

私は妻の訴えに耳を貸さず、黙々と腰を振った。

彼女はやがて私の腕にしがみつき、サーウィウム（ディープキス）をねだってくる。

私は彼女と舌を絡め、唾液を吸いながら犯すのを止めなかった。長い接吻が終わるとユリアは惚けた面持ちになり、笑ったり泣い

たりしながら狼のように吠える。

本人が言っていたとおり、頭がおかしくなったらしい。

もつとも、私は妻がフォトゥエレ（性行為）の喜びに翻弄されている時の態度だと判っているので、それほど気にしない。

むしろ、彼女が気持ちよくなるだけ、妊娠する可能性が高まるのだ。

（翻案者注・古代ローマでは、強い快感を伴う性行為の方が妊娠しやすいと信じられていた。ユリアが肛門に張り型を挿入されたのも、彼女自身が「子を授けて貰わない」と言っているのが原因である）  
とうとう、いつものようにユリアが喚きながらお漏らしを始めたところで、私も彼女に放精した。

呼吸を整えて額の汗を拭い、ようやく妻を解放してやるが、彼女は目を見開いたまま微動だにしない。

「どうだった？ 妊娠したか？」

私はユリアの顔を軽くはたき、フォトゥエレ（性行為）の感想を訊いた。

「申し訳ありません、旦那様。腰が抜けてしまったようです」  
妻はどこか遠くを見つめながら私に謝罪した。

「しばらく休んでいなさい。ただ、張り型は抜くぞ」

私は妻の身体を無理矢理曲げて、尻穴から張り型を抜いてベッドを下りる。

偽物のメントウラ（剛直）を深皿に戻していると、入り口に人の気配がした。



振り返るとアルミニアがこちらをじつとうかがっている。

「どうしたんだ？」

「ここから凄いい声が聞こえてきたから、気になって来ました」

「覗いていたのか？」

「はい」

「何をしていたのか判るか？」

「フォトゥエレ（性行為）ですか？」

「そうだ。見たことはあるんだな？」

「はい。母がしていたのを見たことがあります」

「そうか」

私は全裸のままアルミニアに近づいた。

彼女はその場から逃げようともせず、私の股間に視線を注いでくる。

「私のウィルガ（陰茎）が気になるか？」

「はい。ちゃんと見るのは、初めてなので気になります」

「パルティウスはお前を処女だと言っていた」

「はい。処女です」

「私がお前とフォトゥエレ（性行為）したいと言ったらどうする？」

「仰る通りに致します」

「そうか」

私は反射的にアルミニアに襲いかかりたい衝動を押し殺した。

まだだ。

エゲリアの時も、ユリアの時も、いやその前から私には自分に課

した手順がある。

それを守らねば、ただフォトゥエレ（性行為）をしただけになってしまふ。

もちろん、それだけの相手もいる。

たとえば娼婦がそうだ。

だが、手元に置いておく奴隷に同じ事をするつもりはない。

それなら、最初からルパーナル（娼館）に行けばいいだけの話ではないか。

「スプリガークルム（下着）を脱いでトゥニカをへそまで捲れ」

私の命令を聞いたアルミニアは、下着の紐をほどいてトゥニカを捲る。

「足を肩幅まで広げろ」

金髪 of 奴隷に足を開かせた私は、彼女の股間に手をさしのべる。

アルミニアのクンヌス（女性器）は熱く湿っていた。

私が濡れた指を彼女の鼻先に突きつけると、顔を真っ赤にしてうつむいてしまふ。

「すみません」

「フォトゥエレ（性行為）に興味があるか？」

「はい」

「分かった。少しずつ手ほどきをしてやろう」

「はい」

「だが、今はまだだ。下着を履いて、ここから立ち去りなさい」

私はアルミニアにそう告げると、きびすを返して寝室に戻った。

奴隷とのやりとりを聞いていたかどうかを確かめるべくユリアに近づいたが、彼女は既に寝息を立てていた。

## VII

サルタティオ（表敬訪問）終了後、ノーマンクラトール（翻案者注・名告げ奴隷。主人に挨拶しようとする人との氏名と素性を主人にささやく係で優れた記憶力を要求された）と相談して、シセンナ宅への使いに出せるクリエンテス（庇護民）を選ぶ。

ラエティアにある葡萄畑の共同経営について、細部を詰めるための話し合いがしたので、彼の予定を知りたかったのだ。

シセンナとの付き合いも、もう二十年近くになる。

同じレートル（修辞学教師）に師事したのがきっかけで知り合い、いつの間にかお互いの家を行き来するような関係になり、付き合いが途切れずに今まできた。

私は少女が好きでシセンナは少年が好き、私の家は葡萄の栽培が仕事で彼の家は羊の飼育が仕事と、似ているところがほとんど無いのだが、一つだけ共通する特徴がある。

二人とも背が高いのだ。

肩幅も広い。

私がシセンナとレスリングをして、なかなか勝負が決まらなかった時のことを思い出していると、タブリヌム（執務室）にアルミニアが現れた。

手に書字板を持っている。

「おお、そうか。そろそろ時間か」

「はい」

椅子に座っていた私はアルミニアを抱え、膝の上に乗せた。

彼女は書字板に鉄筆を構える。

私が単語を発話すると、アルミニアはそれを文字に起こした。

綴りが間違っていた場合は、私が訂正する。

アルミニアの物覚えは悪くない。

一日に一時間ほどの勉強で、どんどん単語を覚えていつている。

しばらくすると、アルミニアが飽きてきたのが態度から伝わってきた。

「今日はここまでにしよう」

私が授業の終了を告げると、金髪の少女は書字板を机において大きく伸びをした。

「この家にもだいたい慣れたか？」

「はい」

「誰かに嫌がらせをされたことはあるか？」

「いいえ。みんな優しい人達ばかりです」

「居心地が良いか？」

「はい。誰も私のことをぶたないし、それに食事が美味しいし」

アルミニアはそう言うと、私を仰ぎ見た。

「ご主人様を買って貰って運が良かったです」

「そうか」

私は彼女の目を覗き込み、深く頷いた。

「お前にはいずれマッサージのやり方を覚えて貰う」

「はい」

「後はフォトゥエレ（性行為）だな。そろそろ手ほどきを始める」

「はい」

私はアルミニアの金髪を撫で、彼女を膝から下ろした。

「スプリガークルム（下着）を脱ぐんだ」

「はい」

少女がトゥニカを捲って下着の紐をほどいている間に、私はテーブルの上に銀の平皿を置き、そこに深皿から少量のオリーブオイルを注いだ。

また、その脇に麻のナプキンも並べておく。

「できました」

アルミニアが脱いだスプリガークルム（下着）を私に手渡した。

卓上に少女の下着を置いた私は、彼女を再び膝の上に乗せる。

「脚を開け」

私の声を聞いたアルミニアは、脚から力を抜いた。

彼女のトゥニカを捲った私は、平皿に垂らしたオリーブオイルを指先につけ、彼女の股間に差し込んだ。

油まみれの指で優しくクンヌス（女性器）を愛撫していると、少女の息が荒くなってきた。

「気持ち良いか？」

低い声で囁くと、アルミニアは何度も頷いてみせる。

「気持ち良いです」

「よし」

私は更にオリーブオイルを足して、ピステイッラ（めしべ）に刺激を与えていく。

やがてアルミニアは私のトゥニカを掴み、呻きながら両脚を突っ張らせた。

彼女が果てたのが判った私は、股間から指を抜く。

「気持ちよかったか？」

「はい」

「これからは、字の勉強が終わったら、必ずこれをするぞ」

「はい」

「お前の身体は華奢すぎる。まだフォトゥエレ（性行為）をしても怪我をするかもしれない」

「はい」

「だから、時間を掛けて慣らしていくから、そのつもりでいろ」

「はい」

「よく頑張った。これでクンヌス（女性器）を拭きなさい」

一枚のナプキンで手を拭った私は、もう一枚をアルミニアに渡した。

彼女は億劫そうに立ち上がり、股間をナプキンで拭くと、ほんやりした面持ちで私に視線を向けてくる。

「もう終わりですか？」

「そうだ。下着を履きなさい」

私はテーブルに置いたスプリガークルム（下着）をアルミニアに



返却した。

下着を着け終えた少女は私の手に接吻すると、おぼつかない足取りでタブリヌム（執務室）を出て行った。

私は椅子から立ち上がり、何度か深く息をした。

その拍子に、卓上に置いた黄銅製の髑髏と目が合った。

私は小さな髑髏の頭頂部をなで回した。

それから台座に彫ってある「明日を信じず、その日を摘め」という言葉を詠唱した。

私もいざれ、この髑髏のようになるのだ。

そうなるまでに、摘みたい花は摘んでおかねばならない。

髑髏の像から手を離し、ソファに座った私は、目を閉じてこれらのことに思いを巡らせた。

しばし物思いに耽っていると、人の気配がした。

目を開くと傍らにエゲリアが立っていた。

彼女は無言で私の隣に腰を下ろす。

「ここに座るなど言っていたはずだが」

「知ってます」

「私を怒らせたのか？」

「そうです」

「アルミニアを見たんだな？」

「うん」

「お前も使うぞ」

私は不意にエゲリアの毛髪を掴み、顎を上げさせてから彼女に

サーウィウム（ディープキス）をした。

踊り子奴隷は一瞬だけ驚いて目を開いたが、すぐに舌を絡めてくる。

長い接吻が終わると、私は彼女の手首を掴み自らの股間に導いた。

「大きくなってる」

下着の上から私のペニスに触れたエゲリアが歓喜の声を上げた。

私は彼女の髪の毛を優しく撫でながら、抱きしめてやる。

「アルミニアにはまだフォトゥエレ（性行為）は無理だ」

「うん」

「だから、私はしたくなったらお前を使う」

「嬉しい」

「ただ、アルミニアのフォトゥエレ（性行為）の手順を教えるのにもお前を使う」

「どういうこと？」

「あのプーパ（お人形さん）の前で、私とするんだ」

「あの子の前で？」

「そうだ」

「酷い！ 私が焼き餅を焼いているのを知ってるくせに！」

「だからやらせるんだ。お前が嫌ならユリアでする」

「駄目、駄目。奥様を使わないで。私がする」

「お前が物わかりが良くて良かったよ」

ソファから立ち上がった私は下着の紐を外し、勃起したハスタ（男根）を取り出した。

「舐めろ」

私が命じるとエゲリアはすぐさま床にしゃがみ込み、私のプリアープスを頼張った。

### VIII

サルタテイオ（表敬訪問）の時間に、選んでおいたクリエントス（庇護民）の一人を呼んで、シセンナ宅への使いを依頼してから、ノーマンクラートル（名告げ奴隷）と一緒に宴会に呼ぶ知人の一覧を作る。

宴会は当家のワインを売るには必須の行事で、何が何でも盛り上げねばならない。

幸い、我が家にはエゲリアがいるので余興は完璧だ。

料理に関しては、ユリアの実家かシセンナから料理人を借りてきた方が良いということになった。

他に必要なのは、エゲリアの脇を固める踊り子兼娼婦だろうか？とにかく準備に時間と金がかかる。

あれこれと頭を捻り、招待状の文言を書いた私は、それを持ってユリアを探す。

妻は隣室で飲み物をすすっていた。  
酢の匂いが微かに漂ってくる。

ポスカ（翻案者注・旅人や軍人が飲んでた飲料水。ワインビネガーと水とハーブを混ぜることによって腐敗を防ぎ、長期間の携帯を可能にしていた。ただし、美味しい飲み物ではない）を作ったの

だろう。

「君がポスカを飲むなんて珍しいな」

「旦那様と一緒にでない限り、ワインは飲みませんわ」

カップを置いたユリアは立ち上がり、私に腕を回すと接吻した（翻案者注・ユリアは「接吻制度」を実行して、自分がワインを飲んでいないことを証明しようとしている）。

酒の匂いはしない。

私は妻を優しく抱きしめた。

彼女は私に身体を預けてくる。

「何か御用ですか、旦那様？」

「宴会の招待状を作った。読んで聞かせるから、おかしいと思ったら指摘するんだ」

「分かりました」

ユリアは名残惜しそうに私から離れると、再び椅子に腰を下ろした。

私は丸めていたパピルスを開き、招待状の文言を読み上げる。

「旦那様は文章を書くのが上手ですね。素晴らしいですわ」

妻は私を褒めそやした。

気をよくした私は、妻の頬に口づけする。

「ありがとう」

「婚約前に、初めてお手紙を貰った時から、お上手だと思っていました」

「そういえば、最初に会った時も君は私の文を褒めてくれたな」



「はい。でも、他のこともお上手でしたけど」

ユリアはそう言うのと頬を赤らめ、両手で口を覆った。

「嫌だったか？」

私は笑いながらパピルスを巻き直す。

「いいえ。そのかわり、明日の朝にアルミニアとタブリヌム（執務室）で同席させて下さい」

「どういうことだ？」

「旦那様がアルミニアに手をつけ始めたこと耳にしましたから」

「誰から聞いた？」

「秘密です」

「我が家に主人の知らない秘密があることが許されるのか？」

私が苦り切った顔を見ると、妻は笑いを堪えるように下を向いた。

「それで、どうしたいんだ？」

「あの子に、主人に仕える手本を私が見せるつもりです」

「それはエゲリアにさせようと思っっているんだが」

「あら、旦那様。フォトゥエレ（性行為）の時は奴隷になれと仰ったのは、旦那様ですわ」

「確かにそうだ」

「エゲリアの役得を見逃すつもりはありませんので」

「分かった」

妻兼奴隷にやり込められた私は、降参の印に手を上げた。

ユリアは目を細め、ポスカの入ったゴブレットに口をつける。

「話が変わるが、招待状の紙をパウサニアスの工房で買ってくる」

「サルタティオ（表敬訪問）の時に頼めば良いのではないですか？」

「たまには書店に顔を出すのも悪くない」

「分かりました」

「それほど時間がかからない。昼過ぎまでには戻る」

「分かりました。行つてらっしゃいませ」

机にゴブレットを置いたユリアは再び立ち上がり、私にサーウィウム（デーパーキス）を求めてくる。

それに応じた私は、護衛の奴隷を二人とノーメンクラートル（名告げ奴隷）を呼び、パウサニアスの店まで歩き出す。

相変わらず人混みが酷い。

私は頭を振って周囲を見回しながら、背後から護衛に道順を指示していく。

パウサニアスの店は、みすばらしい路地にあった。

さすがにこのあたりまで来ると、人いきれはそれほどでもなくなってくる。

護衛の二人を店の前に立たせ、ノーメンクラートル（名告げ奴隷）と一緒に店内に入ると、店の奥にパウサニアスが座っていた。

初老の解放奴隷は驚いた顔で椅子から立ち上がる。

「おお、トゥリヌス様。どうかおなさいましたか？」

「宴会を開くの、招待状の複写がある」

「何枚ほどですか？」

「予備を含めて十二枚だ」

「パピルスでよろしいですか？ それとも羊皮紙にしますか？」

「パピルスで十分だ。ただし、質の良いものを頼む」

「代筆はどうしますか？」

「うちの奴隷にさせるつもりだが」

「うちの奴隷にさせてくれませんか？ 修行が上手くいって、使えるようになったのがいるんです」

「値段は？」

「文字の量が分からなければ何とも言えません。原文を持っていらっしやるようでしたら、拝見させて下さい」

私が丸めたパピルスを渡すと、パウサニ阿斯はそれを開いて文面を確かめる。

「相変わらずお上手ですな」

「妻にも褒められた」

「詩集を出されては？」

「残念だが、そちらの才能は無い」

「分かりました。話は変わりますが、この文章量なら一日で何とかなると思います」

「仕事を頼む前に、その奴隷が書いた文章を見たい」

「分かりました」

パウサニ阿斯は店の奥に引っ込むと、しばらくして一人の少女を連れてきた。

年齢はエゲリアと同じぐらいだろうか？

着ているトゥニカも顔もインクで薄汚れている。

顔立ちは整っているが無愛想だ。

私を見ても軽く頭を下げるだけで、愛想笑いすら浮かべようとしていない。

「ニケです。三年前に買いました」

「よろしく願います」

私はニケから受け取ったパピルスに視線を落とす。

書かれていたのは、『農耕詩』（翻案者注・ウェルギリウスの詩集）

の一節だった。

文字に蔦のような装飾がなされている。

「これは凄いな」

深く頷いた私はニケの腕前を褒め称えた。

態度は気に入らないが腕は良さそうだ。

「それではニケに代筆させると言うことでよろしいでしょうか？」

「ああ。一日がかりということは、受け渡しは明後日かな？」

「そうなります」

「分かった。支払いはサルタテイオ（表敬訪問）の時でいいか？」

「承知いたしました」

「値段はどうする？ まだ聞いてなかったぞ」

「パピルスの種類にもよりますが、一枚あたり三セステルティウスでいかがでしょうか？」

「そんなところだろう。用意しておくよ」

代書を頼んだ私はしばらく本を漁ってから、ノーメンクラトールを伴ってパウサニ阿斯の店を出た。

護衛の奴隷達を呼び、行きよりは空いてきた道を掻き分けて帰宅

する。

家の入り口には、シセンナ宅に行つて貰つたクリエンテス（庇護民）が立っていた。

彼の話によると、シセンナは今日の九時からトラヤヌスのテルマエ（公衆浴場）に顔を出すらしい（翻案者注・古代ローマでは日の出を一時と数えていた。従つて現代の時間で日の出が午前六時であれば、古代ローマの九時は午後二時あたりに該当する）。

話をするのであれば、そこが良いとのことだった。

クリエンテスに礼を述べ、駄賃として一セステルティウスを渡した私は、邸内に入ると靴を脱ぎ、タブリヌム（執務室）の椅子に腰掛ける。

紹介状の代筆は頼んだ。

次はシセンナと投資の話になる。

それが終わったら宴会の準備を始めよう。

パテル・ファミリアース（家父長）として、せねばならない仕事は山のようにある。

その大半は私がしたいことではない。

卓上に飾つた黄銅製の髑髏を引き寄せた私は、その頭頂部を撫でた。

私の母もこうなった。

私の父もこうなった。

私も間違いなくこうなるだろう。

私の心中で、唐突に恐怖が鎌首をもたげた。

やりたいことの大半が出来ないまま、髑髏になるのは嫌だ。

死の床につき、身動きの出来ない身体で「ああすれば良かった。こうすれば良かった」と悔やみながら死んでいくのは絶対に嫌だ。

私は足踏みを繰り返した。

そこに書字板を持ったアルミニアが現れる。

髑髏を目にした金髪の少女は、その場で立ち止まった。

「おまじないですか？」

彼女は至極当然の質問を発し、私の傍らまで歩いてくる。

そのお陰でオルクス（死神）の恐怖から解き放たれた私は大きく息を吐いた。

指を髑髏から離し、アルミニアに笑みを向ける。

「いや、考え事をしていただけだ」

「お邪魔ですか？」

「いや。お前のお陰で助かったよ」

「意味が分からないんですけど」

「分からなくてもいい」

「はい」

「今日も字の勉強をするつもりだったのか？」

「はい」

「今日はテルマエ（公共浴場）で知り合いと会うから時間が無い」

「そうですか」

アルミニアはがっかりした顔を見ると肩を落とした。

その仕草があまりにも可愛かったので、私は思わず彼女を膝に乗

せてしまおう。

「勉強はしないんですよね？」

「しない。お前を膝に乗せたかったただけだ」

「はい。それじゃ、あれもしないんですか？」

「あれとはなんだ？」

「気持ち良いことです」

アルミニアは両手を股間に添えた。

私は笑いを堪えつつ、彼女の膝を撫でる。

「あれは気持ちよかったですか？」

「はい」

「またしたかったのか？」

「はい。駄目ですか？」

「駄目じゃないぞ。スプリガークルム（下着）を脱ぎなさい」

金髪の少女を下ろした私は、平皿にオリーブオイルを垂らした。

アルミニアは再び私の太股に座り、脱いだスプリガークルム（下

着）を私の手に乗せる。

彼女のトゥニカをへそまで捲った私は、オリーブオイルに浸した

手を股間に差し入れた。

クンヌス（女性器）をくすぐり始めると、たちまちアルミニアの

呼吸が荒くなる。

「気持ち良いか？」

「はい」

私が更に時間をかけて指で愛撫すると、彼女は両脚を突っ張らせ

て呻き声を上げる。

少女の股間から手を抜いた私は、ナプキンを用意していないことに気がついた。

仕方が無いので、手の汚れをトゥニカの裾で拭き取る。

「下りなさい」

私に促されたアルミニアは、床に足をつけるとその場にしゃがみ込んだ。

すると頃合いを見計らっていたかのように、ユリアが衝立の影から現れる。

「おいたは終わりました？」

「聞いていたのか？」

「はい。いけませんか？」

「いや」

「自分のことを思い出していました。私もこうやって、旦那様に仕込まれていったんですよね」

ユリアは放心状態のアルミニアを見下ろしてから私に近づいた。

彼女は私の前で跪き、股間に顔を埋めてくる。

「続きは私がしてもよろしいでしょうか？」

「見せたいのか？」

「先ほど、約束して下さったではありませんか」

「そうだな。それなら、まず服を脱げ」

「はい」

ユリアはストラ（女性用の貫頭衣。上流階級の女性にしか着用が

許されていないかった)の紐を緩めて頭から抜き去ると、ストロピウム(ブラジャー)と下着も外して全裸になった(翻案者注:古代ローマでは女性がセックスによって快感を得ることが推奨されていたものの、全裸になるのははしたない行為と見做されていた。従って、上流階級の女性や高級娼婦は、ストロピウムを着用したままセックスするのが一種のマナーになっていたと考えられている。しかし、ユリアはここでも全裸になっている。これは、性行為中の彼女が夫によって奴隷と同じ扱いを受けていることを示唆している)。

全裸の妻は四つん這いの姿勢で私に近寄った。

私は椅子から立ち上がり、トゥニカを捲る。

「よく見ているのよ」

ユリアはアルミニアを一瞥すると、私のスプリガークルム(下着)の紐に指をかけた。

金髪の少女は女主人に言われたとおり、床に座って様子をうかがっている。

下着が外れると、私のメントウラ(剛直)がそそり立った。

ユリアはそれに片手を添え、ゆっくりとしごき出す。

「お前も旦那様を悦ばせるために、こういうことをしなければならぬのよ」

「はい」

「きちんとご奉仕すれば、旦那様に女としての悦びを教えてもらえるはずですからね」

「フォトウエレ(性行為)ですか?」

「そうよ。最初は痛いけど、しばらくすれば慣れるわ。旦那様はお上手だから」

「はい」

私のハスタ(男根)がそそり立つと、ユリアは手を動かしつつ頬張った。

「アルミニア。見るんだ」

口が使えなくなった妻の代わりに、私が奴隷に指示を下す。

「はい。口で啜るんですね?」

「そうだ。噛まないように、舌で突いたり吸ったりするんだ」

「味はするんですか?」

「指と同じだよ」

「美味しいのかと思いました」

「ルカニカ(ソーセージの一種)じゃない」

私がアルミニアの食い意地に呆れている最中に、ユリアの動きが激しくなった。

「いいぞ」

私は妻の頭を撫でてから、アルミニアを手招きする。

「こうやって、口と手を一緒に動かすんだ」

「はい」

「そうしている内に、私が射精する」

「はい」

「それを飲むんだ」

私は菌を食いしばり、ユリアの頭を抱えると、彼女の口内に射精



した。

しばらくして腰を引くと、妻は口を開けて奴隷少女に精液を見せる。

「これが旦那様の出したものよ」

「美味しいんですか？」

「苦塩っぱいわ。唾を濃くしたような感じ」

ユリアは口を閉じ、私の出したものを飲み込んだ。

アルミニアは物欲しそうに指をしゃぶる。

「私も食べてみたいです」

「お腹はいっぱいにならないわ」

「そうですか」

「貴女は食べるのが好きなのね」

妻は苦笑いを浮かべて口の端を拭う。

「今日はここまでにしよう。九時からテルマエ（公衆浴場）でシセンナと落ち合うことになっているんだ」

「まあ。それは残念ですね」

ユリアは珍しく不服を述べたが、それ以上の抵抗をしようとはせず、床から立ち上がって服を身につけた。

「君も来るか？」

私もスプリガークルム（下着）を履き直し、妻を浴場に誘う。

「一緒に帰らせて下さい」

笑顔を浮かべたユリアは、アルミニアのいる場所を振り返った。

「この子も連れて行くのでしょうか？」

「マッサージ係にするつもりだからな」

「少しお待ち下さい。お化粧を直してきます」

私が首肯すると、妻は足早にタブリヌム（執務室）から出て行った。

## IX

トラヤヌス浴場の入り口は人で溢れていた。

私も一団を率いているので、他人を悪し様に罵るわけにはいかない。

護衛の奴隷二名を先頭に、ノーメンクラートル（名告げ奴隷）、脱衣場で脱いだ服を監視するための奴隷、シセンナとの連絡を取り持ってくれたクリエントス（庇護民）と彼の家族、ユリアと彼女の Comes（女性が外出した時に警護兼浮気監視としてついていく奴隷）、そしてアルミニアにエゲリアと大所帯だ。

幾らか待って入場した私は女達と分かれてアポデュテリウム（脱衣場）に入り、スプリガークルム（下着）一枚になった（翻案者注：公衆浴場の脱衣場は男女別々だった）。

奴隷の一人に衣類の監視を命じ、列柱廊に囲まれた運動場に顔を出す。

シセンナはすぐに見つかった。

私もそうだが、彼も背が高いので目立つ。

シセンナの周りには少年や青年が集まっていた。

そのほとんどが、並みの女性など及びも付かないほど美しい。

少年はシセンナの奴隷で、青年は解放奴隷だ。

シセンナの奴隷の買い方は決まっている。

まず、年端もいかない少年を買って愛玩の対象として、二十歳を超えたら解放して自らのクリエントス（庇護民）にする（翻案者注・ローマ市民の男性同性愛者が、若い奴隷以外を性的な対象とすることはタブーだった）。

このやり口を繰り返したせいで、シセンナの取り巻きは多い。

噂によると元老院はもちろんのこと、皇帝にすら一目置かれていないらしい。

だが、一番放っておかないのは女達だ。

今だってシセンナ一行見たさに、半裸の女達が獲物を狙う猫のように彼らの周囲をうろついている。

「トゥリヌス！」

私が近寄っていくと、シセンナが大声を上げた。

私は彼と抱き合い、頬に接吻する。

「ここに呼ばれると思わなかったよ」

「君とレスリングをしたくなかったんだ」

「そう言うと思ったよ」

私は護衛の一人にオリブオイルの入ったテラコッタ（素焼き）を持ってこさせた。

それからスプリガークラム（下着）を脱いで全裸になり、油を全身に塗る。

加齢のせいでだいぶ衰えてきたが、それでもまだ一勝負をするぐらいの力は残っているはずだ。

「やるか」

シセンナの声を聞いた私は前傾姿勢になり、彼と組み合った。

首に腕を回して引っぱり、腕を掴んで引っぱり、投げられないように両脚を踏ん張っていると、あつという間に息が切れてくる。

汗とオリブオイルが混じった濃厚な匂いが、私とシセンナから立ち上った。

何試合かした後、私は負けを認めて手を上げる。

「今日は私の負けだ」

私の敗北宣言を聞いたシセンナの取り巻きからどつと歓声が上がった。

運動場に腰を下ろした姿勢で周囲を見回すと、下着姿になったユリアと彼女のCOMES、エゲリア、アルミニアが柱廊からこちらをうかがっているのに気がついた。

どういうわけか、アルミニアの表情が険しい。

「楽しかったよ」

私が金髪の奴隷の態度をいぶかしんでいると、シセンナが手をさしのべてきた。

私は彼の手を引いて立ち上がり、再び抱擁と接吻を交わす。

「一汗流したら、ラエティアのワインの話がしたい」

「共同投資に乗ってくれるか？」

「ああ。ただし、その前に試したいことがある」

「詳しい話はカルダリウム（温浴室）でどうだ？」

「分かった」

私が了解すると、シセンナは仲間を引き連れて中庭の隅に集まった。

身体に塗ったオリーブオイルを落とすのだろう。

私も身体に塗った油を落とすために、護衛の奴隷を呼ぼうとしたのだが、彼の代わりにエゲリアとアルミニアがストリギリス（ヘラの形をした垢すり）と砂を持ってくる。

「二人とも、どうしたんだ？」

私は奴隷少女達を問いただした。

エゲリアは即答せず、無言で砂を私の身体にまぶしだした。

表皮を覆っていたオリーブオイルに砂が付着する。

一方のアルミニアは憤懣やるかたない様子で、私の敗北をなじりだした。

「ご主人様！ 勝負はなんでも勝たなきゃ駄目ですよ！」

「それはそうだが、シセンナは強い」

「それでも勝たなくちゃ駄目です！」

私は大きく口を開けてアルミニアを見下ろした。

彼女の目はつり上がり、身体は震えている。

どうやら、勝負事になると我を忘れてしまうようだ。

「すまなかつたな」

まだ納得しかねるといふ面持ちのアルミニアをなだめた私は、彼女からストリギリス（ヘラの形をした垢すり）をぶんどった。

ところが、私に砂をまぶし終えたエゲリアが、更にそれを奪い取ってしまう。

彼女はユリアが座っている場所を振り返ると、人形のようにぎこちなく笑いながら垢すりを私の肌当てた。

「さつき奥様が、アルミニアにファスキヌス（喜悦棒）の舐め方を手ほどきしたと仰っていましたか？」

「ああ、したな」

「それは私の役目じゃなかったんでしょか、ご主人様」

「ユリアがしたがつたんだ」

「知ってます。私よりも奥様の言い分が通ることも知ってますよ、ご主人様」

「私は主人だぞ。どうして妻や奴隷にああだこうだと言われねばならんのだ」

「好きなだけ私を罰せば良いじゃないですか」

エゲリアは私の肌から砂とオリーブオイルをこそぎ落とすふりをするながら股間に手を伸ばしてくる。

「駄目だ。人が見ている」

「じゃあ、フォトウエレ（性行為）の時は私を最初にするよ約束して下さい」

「分かった。ユピテルに誓う」

私から誓約を引き出した踊り子奴隷は巧みにストリギリスを使い、私の肌から汚れを取り去った。

「ありがとう」

エゲリアに礼を述べた私は、未だに興奮から冷めやらぬアルミニアの手を引っ張って、妻が立っている場所まで歩いて行く。

「お疲れ様でした」

ユリアは二人の奴隷を横目で捕らえつつ、余裕の態度で私をねぎらってくれた。

「疲れたよ」

私は妻に苦笑いを浮かべ、次の予定を告げる。

「シセンナとカルダリウム（温浴室）で商談する」

「ご一緒した方が宜しいでしょうか？」

「いや。私の妻として奴隷の面倒を見てくれ」

「分かりました、旦那様」

深々と頭を下げたユリアに、エゲリアとアルミニアを押しつけた私は、入浴料を払って木靴を履き、テピダリウム（微温浴室）を抜けてカルダリウム（温浴室）にたどり着いた。

熱された空気のせいで鼻の穴が焼け、レスリングをした時よりも汗が湧いてくる。

ベンチに座って待っていると、取り巻きを連れしたシセンナが現れた。

彼が私の隣に座ったのを見計らい、商売の話が始める。

シセンナはラエティアにある葡萄園の経営を持ちかけられているが、彼の本業は牧羊で葡萄畑について知っている身内も解放奴隷もいない。

そこで、私に共同で経営しないかという話を持ちかけてくれたのだが、ラエティアのワインは作るのが難しいので有名なのだ。

ただ奴隷と金を出せば、成果が転がり込んでくるというわけでは

ない。

豊かな経験のある奴隷や解放奴隷を、どれだけ揃えられるかが勝負の分かれ目になる。

後は売り方もだ。

シセンナは汗を流しながら私の話に耳を傾けた。

しばらくしてから、彼も口を開き出す。

話し合いは有意義だった。

葡萄園を所有するまでの大まかな計画ができあがる。

一段落したところで、私達は風呂に浸かった。

するとシセンナと私の取り巻き達が寄ってくる。

エゲリアはここぞとばかりにストロピウム（ブラジャー）を外し、乳房を入浴客に見せつけていた。

今度は彼女の周囲を男共が囲っている。

私の踊り子奴隷は、さぞや満たされた気持ちになっているに違いない。

「ところで、あの金髪の子は新しく買ったのか？」

私がエゲリアに気をとられていると、隣で湯に浸かっていたシセンナが尋ねてきた。

「ああ。名前はアルミニアだ。パルティウスの店で買った。ベッドの暖め役とマッサージ係をさせるつもりだ」

「マッサージか」

「そのために、ここに連れてきている。後でマッサージ奴隷に金を握らせて、あの子に手順を教えさせるつもりだ」

「カルウスのテルマエ（公衆浴場）は知ってるか？」

「知っている。まさか、あそこにアルミニアを連れてこいと？」

「そうだ。明後日はどうだ？ 最近、俺もお気に入りの少年を買ったばかりなんだ。君に自慢したい」

「相変わらず好き者だな。時間は？」

「今日より少し前に、俺が君の自宅に顔を出す。それでどうだ？」

私は同意の印に頷くと湯船から立ち上がった。

続いてアルミニアを呼んで彼女を抱き上げ、そのままマッサージ室に向かって歩き出した。

X

ケーナ（夕食）を食べると夜が来た。

クビクルム（寝室）に置いた青銅製のランプに火を灯す。

仄暗い寝室のベッドに腰掛け無言で待っていると、小走りでアルミニアがやって来た。

彼女は踏み台を使ってベッドに上がり、私の隣に座り込む。

「遅くなりましたか？」

「いや」

「良かったです。それで、どんな御用でしょうか？」

「今日の昼に、テルマエ（公衆浴場）でマッサージ奴隷の技を見たな？」

「はい」

「これから、少しずついいからあれを覚えるんだ」

「はい。前に説明して下さったとおりですね？」

「それと、今日からはこのベッドを暖める」

「どうすれば良いのですか？」

「夕食後にこのベッドに来て寝ていれば良い。ただし全裸でだ」

「はい」

「すぐに準備しろ」

私に急かされたアルミニアは、その場で生まれたままの姿になった。

彼女が脱いだトゥニカと下着は、私が受け取ってベッドの端に引っかける。

布団に潜り込んだ金髪の少女は、半分だけ顔を出してはにかんだ。

「これでいいですか？」

「それでいい」

私もトゥニカを脱いで彼女の傍らに滑り込む。

並んで寝ていると、アルミニアが私の身体に抱きついてきた。

「温かい」

彼女はほつとしたように呟くと、身体の力を抜く。

「こら。お前が私のベッドを暖めるんだぞ」

「すみません。でも、人と一緒に寝るのは久しぶりなので」

「前は母親と一緒にだったのか？」

「はい。でも、すぐに気が変わってぶたれるので安心できませんでした」

「それで、この家に来てからは女衆から離して独りで寝かせていた

「んだが。嫌だったのか？」

「いいえ。でも、人と一緒に寝る方が安心できます」

アルミニアはそう言うと、身体を更に密着させてきた。

私は卵を持つような力加減で彼女を抱きしめた。

しばらくそのままの姿勢でいると、金髪の少女は私に顔を近づけてくる。

「奥様やエゲリアがしているのと、同じ事がしたいです。駄目ですか？」

「何がしたい？」

「こう、口と口を合わせるやつです」

「サーウィウム（ディープキス）か？」

「それだと思えます」

「口を少しだけ開ける」

アルミニアがためらいながら口を開けると私は彼女の唇を奪い、唾液を吸い、舌を絡めた。

始めは緊張していた少女奴隷も、少し経つと慣れてきたようで、自ら私の舌を吸ってくる。

「ご主人様の唾って、不思議な味がするんですね」

サーウィウム（ディープキス）が終わると、アルミニアは驚いた面持ちで感想を述べた。

「口臭を抑える飴を舐めてるからだろう。嫌だったか？」

「いいえ」

私が金色の髪を撫でると、アルミニアはもう一度サーウィウム

（ディープキス）をねだってきた。

二度目の接吻をしながら、彼女の股間に手を差し入れると、クヌス（女性器）がべっとり濡れている。

「サーウィウム（ディープキス）は好きか？」

「はい。気持ち良いです」

「クヌスを触られるのも好きだな？」

「はい。大好きです」

「ユリアが教えたことを覚えているか？」

「覚えています」

「プリアープスを舐めるんだ。できるな？」

「はい。させてください」

奴隷の返事を聞いた私はベッドから身を起こし、掛け布団を剥ぎ取った。

それから大きく脚を広げて座り、仰向けに寝かせたアルミニアの鼻先に、牛の角のように勃起したハスタ（男根）を近づける。

アルミニアはペニスに手を添えると、可愛らしい口で先端を頬張った。

噛んではいけないという気持ちが頭から離れないのだろう。

エゲリアやユリアに比べると、舌の動きが弱くてぎこちない。

私は片手で彼女の頭を軽く抑え、もう片方の手でピステイッラ（めしべ）に触れた。

股間を愛撫し始めると、アルミニアは顔を真っ赤にしてメントウラ（剛直）に吸い付いてくる。

「そうだ。歯を立てなければ強く吸っても良いんだぞ」

私の言葉に金髪の少女は小さく頷いた。

「添えた手を動かすんだ。ゆっくりでもいい」

彼女は次の指示にも素直に従って、ペニスをしごき始める。

私は彼女の毛髪を掴み、頭を前後させつつ、クヌヌス（女性器）

を執拗に指でくすぐった。

アルミニアの呼吸がたちまち荒くなる。

彼女は両脚を突っ張らせようとした。

だが、私は太股の内側を叩いて足を開かせる。

「駄目だ。この姿勢のまままで気を遣るんだ。フォトゥエレ（性行為）

の時は脚を広げてプリアープスを受け入れるんだぞ」

アルミニアは啼き声を上げたが私の命令に従った。

やがて彼女は脚を開いたまま腰を跳ね上げた。

奴隷が果てたのを目にした私は征服感に酔って放精する。

「いぼさず飲め」

私が念を押すまでもなく、少女奴隷はウイルガ（陰茎）から出さ

れた汁を吸い取り、嚥下した。

彼女はペニスから一旦口を離すと、再び啣えて先端を舌先で突い

てくる。

「もういい」

腰砕けになった私は、アルミニアの髪の毛を引っ張って二度目の

奉仕を止めさせた。

「全部飲めたか？」

「はい」

「嫌じゃなかったか？」

「はい。全然嫌じゃなかったです」

「口でさせるかどうかはともかく、明日からフォトゥエレの練習を

二回に増やすぞ。字を勉強した後と寝る前だ」

「はい」

私はアルミニアの頭を撫で、布団に潜り込んだ。

彼女は私にしがみつく、間もなく寝息を立てだした。

## XI

今日は朝から大忙しだ。

サルタティオ（表敬訪問）が終わるとすぐにユリアとストウルク

トル（食事の配膳係）、エゲリアと楽器演奏奴隷を呼んで宴会の内

容に関する話し合いを行う。

料理も重要だが、出し物も重要だ。

ユリアはシセンナが雇っている料理人を借りたいと言った。

エゲリアは夕食の席では竖琴、コミッサティオ（無礼講）では竖

笛で踊りたいと言っている。

私は彼女達の主張を織り込みつつ、全体の計画を練っていく。

気がつく、もう昼になっていた。

そこで話し合いを中断した私は、タブリヌム（執務室）のソファ

に座って一息ついた。

ほんやりと髑髏の像を眺めていると、艶めかしい竖笛の音が響い



てくる。

どうやら、楽器演奏者とエゲリアが練習を始めたらしい。

先ほどの話し合いで「五月蠅いのを我慢しろ」と警告されたのを思い出す。

腰を上げてペリステユリウム（中庭）に顔を向けると、踊り子の衣裳に身を包んだエゲリアが舞っている姿が見えた。

腰をくねらせ、身体を捻り、指先をまるで蛇の鎌首のように動かしている。

その官能的な舞踊に思わず魅入られてしまう。

やがて豎笛の音が消えるとエゲリアも動きを止め、演奏奴隷と細かい打ち合わせを始めた。

それから同じ曲に合わせて同じように踊る。

何度目かの舞踊が始まった頃にアルミニアが顔を出した。

恐らく豎笛の音に引き寄せられたのだろう。

私は彼女を呼び寄せ、タオルと水を持ってくるように命じる。

一時間ほど経つと、練習が終了した。

「いつもお前の踊りには見惚れてしまう」

私は呼吸を整えているエゲリアを褒め称えた。

彼女は笑顔で私の賞賛に返答する。

「ご主人様に買っていただいた腕前ですもの。さび付かないようにしないと」

「身体を拭くか？」

「はい」

エゲリアは頷くと舞踊用の衣裳を脱いだ。

彼女は続けてストロピウム（ブラジャー）もスプリガークルム（下着）も脱いで生まれたままの姿になってしまう。

私はアルミニアの背中を押して、エゲリアにタオルを渡させた。

踊り子奴隷は衣裳をたたみ、それをアルミニアに渡してから全身の汗を拭う。

「衣裳は私のアルカ・ウエステイア（長持ち）に仕舞っておいて。それが終わったらご主人様の寝室に來なさい」

エゲリアは金髪の少女にそう言い付けると、全裸のまま私の腕に絡みついてきた。

それで彼女の意図を察した私は鍛え上げられた臀部を手で鷲掴みにする。

「おい。今日は忙しいんだぞ」

「ご主人様にご迷惑はおかけしません。すぐに済みます」

「嘘をつけ。私を寝室に誘っているじゃないか」

「嘘じゃないですよ」

私の手首を掴んだエゲリアは、指先をピステイッラ（めしべ）に導いた。

そこは既にぬかるんでいた。

「もうできあがってるのか」

「豎笛で踊っている時は、いつもご主人様に犯されているところを想像していますから」

「そう言われるのは嬉しいな」



「そう言っていただけだと思います」

踊り子と長い口づけを交わした私は、楽器演奏奴隷に無言で頷いてからその場を後にした。

クビクルム（寝室）に入ると、エゲリアは部屋の隅に置いてあった銀箔張りの大きな鏡と三脚を引っ張ってきた。

大きな姿見を三脚に立てかけた少女奴隷は、私のトゥニカとスプリガークルム（下着）を脱がしてベッドに追い立てる。

「仰向けに寝て下さい、ご主人様」

「馬の逆乗り」をするつもりか？」

「はい。あれが一番奴隷らしいフォトウエレ（性行為）のやり方です。それから、あれを私に仕込んだのはご主人様ですよ」

「そうだな」

仰向けの姿勢で背中を枕を押し込まれた私は、両手を後頭部で組み、やや上半身を起こした。

この格好であれば、斜め前にある鏡を見ることが出来る。

私に脚を広げさせ、その隙間に潜り込んだエゲリアは、ウイルガ

（陰茎）の先端を口を含み、辜丸を指でくすぐった。

ユステイナに仕込まただけあって、彼女のペニスを愛でる技術は群を抜いている。

「いいぞ。腰が溶けそうだな」

私が褒め言葉をかけると、エゲリアは返事の代わりにハスタ（男根）をしごいてきた。

私は歯を食いしばり、奴隷がもたらす愉悦に耐える。

そこにアルミニアが現れた。

金髪の少女は鏡を見て驚いた表情を浮かべてから、私とエゲリアの側に寄ってくる。

「あれは鏡ですか？」

「そうよ。大きいでしょう？」

私の股間から顔を上げたエゲリアは、大きな鏡に視線を向けた。

「はい」

「ここに自分の姿を映しながらフォトウエレ（性行為）するの。馬の逆乗り」と言うのよ」

「はい」

「こうすれば、ご主人様に自分の全てをさらけ出せるでしょう？」

「鏡で全部見えるからですか？」

「そう。顔もクンヌス（女性器）も丸見えなの。これが奴隷女に相應しいフォトウエレ（性行為）よ」

エゲリアはそういうと私に背を向けてしゃがみ込み、ペニスの根元を手で持った。

彼女は大きく足を開くとその先端を自らのクンヌス（女性器）にあてがい、ゆっくりと腰を落としていく。

柔らかく温かい肉の感触がハスタ（男根）から伝わってきた。

「入ったあ！」

エゲリアも挿入ができたことを大声で告げる。

鏡には私と踊り子奴隷の結合部がはっきりと映っていた。

彼女は心の底から嬉しそうな顔をしながら腰を上下させ始める。



「どう？ 見える？ ご主人様のファスキヌス（喜悦棒）が、私の中に入っているのが見える？」

「はい。見えます」

アルミニアは棒立ちの姿勢で私とエゲリアのフォトゥエレ（性行為）を凝視していた。

見られると興奮する踊り子は、更に腰の動きを速めていく。

「私も見えるわ。ファスキヌス（喜悦棒）が出たり入ったりして、本当に気持ち良いの。頭がおかしくなりそう」

「そんなに気持ち良いんですか？」

「最初は痛かったけど、すぐに慣れたわ。それからしばらくしたら、お漏らしするぐらい気持ちよくなったの」

「私もなれますか？」

「たぶん。ご主人様に弄って貰うのが好きなんでしょう？」

「はい」

「だったら大丈夫。だから、そろそろ話はおしまいよ」

鏡に映ったエゲリアの面持ちが惚けたものに変化した。

彼女は腰砕けになって、後ろに倒れ込んでくる。

私はすかさず踊り子の膝裏に手を差し入れ、自分から腰を突き出した。

「やっぱり私に迷惑を掛けたな」

「すみません。気持ち良すぎて腰が抜けました」

「仕置が必要だな」

「お願いします」

私が容赦なく何度も下から突き上げると、エゲリアは艶めかしい悲鳴を上げてのたうった。

やがて股間の周囲に生温かい液体が滴る感触がしたと思うと、彼女の口から低い呻き声が漏れる。

どうやら失禁したらしい。

それでも私は踊り子を犯し続けた。

彼女はすぐに二度目のいななきを上げ、今度は鏡に映るほどはつきりと股間から小水を噴き上げる。

その浅ましい姿を見て満たされた私は、下腹に力を込めて放精した。

激しいむつごとが終わると、エゲリアはよろけながら立ち上がり、私のプリアープスをしゃぶって後始末をした。

奴隷としての義務を果たすと、彼女はベッドに倒れ伏す。

「ごめんなさい。踊った後で頑張ったから、もう限界」

「寝ていいぞ」

私は身体を起こし、エゲリアの身体の変えた。

彼女が寝息を立て始めると、私はベッドから下りる。

アルミニアは首を振って全裸の私と寝ているエゲリアを見比べた。

「エゲリアは寝たんですか？」

「フォトゥエレ（性行為）で満足した女性は寝る」

「奥様も？」

「ああ」

「私もそうなるんですか？」

「お前がフォトゥエレ（性行為）を楽しめるならそうなるだろう。さあ、服を渡してくれ」

私が手をさしのべると、アルミニアはテーブルに置いてあるスプリガーケルム（下着）を手に取った。

「私につけさせて下さい」

私の前まで歩いてきた少女奴隷はその場で跪き、下着を履かせるふりをして、やおら陰茎にオスクルム（唇を閉じたキス）した。

XII

エゲリアと一戦を終えた私は、後片付けをアルミニアに申しつけてから護衛の奴隷二名とノーメンクラトルを連れて、ユステイナのポピーナ（軽食堂）に向かった。

店に着いた私は席に座り、手を上げてユステイナを呼ぶ。

「坊ちゃん。どうしました？」

「話したい。奥の部屋は誰か使っているか？」

「今は誰も使ってませんよ」

「貸し切りしてくれ」

「分かりました」

「この三人の飲み食いは自由にさせてやってくれ」

ユステイナは若い店員に中二階に人を入れないことと、奴隷達から注文をとることを命じてから、私と一緒に急な階段を上る。

「それで、御用は何ですか？」

薄暗い中二階で、中年女は私に身体を寄せてきた。

「しばらくしたら、宴席を設ける。それで、歌えるか踊れる娼婦が欲しい」

「デリア婆さんに相談したいんですね？」

店の女主人の口から、高級娼館を取り仕切る老女の名前が出た。

私は首を縦に振る。

「そうだ」

「あそこには、よく出前をしますからね。あの婆さんの息子が抱えている女のことなら、たいてい分かりますよ」

「何人か見繕ってくれるか？」

「坊ちゃんの頼みなら」

「頼む」

そういった私は、ユステイナの頬に口づけした。

ところが、彼女はサーウィウム（ディープキス）をしてくる。

私は少女が好きだが、ユステイナだけは例外だ。

彼女は私の童貞を奪った。

ベッドでの振る舞いを仕込んだ。

女の見分け方や堕とし方も教えてくれた。

ユステイナは私のフォトゥエレ（性行為）における師匠だ。

私のどこをどう触れば、どう反応するかも心得ている。

私はウエヌスに祝福されたことを隠そうとせず、ユステイナの手首を掴んで股間に導いた。

勃起したペニスに触れた彼女は嬉しそうに頷いて、接吻を普通の

ものに変える。

「どうして急に？」

「二人きりになったら、昔のことを思い出したんです。嫌でしたか？」

「まさか。でも、旦那が怒るんじゃないか？」

「商売するのに主人が女だと舐められるから、仕方なく内縁になっただけですよ。本人だって、そんなことは承知しています」

「随分な言い様だな」

「この店だって、お亡くなりになった旦那様がペクーリウム（特有財産）を私に下さったから始められたんです。あの能なしが頑張ったお陰じゃありませんから」

「分かった、分かった。分かったから、もう旦那の悪口は止めろ」

「分かりました」

「それで、いつまでに調べられそうだ？」

「明後日までには何とかします」

「頼むよ」

「坊ちゃまのためなら、何だってします。でも、不思議ですね」

「何が不思議なんだ？」

私が首を捻ると、ユステイナは昔を思い出すように上を向いた。

「私は坊ちゃまが家を継がずに詩人になると思っていたんですよ」

彼女の疑問に今度は私が下を向く。

「そうだな。初めてお前と知り合った時の私は詩人を目指していた」

「もう、詩は書かないんですか？」

「止めた。昔の作品も燃やした」

「どうしてそんなことを？ 今だって文章はお上手でしょうに」

「自分が一流になれないと分かったからだ」

「私は詩のことはてんで分かりませんが、そういうものなんですか？」

「そういうものだ」

「一流でなくても詩を書けば良いじゃないですか」

「私が我慢出来ない。自分がムーサ（ギリシア神話に登場する文芸の女神。詩女神）に愛されていないのを思い知らされるのは苦痛だ」  
私が本音を漏らすと、ユステイナは口をつぐんだ。

代わりに彼女はスプリガークルム（下着）の上からハスタ（男根）を指でくすぐってくる。

「ユステイナ」

私が呼びかけてもユステイナは返事をせず、勝手にトゥニカのベルトを外してしまう。

「分かったよ。舐めろ」

根負けした私が命じると、ポピーナの女主人はあつという間にスプリガークルムの紐をほどこいていた。

彼女は口中に勃起したウィルガ（陰茎）を含むと、両手を巧みに使って私を忘我の境地に誘った。

すると自分でも驚くほど、詩人になるのを諦めた時の憂悶が消えていく。

「出すぞ」

やがて耐えきれなくなった私は、ユステイナの口内に精を吐き出

した。

彼女は口をすぼめ、私のプリアープスから一滴残らず搾り取ると、満足そうに笑って立ち上がる。

「良かった。まだ坊っちゃんを悦ばせる力が残っていたみたいで」

「お前だけは特別だ」

私はユステイナを抱きしめた。

「何か嫌なことがあったら、すぐにここへ来て下さい。私が忘れさせてあげますから」

「ありがとうございます」

私はもう一度軽食堂の女主人に礼を述べ、中二階の階段に足を掛けた。

### XIII

今日も忙しい。

まず、サルタテイオ（表敬訪問）の時間にパウサニアスが宴会の招待状の複写を持ってきてくれた。

約束の金を支払ってパピルスを受け取ると、ノーメンクラトール（名告げ奴隷）ともう一度打ち合わせをして招待客を確認する。

それが決まったら、次に彼らの予定を訊いて日取りを決めるための計画を練らなければならない。

しかも、縁起の悪い日は避けるという制約が加わる。

宴会の仕込みに私が呻吟していると、衝立の向こうから門番が私の名を呼んだ。

シセンナが迎えに来たようだ。

私がドムス（一戸建て住宅）の門まで行くと、三名の男を連れてシセンナが立っていた。

二人は護衛、残りの一人は恐らく彼の愛妾だろう。

少女のように華奢で可憐な、おそらくエジプト人だ。

「エクレトウスだ」

シセンナに紹介された美少年は、私の前に跪いた。

彼は私が差し伸べた手に接吻する。

「エクレトウスです。ノーメンクラトールを目指しています。どうかお見知りおきを」

「トゥリヌスだ。君の主人には大変お世話になっている」

私がシセンナを褒めそやすと、美少年は嬉しそうに笑って立ち上がった。

主人を愛している奴隷の顔だ。

「それじゃ、カルウスのテルマエ（公衆浴場）に行こう」

シセンナは私に靴を履き替えるように促した。

「私も護衛を連れて行った方が良いかな？」

「いや、例の女の子だけで良い。帰りも俺がここまで送り届けるよ」

「何かあるのか？」

「歩きながら話したいことがある」

「分かった。少し待ってくれ」

屋内に戻った私はすぐにノーメンクラトールとユリアを呼び、シセンナに同行する旨を告げてからアルミニアを連れて外に出た。

シセンナの護衛をしている奴隷達は、カルウスのテルマエとは方向の異なる道を歩き始めた。

恐らくシセンナから指示されているのだろう。

「それで、話というのは？」

自宅から離れると、私は友人に問いかけた。

彼は首を左右に振ってから、雑踏の中では聞き取りづらいほど低い声で話を開始する。

「名前はまだ言えないのだが、今度ある人物の弁護を担当することになった」

「裁判か？」

「そうだ。君にも協力して欲しい」

「傍聴者を増やせば良いのか？ 君ほどの雄弁家なら、そんなことをしなくても無罪を勝ち取ることは容易いと思うが」

「念には念を入れない。君の抱えているクリエンテス（庇護民）に協力を頼めないか？」

「もちろんだ。詳しいことが決まったら、改めて話をしてくれ」

「分かった。どれぐらい集められそうだ？」

「裁判が開かれる時期によりけりだが、最低でも三十人は連れて行く。友達だろうか？」

「助かるよ」

シセンナは私の背中を軽く叩いて口を閉じた。

私も無言で歩く。

政治や裁判に関わることを、ところ構わず口にするのは危険だ。

シセンナが歩きながら話したがったのも、盗み聞きされるのを嫌がったからだろう。

皇帝の目や耳の代わりをする奴隷、市民は至る所にいる。

自分が抱えている奴隷ですら、信用がおけない。

キケロが書いていたダモレスクの剣だ。

しばらくそのまま歩いていると、煙を噴き上げる建物が見えてきた。

シセンナは相好を崩し、エクレトウスの肩を引き寄せる。

「着いたぞ」

我々は汚い外観をしたテルマエに足を踏み入れた。

入り口にいたのは浴場の名称通り、髪の毛が一本も生えていないカルウス（禿げ）の男で彼に入浴料を払う。

アポデュテリウム（脱衣場）は狭かったが活気はあった。

誰もが可愛らしい少年か少女を連れている。

私のような趣味の持ち主で、カルウスのテルマエを知らぬ者はいないだろう。

ここはエゲリアが言うところの「悪人」が集う場所だ。

アルミニアの服を脱がせた私は全裸になるとタオルを持ち、木靴を履いてラコーニクム（発汗室）に向かう。

室内は薄暗く、焼けるように熱かった。

ベンチには既に数人の男性が座っており、自分達が連れてきた奴隷に性的な奉仕をさせている。

私も長椅子にタオルを敷いて、その上に座るとアルミニアを膝に

乗せた。

彼女は周囲を見回してから私に問いかける。

「あの、ここは？」

「普段は寝室でしていることを、ここでするんだ」

「はい。みんなしてますね」

「見られながらするのがいいんだ」

私はそう言うと、アルミニアの股間に手を差し入れた。

彼女は太股の力を抜いて、私に身を委ねてくる。

指先でクンヌス（女性器）を愛撫していると、いつもより遙かに

多くの蜜が溢れてきた。

どうやらこの部屋の熱気に当てられたらしい。

アルミニアは私が躡けた通り、両脚をくつろげた状態で腰を揺ら

しだす。

やがて金髪の少女は金切り声を上げ、汗まみれの裸身を突っ張っ

て果てた。

私が顔を近づけると、自分から舌を吸ってくる。

「気持ちよかったか？」

「はい」

「いつもより興奮していたな？」

「はい」

「見られるのは気にならないか？」

「たぶん、見られている方が良さそうな気がします」

「分かった。そろそろ出よう」

私はアルミニアを抱え、ラコーニウム（発汗室）を後にした。

その途中でエクレトウスにペニスをしゃぶらせているシセンナと

目が合った。

「先に行っている」

私は手短かに挨拶を済ませ、マッサージ室に向かう。

テルマエに入る前から決めていたことだが、シセンナに料理人の

貸し出しを頼むのは、遊びが終わってからのの方が良さそうだ。

複数のマッサージ台が並べられた部屋でも、淫らな行為が繰り広

げられていた。

アルミニアと同じ年ぐらいの少女が主人とおぼしき男に犯され、

悲鳴を上げている姿も目に入ってくる。

私は空いていた台の上にタオルを広げ、客を見張っていた奴隷に

香油を要求した。

奴隷はすぐにテラコッタの深皿を持ってくる。

「この前の香油と違いますね」

深皿の匂いを嗅いだアルミニアが感想を述べた。

私は笑って同意する。

「そうだな」

「前に教わったとおりにすればよろしいですか？」

「そうだ。どうしてそんなことを？」

「周りの人たちがフォトゥエレ（性行為）しているので」

「お前はまだしなくていい」

私はタオルの上でうつ伏せになった。

アルミニアは私に跨がると、香油を背中に垂らす。

名前は思い出せないが、花の香りが漂った。

少女の細い指が私の身体に食い込んでくる。

「いいぞ」

私は両目を閉じ、心地よい刺激に身を任せた。

華奢な体格に似合わず、アルミニアには力があつた。

マッサージ奴隷向きというのはあながち嘘ではなかったようだ。

しかし、しばらくすると彼女は私の背中に覆い被さってくる。

「どうした？」

「すみません。ご主人様のお尻にクンヌス(女性器)が当たってしまつて」

「気持ち良いのか？」

「はい。masturbatory(自慰)しているみたいです」

「なんだ。お前はmasturbatory(自慰)しているのか」

「はい。ご主人様にしていただいた事を思い出しながらしています」

「なるほど。それは見てみたいな」

「私がmasturbatory(自慰)するところをですか？」

「ああ。私の尻にピステイッラ(めしべ)を擦りつけているんだらう？」

「はい」

「それ続けなさい」

私はうつ伏せの姿勢のまま、アルミニアの動きを待った。

少し間を置いて、彼女が香油を垂らした私の腰に、クンヌス(女

性器)を擦りつけてくる感覚がする。

目を閉じている分だけ、耳が敏感になっているのだろう。

アルミニアの息が乱れるのが手に取るように分かる。

彼女はもはやマッサージするふりも止め、私の身体に乳房を押し当て、発情した犬のように腰を振ってくる。

そこで私は身体を反転させ、今度はアルミニアをマッサージ台の上に寝かしつけた。

すると彼女は即座に私がしたいことを見抜き、両脚を広げてクンヌス(女性器)がよく見える格好をすると、自分の指で激しく弄りながら「ご主人様、ご主人様」と私を呼び始める。

金髪の少女は、そのまま噴水のように小水を噴いて果てた。

私がマッサージ台の上に座ると、彼女は四つん這いの姿勢になつて頭を股間に乗せて来る。

「ご主人様、すみません。私だけ二度もしてしまつて」

「これからお前に奉仕して貰うから構わない」

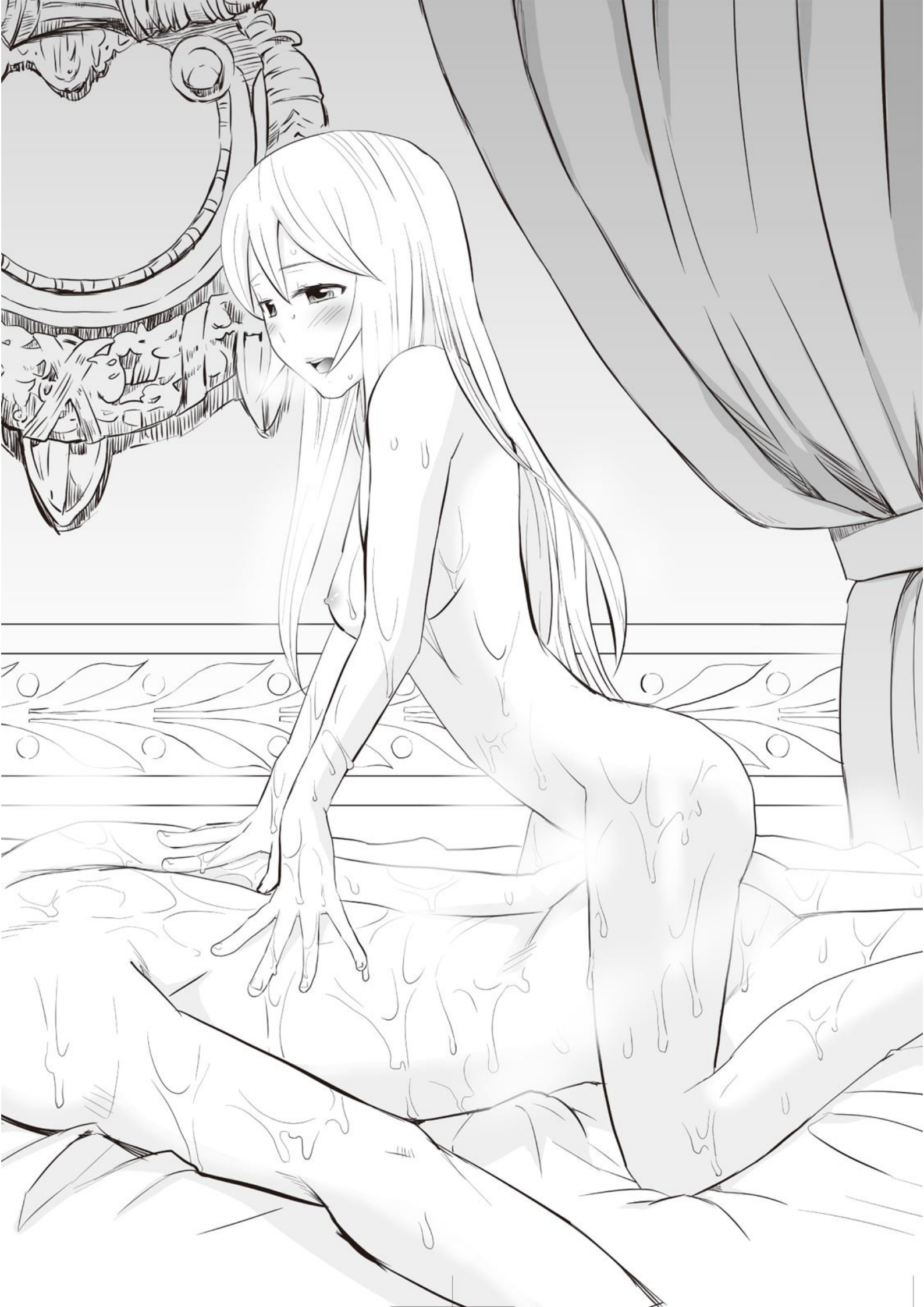
「はい。でも、本当にフォトゥエレ(性行為)をしなくていいんですか？」

「そんなにしてみたいか？」

「はい。奥様もエゲリアもしていますし、ここに来たらみんなもしていますから」

アルミニアは私のハスタ(男根)をしごきながら、視線で近くのマッサージ台を指し示した。

そこには、仰向けになつたシセンナのペニスにアヌス(肛門)を



貫かれたエクレトウスが、笛の音のような可愛らしい声を上げて啼いている姿があった。

## XIV

宴会の準備はモザイクを作るように進んでいる。

招待者の選択。

招待状の執筆と複製。

楽器演奏者と踊り子と娼婦の確保。

料理人の確保。

料理の品目の選択。

そして最後に招待者の予定を訊いてから宴席の日取りを決め、それに合わせて市場で食材を買ってくる。

さすがに最後の一つはシセンナから借りた料理人とストウルクトル（食事の配膳係）、ノーマンクラートル（名告げ奴隸）に一任した。

フォルム・ポアリウム（家畜市場）に行く気が起きなかったからだ。

この宴会の主役はワインだ。

だから、料理に関しては必要以上に奇をてらうつもりはない。

もしも招待者から当家のワインを褒め称える言葉が出なければ、

宴会を開いた意味が無くなってしまう。

だが、無理強いは禁物だ。

相手だって私の素性はよく知っている。

ワインを褒めて貰おうという魂胆は見透かされているだろう。

私があざとく振る舞っても、反感を買うだけだ。

そこで娼婦だ。

私が言いたいことを、彼女達に言わせて招待客から同意をとる。

その背後で私は愛想笑いを浮かべ、ただ頷いていれば良いようにする。

もつとも、主催者が何も喋らないというのもおかしい話だ。

余興で下手な詩の一編ぐらい詠んでも良いかもしれない。

タブリヌム（執務室）の椅子に座っていた私は、書き損じたパピ

ルスの余白に思い浮かんだ言葉を綴った。

それからしばらく別の執務をした後に、書き付けた単語の羅列を

読み直す。

情けなくて涙が出てくるほど凡庸だ。

著名な詩人の言葉を適当に並べ替えただけで、まったく見栄えが

しない。

私が私自身を見下し貶していると、唐突に男の叫び声が聞こえた。

野太い悲鳴に驚いた私は、椅子から立ち上がって卓上にあつたプ

ギオ（短剣）を掴んで鞘から抜いた。

やがて、聞き覚えのある複数の声が入り口から聞こえてくる。

私はプギオを身構えたまま入り口に近寄った。

「ご主人様！」

そこに青い顔をしたストウルクトル（食事の配膳係）が飛び込ん

できた。

「どうした？ なんだあの声は？」

「賊に入られました。宴会の準備を始めて、人の出入りが多くなっ

たので、門番が見逃したようです」

「強盗じゃないのか」

「家人になりましたこそ泥です」

「じゃあ、あの声は何だったんだ？」

「アルミニアです」

「アルミニアが賊に襲われたのか！」

「いえ、逆です」

「逆というのはどういうことだ？」

「アルミニアが賊に気付いて、蹴り飛ばしたようです」

「子供に蹴られたぐらいで、賊が倒れるわけがないではないか」

「それが倒れています」

「本当か？」

「本当です」

私はストウルクトル（食事の配膳係）の言い分を信じる事が出来ず、プギオを持ったままタブリヌム（執務室）を出た。

アルミニアが怪我をしたら、私から叱責されると思ってとっさに嘘をついたのだと思ったのだ。

アトリウムに着くと、賊らしき男が我が家の奴隷達に取り押さえられていた。

年齢は四十代ぐらいだろうか。

顔を確認したが記憶にない。

怪我をしたのか、呻き声を上げている。

「事情を説明して、警ら奴隷（翻案者注・原著では公共奴隷）だが、

ローマ市内の警らを担当する皇帝所持の奴隷を指している（翻案した）に引き渡せ」

私は門番と護衛の奴隷に命じるとプギオを鞘に収め、ストウルクトルに向き直った。

「それで、アルミニアは？」

「私をご主人様呼びに行く時は、ノーマンクラートル（名告げ奴隷）が彼女を賊から引き離していました」

「そうか。アルミニア！」

私は少女の名前を大声で呼んだ。

するとクビクルム（寝室）の一室からノーマンクラートルとアルミニアが顔をのぞかせる。

アルミニアの顔はトラヤヌス浴場で私をなじった時のように強ばっていた。

おまけに全身が震えている。

「アルミニアに怪我は？」

彼女と話するのが難しいと思った私は、ノーマンクラートルに質問した。

青年は大きく首を振る。

「いいえ。特に怪我はしていません」

「お前がアルミニアを賊から引き離したと聞いたんだが」

「はい。あのままでは賊が殺されていたと思います」

「アルミニアは子供、だぞ」

「賊の股間と脇腹を狙って蹴っていました」

「そうか。そこを蹴られたのか」

「はい。そこです」

私とノーメンクラートルは互いを見つめ合い、そして同時に頷いた。

「分かった。そこなら子供でも倒せそうだな」

「はい。不意を突かれたんでしよう」

「とりあえずアルミニアに飲ませたいので、蜂蜜を湯で割った飲み物を持ってきてくれ」

「分かりました」

ノーメンクラートルが室外に出ると、私はアルミニアを引き寄せた。

まだ身体が硬い。

震えも止まっていない。

「よくやった。怪我はしなかったか？」

「たぶん。今はまだ興奮していて分かりません」

「分かっている。落ち着くまで待つ」

「はい」

「賊の股間を蹴ったそうだな」

「はい。後は脇腹もです。頭を何度か踏んでいたら、みんなに止められました」

「そんなやり方、誰から習ったんだ？」

「母です」

「お前もそうやって蹴り飛ばされたことはあるのか？」

「はい。たくさんあります」

「そうか。分かった」

私はアルミニアの頭を何度も撫でる。

そのうち騒動が収まったと判断したのか、二階からユリアの声が聞こえてきた。

「旦那様！ そこにいらつしやいますか？」

「ああ。賊は家から追い出した。怖いなら、まだ二階にいいぞ」

「旦那様のご無事な姿を見た方が安心できます」

「それなら、下りてきなさい」

私呼びかけると、ユリアを先頭に女衆が階段を下りてきた。

妻の手にもプギオが握られている。

彼女は私を見ると、安堵のため息をついた。

「アルミニアが賊を捕らえた。ペニスに蹴りを入れたんだ」

私はアルミニアを見下ろすと、手短かに事情を説明した。

## XV

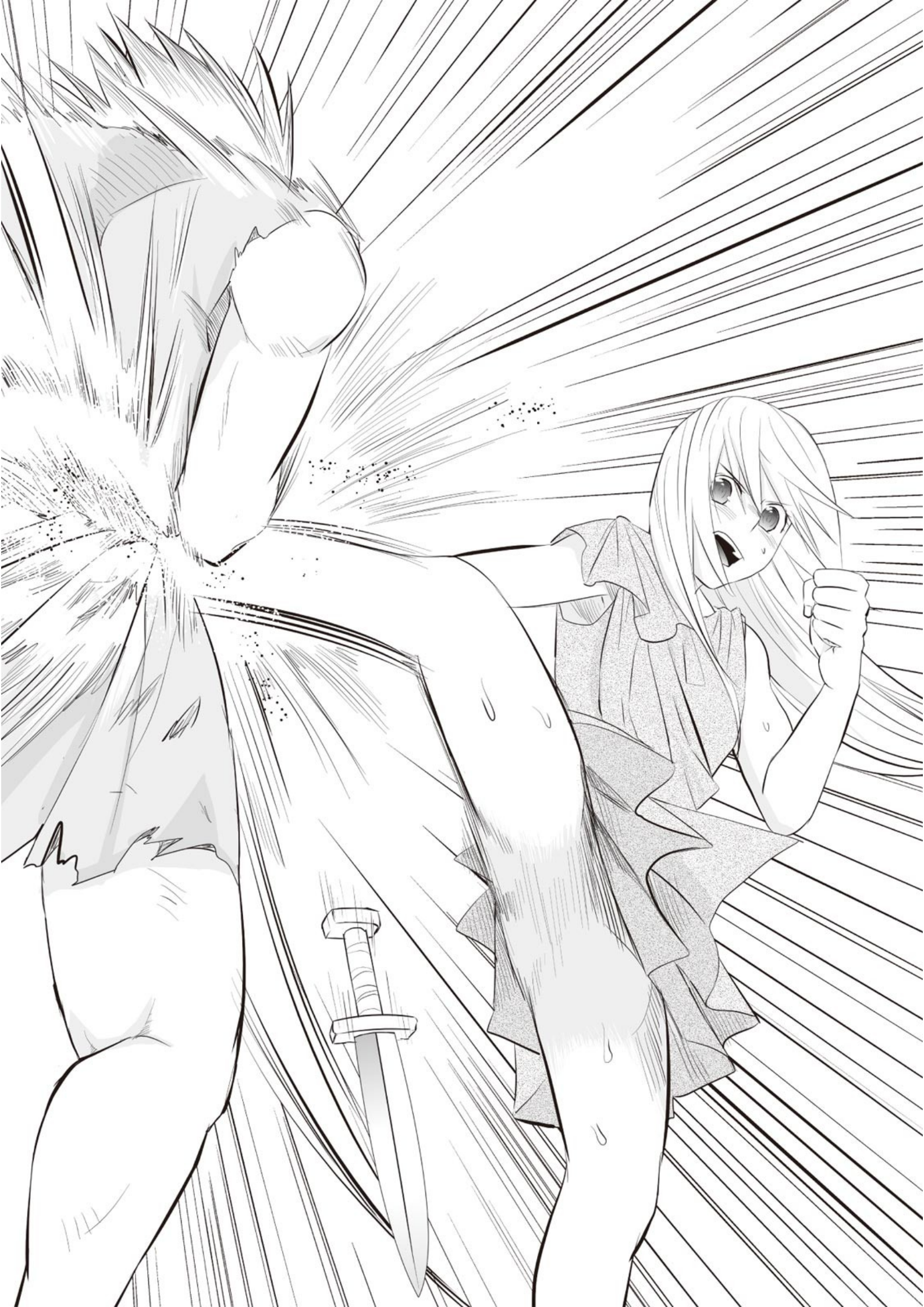
日が沈んでも、我が家は異様な雰囲気包まれていた。

日中に家人のふりをして侵入した泥棒のせいだ。

幸いなことに、何も被害を受けることなく取り押さえることが出来たが、殊勲者がアルミニアだったのが奴隷達を興奮させた。

華奢な少女に男を倒すだけの力があつたことが信じられなかったのだ。

かくいう私も未だにマールス（ローマ神話の軍神。ギリシア神話



のアーレスと同一視されたが性格はかなり違う)の加護に戸惑っている。

ケーナ(夕食)を終えた私は歯の掃除を済ませ、クビクルム(寝室)に向かった。

ベッドには既にアルミニアが潜り込んでいた。

私は掛け布団を捲り、彼女の裸身を見下ろした。

金髪の少女は既に落ち着きを取り戻しているようだった。

彼女は半身を起こし、私の顔を覗き込む。

「ベッドを暖めておきました」

「落ち着いたか？」

「はい」

「怪我は本当にしていないのか？」

「蹴ったので、脛と足の甲が少し痛いですが」

「腫れていないか？」

「はい。確かめますか？」

「ああ。ただ、足だけを見るんじゃない」

「どうすれば良いですか？」

「最初に会った時のことを覚えているか？」

「はい」

「あの格好をしろ」

「はい」

アルミニアは身体を二つに折り、足を広げて自分の手で保持した。

けれども、初めて会った時とは異なり、期待に満ち溢れた目をし

ている。

薄暗い灯りの中で、私は少女の肉体を丹念に検分した。

前よりも、少し身体に肉が付いてきた感じがする。

盗人を蹴ったという足は、ほとんど腫れていなかった。

「足を冷やすか？ 水をもってこさせるぞ」

「人を呼ばないで下さい」

「分かった。もう、その格好をしなくて良い」

私の命令に従って、アルミニアはベッドの上に座り直した。

彼女は私にしがみついてくる。

「今日はお前のお陰で助かった」

「はい」

「でも、無理はするな。お前が怪我をしたら、買った意味が無くなる」

「気をつけます」

「それにしても、お前は気が強いな」

「そうですか？ 奥様もエゲリアも気が強そうですが」

「私の好みだと言いたいのか？」

アルミニアは返事の代わりにサーウィウム(ディープキス)をねだってきた。

彼女は私の舌を何度も強く吸ってくる。

「そろそろお手つきにして下さい。泥棒よりも、そちらの方がよほど心配です」

「お前はまだ幼い」

「大丈夫です。ご主人様が何度も手ほどきして下さいますし」

「どうしてそう思う？」

「テルマエで私ぐらいの背丈の子でも、フォトゥエレ（性行為）していたのを見たからです。私も早く大人になりたいです」

「そうか。しかし、怪我をしそうだったら止めるぞ」

「ご主人様にお任せします」

「分かった。少し待て」

私はアルミニアを置いてクビクルム（寝室）を出ると、薄暗いタブリウム（執務室）に入り、卓上にある毛抜きを探り当てた。

寝室に戻った私は、もう一度彼女に足を広げさせる。

器用に足首を掴み、股間を露わにした少女の前に腰を下ろした私は、毛抜きでまばらに生えた陰毛を抜いていく。

「これからは、お前もクンヌス（女性器）の手入れをきちんとするんだ。ここには毛を一本も生やすな」

「はい」

毛を抜かれるたびに、アルミニアは下腹を凹ませ鼻を鳴らす。

けれども、痛みに耐える姿とは裏腹に、彼女のクンヌス（女性器）からおおびただしい蜜が溢れてくる。

「濡れてきたな。興奮しているのか？」

「はい。ご主人様に触られていると思っただけで興奮します」

アルミニアの切ない声音を耳にした私は、これ以上無いほどウィルガ（陰茎）を膨らませた。

だが、少女にのしかかりたい衝動を押し殺し、最後の一本まで金色の陰毛を抜き取っていく。

ピステイッラ（めしべ）を綺麗に掃除し終えた私は、陰毛と毛抜きをテーブルに置いた。

「服を脱がせろ」

私の声を聞いたアルミニアは立ち上がり、トゥニカの裾に手を掛けた。

彼女は私を全裸にすると、間を置かずに寝転がり、そそり立つメントウラ（剛直）に手を添えて舐めしゃぶる。

「フォトゥエレ（性行為）の作法にも慣れてきたな」

私は少女奴隷の片手で頭を掴み、もう片方の手を股間にあてがうと、クンヌス（女性器）をまさぐった。

やがてハスタ（男根）がこれ以上ないという程まで硬くなったところで、私は腰を引いて奉仕を中止させ、彼女の身体にのしかかった。

「入れるぞ」

私がメントウラ（剛直）の先端を女陰の入り口にあてがうと、さすがのアルミニアも不安そうな面持ちになった。

「逃げるなよ」

私は金髪の少女に念を押してから腰を落とす。

ペニス処女のクンヌス（女性器）を貫いた。

アルミニアの身体が石像のように固まった。

彼女は組んだ両手で顎を押さえ、悲鳴を殺している。

痛みを訴えたら、フォトゥエレ（性行為）を途中で止められると思っただろう。



その健気さが、私をより奮い立たせてしまう。

私は苦痛を堪えるアルミニアの上で獣のように腰を振った。

やがて限界が来たので彼女の中に放精する。

アルミニアからハスタ（男根）を引き抜いた私は、彼女の太股を叩いた。

金髪の少女は身体の力を抜いて、大きく息をする。

「よく頑張ったな」

私は処女を捧げた奴隷を褒め、彼女を抱き寄せた。

「まだ脚の間に何か入っている感じがします」

アルミニアは仰向けの姿勢で、顔をしかめている。

「まだ痛むか？」

「少し。最初は口に指を突っ込まれて、左右に引っ張られたような痛みでした」

「痛みが続くようなら当分は二度目をしない」

「大丈夫です」

「そういうことは時間が経ってから言うんだ」

「はい。でも、ご主人様にフォトゥエレ（性行為）してもらえて嬉しかったです」

「これで一人前の女だからな」

「はい。あの、これからもしただけますか？」

「ああ。痛みが引いたら、またしよう」

「はい」

アルミニアは痛がっているのか嬉しがっているのか、よく分から

ない顔をした。

「こら。後始末を忘れてるぞ」

私が細い肩を小突くと、彼女は慌てて私の股間に顔を埋め、自らの処女を奪ったペニスを頬張った。

（翻案者注・この後、宴会の準備が終わり、開催される模様が書かれていたはずなのだが、写本自体に酷い欠損があったため筋が確定できず削除した。従って、これ以降の正確な巻数は不明である。しかし、便宜上次に第十六巻として残りも通して番号をつけた。また、削除部分には断片的ながらトゥリヌスがアルミニアと何度か性交渉を持ったことが窺える描写があった）

## XVI

コミッサティオ（無礼講）の翌朝はだるい。

最初からサルタティオ（表敬訪問）は開かないと決めていたから良いものの、祈祷までしなければメルクリウス（ギリシア神話のマーキュリーと同一視された。旅人と商人の神で、恐らくトゥリヌス家で崇拜の対象となっていた）の加護を失いかねない。

ラリウム（神棚）に祈り、先日の残り物で朝食を済ませた私は、タブリヌム（執務室）のソファに座ってただ時が過ぎゆくのを見守っていた。

今頃は護衛役の奴隷が料理人をシセンナの家に送り届けているはずだ。

娼婦達もルパーナル（娼館）に戻った頃だろう。

先日の宴会はつつがなく終わった。

これで当家のワインが売れ残ることは無い。

プブリウスを安心させるために、トゥスクルム（現在のイタリア共和国、フラスカーティ）まで使いを出さねばならない。

手紙を書き、タベラーリウス（飛脚）を雇う。

すべき事は分かっている。

だが、気力が湧いてこない。

私は卓上にあつた髑髏の像を引き寄せた。

「明日を信じず、その日を摘め」

彫られた詩の一節を詠唱する。

するとオルクス（死神）に囚われる恐怖が心中にわき起こり、少しだけ倦怠を解消してくれる。

ここに座ついても花を摘むことはできない。

ソファから立ち上がった私は、ペリステリウム（中庭）に顔を向けた。

そこには、こちらを覗いているエゲリアの姿があつた。

昨晚と同じ衣裳を身につけている。

「どうした？」

いぶかしんだ私は踊り子を手招いた。

彼女は小走りで私に近寄ってくる。

「お早うございます、ご主人様」

「もう昼だ」

「昨日のコミッサティオ（無礼講）は上手くいききましたか？」

「お前が見ていたとおりだ。良い踊りだったぞ」

「ありがとうございます」

「しかし、なんでまだその服を着ているんだ？ 今日休んでいるろ」

「はい。お休みさせていただきませう」

「話がすれ違つていような気がするのだが」

私はエゲリアの着ている衣裳をもう一度見直した。

すると彼女は、その場で一回転してから衣裳の裾を持ち上げる。

エゲリアはスプリガークルム（下着）を身につけていなかった。

踊り子の股間を凝視した私は唇を舐める。

「そういうことか」

「昨日の宴会では、見せるだけの役目だったので、ご褒美をいただきたいと思ひまして」

「まだ昨日の酒が抜けていないんだ」

「大丈夫です。私がマッサージしてあげますから」

タブリヌム（執務室）に上がり込んだエゲリアは、私の背中を押してクビクルム（寝室）に押し込んでしまう。

二人きりになると、踊り子は全裸になった。

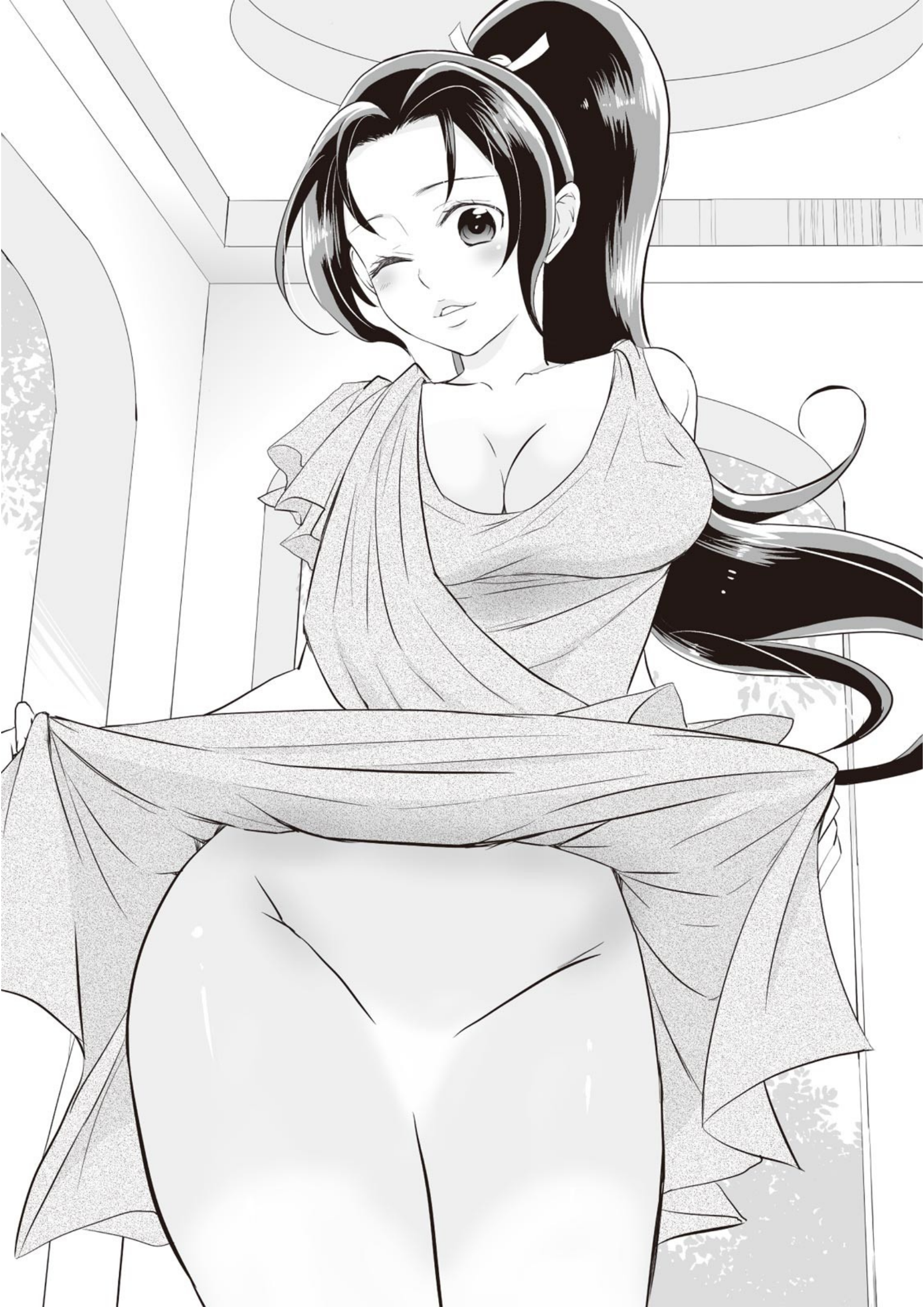
衣裳をたたみ机の上に置いた少女は、私に抱きついてくる。

「最近、可愛がつて貰つてないですよ？ アルミニアをお手つきにしたから忙しいんでしょう？」

「まあ、なんだ、悪いとは思っている」

「本当に？」

「本当だ」



「じゃあ、今日は昨日のご褒美に可愛がって。ご主人様のお役に立っ  
たんでしょ？」

「そうだな。少し待っている」

私はフォトゥエレ（性行為）をねだるエゲリアを置き去りにして、  
タブリヌムに戻った。

続いてタンスからオリスボス（張り型）を取り出し、香油が入っ  
たガラスの容器も用意する。

準備ができた私はアトリウムに足を踏み入れた。

そこで偶然アルミニアを見つけ、私の寝室に人肌程度のぬるま湯  
を持つてくるように申しつける。

クビクルム（寝室）に戻ると、エゲリアがぼんやりした面持ちで  
ベッドに腰掛けているのが見えた。

けれども、彼女は私が手にしたオリスボス（張り型）に気づき、  
顔を真っ赤に染める。

「それ、使うんですか？」

「前に使ったことがあるだろう？」

「だから訊いてるんです」

「何か問題でもあるか？」

「あるのを知ってるくせに。悪人！」

「嫌なら止めて良いぞ」

「駄目よ。そうしたら、奥さんかアルミニアにするんでしょう？」

「そうだ」

「もう。どうなっても知らないから」

私はエゲリアに見せつけるように、オリスボス（張り型）とガラ  
ス容器を机に置いた。

彼女はそれだけで落ち着きを失ったが、それでも奴隷の義務を怠  
ることは無く、私をベッドに上げてベルトを外し、トゥニカと下着  
を脱がす。

「舐めろ」

私が命じると、踊り子は躊躇なくペニスを頬張った。

彼女に奉仕をさせている間に、アルミニアがぬるま湯の入った深  
皿を持つてくる。

金髪の少女は私とエゲリアがまぐわう姿を見て目を見開いたが、  
すぐに元の顔に戻ると深皿を卓上に置いた。

「これをどうするんですか？」

「そこにあるオリスボス（張り型）を入れろ」

「このプリアープスの形をしたやつですか？」

「そうだ。ちゃんと湯を人肌に冷ましたな？」

「はい」

「いいぞ。今日は主人のフォトゥエレ（性行為）をお前に見せてやる」  
オリスボスを深皿に入れたアルミニアは、興味津々といった顔つ  
きでベッドに近寄ってきた。私は彼女を片手で制し、香油の入った  
瓶を持つてこさせる。

「仰向けに寝ろ」

私の指示を聞いたエゲリアは、口からメントウラ（剛直）を離し、  
仰向けに転がった。

アルミニアが見守る中で、私は踊り子の身体を二つに折り、膝の裏に手を通させる。

「これでクヌス（女性器）もアヌス（肛門）も見えるな」

「はい」

「今日は、こっちの穴も使う」

私はガラスの容器を傾け、エゲリアのアヌス（肛門）に香油を垂らす。

踊り子奴隷は身体を一度だけ震わせたが、姿勢を変えようとはしない。

ここで嫌がったり逃げたりしたら、アルミニアが代わりになるのが分かっていけるだろう。

私は香油を塗布した肛門を指で貫いてほぐす。

踊り子は首を振って恥ずかしがるが、私は知らぬふりをする。

「オリスボス（張り型）を持ってこい」

エゲリアのアヌス（肛門）がほぐれると、私はベッドの端で踊り子を見つめていたアルミニアの背中を軽く叩く。

彼女はベッドを下りると深皿に入ったお湯で暖められたオリスボス（張り型）を掴んで戻ってくる。

「どうぞ」

温められた金属のメントウラ（剛直）を掴んだ私は、それにも香油を垂らしてエゲリアのアヌス（肛門）に押し込んでいく。

踊り子の口からすすり泣きが漏れた。

だが、彼女のピステイッラ（めしべ）からは蜜が溢れだしている。

「この前、テルマエに行った時に、私と同じぐらいの男の子もお尻にペニスを入れていましたけど、それと同じですか？」

「ああ。ただ、女の場合は両方入れられる」

「気持ち良いんですね？」

「そうだ。でも、お前にはまだよく分からないだろう？」

「はい。もう、痛くは無いですけど」

「女は悦びを覚えるまでに時間がかかる。気にするな」

「はい」

「そろそろ始めるぞ」

「待って！ 待って！」

私はエゲリアの制止を振り切って、彼女にのしかかった。

ハスタ（男根）がクヌス（女性器）を貫くと、踊り子は耳をつんざく悲鳴を上げる。

私は後ろの穴を塞がれて狭くなった前の穴の締め付けを愉しみつつ、力加減をせずに腰を振った。

エゲリアは最初こそ手をばたつかせて抵抗していたものの、小水を漏らした途端に腰が抜けたようで、「悪人！ 悪人！」と私を罵りながらも犯されるがままになった。

しかし、少し経つとそれすらもできなくなり、惚けた顔で唸り声をあげ始める。

それでも私が止めないと、彼女は自分から私の肩に足を乗せ、鼻息を鳴らしながらサーウィウム（ディープキス）をねだってきた。

私は奴隷の態度に満ち足りた気持ちになって放精した。



フォトウエレ（性行為）を終えた私が力を失ったエゲリアの身体から離れて横を向くと、手で口を押さえているアルミニアの姿が目に入った。

彼女は息が切れかけている私に、次々と質問を投げつけてくる。

「エゲリアは大丈夫なんですか？」

「いや、大丈夫ではないな」

「おかしくなってますよね？」

「ああ。だが、少しすれば正気に戻る」

「お尻に道具を入れてフォトウエレ（性行為）すると、誰でもああなるんですか？」

「いや、そうなる女とまらない女がいる」

「私はどっちなんでしょうか？」

「やってみなければ分からない。ただ、今にしても意味が無い」

「まだご主人様とのフォトウエレ（性行為）で感じていないからですか？」

「ああ。エゲリアと私の付き合いは五年以上だ。妻とも四年は一緒にいる」

「はい。でも、できれば早く覚えたいです」

私は苦笑してアルミニアの頭を撫でた。

「無理に大人にならなくていいんだぞ」

けれども、彼女は私の慰めに返事をせず、代わりに汚れたペニスに接吻した。

## XVII

ユステイナのポピーナ（軽食堂）は客でこった返していた。

その大半は、私のクリエンテス（庇護民）だ。

シセンナが弁護を担当した裁判に聴衆として顔を出し、彼の発言が有利になるように野次を飛ばしてくれたのだ。

そこで乾いてしまった喉を、ポピーナで癒やそうという話が出てくるのは自然な流れだった。

もちろん勘定は全て私持ちで、既に相当の前金をユステイナに渡してある。

ただし、私は長居をするつもりはない。

クリエンテス達にも、私の名前は出さないように念を押してある。目はどこにでもあるし、口さがない連中もどこにでもいるものだ。

ポピーナの女将に簡単な挨拶を済ませた私は、乱闘に備えて用意した四名の護衛を連れて家路につく。

五、六時間とはいえ、人混みの中で立っているのは疲れる。

トガ（長い布でローマ市民の正装だった）を外してカルケウス（ローマ市民のみが履くことを許された革靴）を脱ぎ、サンダルに履き替えた私は奴隷達を任務から解放し、アトリウムに足を踏み入れた。

薄暗い広間には、ランプの光に照らされたユリアの姿があった。

「お帰りなさい」

妻は私を抱きしめ、オスクラム（唇を閉じたキス）をしてきた。

「お疲れでしょう。どうぞおかけになって下さい」

彼女は私に椅子を勧め、ストウルクトル（食事の配膳係）を呼ぶと、水で割ったワインを持ってくるように言いつける。

「裁判はどうでしたか？」

「もちろん有利に進んだ。そもそもシセンナは声がよく通る」

「上手くいって何よりです。それで、話が変わるのですが、私から

も旦那様にお伝えしたいことがあります」

「何だ？」

「二ヶ月生理がありません」

ユリアの言葉を理解した私は、彼女の顔をまじまじと見つめた。

ランプの明かりに照らされた妻のかんばせが、ユーノーに祝福されてるように思えてくる。

「子を孕んだのか？」

「まだはつきりしませんが、たぶん」

「そうか。子供か」

私は椅子から立ち上がり、ユリアを優しく抱いた。

彼女は再び私にオスクルム（唇を閉じたキス）をする。

「旦那様に頑張っていたいただいた甲斐がありましたわ」

「そうか」

「お陰でエゲリアに先を越されずに済みましたし」

「ユリア。今の一言で、私の感激が台無しだ」

「女奴隷の方が先に主人の子を孕んだとあっては、妻の面目が丸つぶれですから」

「それはそうだ」

私が同意すると、ユリアは口づけの種類をサーウィウム（デーブキス）に切り替える。

「でも、ベッドでは奴隷という約束は変えませんよ。私は母のように、跡継ぎを産むだけの道具になるのは真つ平です」

「ユリア。私の感動がもっと台無しだ」

「そういう次第で、今後でも可愛がつて下さいね。今夜はエゲリアを慰めてあげてもかまいませんが」

「もう知ってるのか？」

「はい」

「自分で伝えたのか？」

「秘密です」

ユリアは微笑みながら私の腕をすり抜け、二階に続く階段を上っていった。

私が呆然としていると、ストウルクトル（食事の配膳係）がワインを入れたゴブレットを持ってくる。

一杯引っかけた気が取り直した私は、歯を磨き就寝の準備を整えクビクルム（寝室）に入る。

すると、どういいうわけか全裸のアルミニアが困惑した面持ちで椅子に座っている姿が見えた。

彼女は無言でベッドに顔を向ける。

そこには奇妙な形状に盛り上がる掛け布団があった。事情を察した私が布団を剥くと、中から全裸のエゲリアが現れる。

踊り子は人形のように表情を失っていた。

「ベッド暖め役の代役です」

彼女は私を見上げると、一言だけ告げて身体を丸めてしまう。

さすがの私も堪忍袋の緒が切れた。

「奴隷失格だな。転売するか？」

私が脅しをかけると、エゲリアは蛙のように飛び起きた。

彼女は私の腕にしがみつき、泣いて許しを請い始める。

「ごめんなさい。奥様からかわれたのが悔しくて、我を忘れていました」

「ユリアから話を聞いている」

「ご主人様の子供がどうしても欲しかったから、先を越されたと思ったら何もかもがどうでも良くなってしまったんです」

「今は違うな？」

「はい。売り飛ばすなんて言わないで下さい。ずっとここにいさせて下さい。あらゆる神々に誓います」

「二度目は無いぞ」

「分かっています。もう、一度とこんな真似はしません」

エゲリアの身体は恐怖のため小刻みに震えていた。

ため息をついた私は彼女を許すことにする。

「お前を許す。その代わり、ユリアと張り合うな」

「分かっています」

「分かっているだろうか？」

「ご主人様が悪いんですよ。奴隷と奥様をベッドの上でごっちゃにするからこうなるんです」

「私の初体験の相手は女奴隷で、二番目も三番目も女奴隷が相手で、今だって妻よりもお前の方がつき合っている時間が長いんだぞ」

「奥様にできないことを私でしてくださいよ。そうすれば、お互いにぶつかることもなくなりますから」

「妻も奴隷も同じ人間なんだから、そんなに違う事なんてできるわけが無いだろうか？」

「そこを考えるのが主人の役目じゃないですか」

エゲリアにやり込められた私は、慥然として腕を組んだ。

言い合いが一段落したと判断したのか、アルミニアがベッドによじ上ってくる。

「エゲリア。もう交代して下さい。ベッドの暖めは私の役目です」

「嫌よ。これで貴女にまで先を越されたら立つ瀬が無いわ」

「そんなの知りません」

罵りあう二人の少女奴隷を目にした私は、同時に彼女達を突き飛ばした。

「もういい。当分は二人でベッドの暖め役をしろ。よく考えたら、

これは妻に任せられない役目だからな」

私の判決を聞いたエゲリアは喜色満面になり、アルミニアは眉を吊り上げる。

「駄目ですよご主人様！ 私がいる意味がなくなっちゃうじゃないですか」

金髪の少女は私に食ってかかってきた。

「お前はエゲリアから二人がかりで私に奉仕する方法を教わるんだ」

けれども私が抗議を一蹴すると、彼女は不承不承といった面持ちで首を縦に振る。

「分かりました」

「そういえば、アルミニアは見ていただけで、二人で一緒にご主人様にお仕えしたことが無かったわね」

少しは溜飲が下がったのか、言い分が通ったエゲリアは鷹揚な態度で年下の奴隷に話しかけた。

アルミニアは諦めたようにもう一度頷いてみせる。

「ないです」

「私が見本を見せるわ」

エゲリアは私に近寄ると、ベルトとトゥニカとスプリガークルム（下着）を奪いとった。

それから私を仰向けに寝かせ、アルミニアを傍らに呼び寄せる。

「こうやってご主人様に寝てもらって、一人が乳首、もう一人がファスキヌス（喜悦棒）を舐めるのが基本よ」

「二人同時に？」

「そう。同時にされた方が気持ち良いから」

「はい」

「それで、ご主人様がフォトゥエレ（性行為）をしたくなったら、言われたとおりにすれば良いし、何も言わなかったらそのまま最後まですれば良いのよ」

「はい」

「それじゃ、最初は私が下で貴女が上、しばらくしたら交代しましょ

う」

エゲリアはそう言うと、私の両脚を広げて間に収まった。

アルミニアが私の片方の乳首を吸いつつ、もう片方の乳首を指で弄りだす。

こうして、三人でフォトゥエレ（性行為）するのは久しぶりだ。

アルミニアを買ってきたのを、妻とエゲリアから咎められた時以來だろうか？

処女だったアルミニアに手間取られて、自分が一方的に奉仕される立場を失念していた。

適当に言っただけだったのだが、これはこれで悪くないような気がする。

そう思うと、私のウィルガ（陰茎）が牛の角のようにそそり立った。

「大きくなった」

股間からエゲリアが放つ歓喜の音が聞こえてくる。

しばらく二人の少女に愛撫をして貰っているうちに、やる気が漲ってきた。

アルミニアとサーウィウム（ディープキス）を交わした私は、彼女を押しつけると半身を起こす。

「二人とも、四つん這いになって私の前に並べ。尻をこっちに突き出すんだ」

奴隷達は私に言われるまま牝ライオンのポーズをとった。

私は左右の中指を立て、並べた奴隷達のピステイッラ（めしべ）に挿入する。



二人とも奥まで充分に湿っていたが、中の感触はかなり違う。

私は指を前後に動かして、少女達が上げる甘い声音を愉しんだ。

愛撫を続けていると、挿入ではそれほど感じないアルミニアが、珍しく姿勢を崩して腰を振り始める。

ひよつとすると、この娘はまだペニスより細い指を入れる方が良いのかもしれない。

そこで私は自分の欲望をエゲリアにぶつけることにした。

指を抜いて尻を叩いてやると、踊り子はすぐさまこちらにクンヌス（女性器）を差し出してくる。

「いいぞ。分かってるな」

私は従順になったエゲリアをメントウラ（剛直）で貫いた。

彼女は嬉しそうに啼き声をあげる。

私は腰を突き出しながら、右手の指を動かす事も忘れなかった。

やがて最初にエゲリアが、続いてアルミニアが金切り声を上げて果てる。

私も我慢はせず、彼女達に続いて果てた。

「気に入ったぞ。これからしばらくは二人と一緒にする」

腕と胸に浮かんだ汗を手で拭き取った私は、アルミニアとエゲリアに宣言した。

二人の奴隷は顔を合わせてからこちらを振り返り、同意の印に深く頷いた。

## XVIII

サルタティオ（表敬訪問）の最後に、パウサニアスが来た。

ノーマンクラートル（名告げ奴隷）に退出を命じ、タブリヌム（執務室）で二人きりになると、彼は布に包んでいた板絵を見せてくれる。

描かれていたのは全裸のアルミニアだった。

両脚を広げ、卑猥な格好をしている。

私は板絵を眺めながら、画家の部屋に彼女を連れて行った時の事を思い出し、笑みがこぼれるのを抑えられなかった。

パウサニアスがそれを見逃すはずがなく、追従笑いをしてくれる。

「気に入られたようですね。ピクトルも素晴らしいモデルを描けたと大喜びでしたよ」

「ピクトルは少女を描くのがローマで一番上手いからな。アルミニアの良さも分かるはずだ」

「ご主人に彼女を買うことを薦めた甲斐がありました」

「感謝しているよ。ところで、この絵の代金は幾らだ？」

「いつも通りで三〇セステルティウスでございます」

「安いな。今回は色をつける。その分だけ、ピクトルにいい絵を描かせてくれ」

私はデナリウス銀貨（1デナリウス＝4セステルティウス）一〇枚で支払いを済ませ、絵を引き取った。

予想外の収入に悦んだパウサニアスは、足取りも軽くタブリヌム（執務室）を去って行った。

私は独りでソファに座り、アルミニアの絵を近づけたり遠ざけたりしながら堪能する。

朝から執務もせず趣味を満喫した私は、絵を卓上に置いて髑髏の像を引き寄せた。

今はオルクス（死神）の恐怖を感じない。

自分のやりたいことをしているからだろうか？

「まだお前のようにならんぞ」

私はソファから立ち上がり、髑髏の像を机の隅へと追いやった。

ペリステリウム（中庭）では、エゲリアが伴奏なしで踊りの練習をしていた。

私は彼女に声をかけず、絵を持ってクビクルム（寝室）に引っ込んだ。

ベッドの上には全裸のアルミニアが寝転んでいた。

息を殺して股間をまさぐっている。

少女は私の気配に気付き、身体を丸めて背を向けた。

私は笑いをかみ殺し、ベッドに近寄っていく。

「どうした？」

「ごめんなさい。マストウルバーリー（自慰）をしていました」

「盛りがついているのか？」

「はい。その、三日もしていただいていないので」

「三日空けただけだろうか？」

「ごめんなさい。分かっているんですが、我慢出来ないんです」

「何を考えてマストウルバーリー（自慰）をしていた？いつもの通りか？」

「そうです。ご主人様のプリアープスが、私の中に入ったり出たりするのを想像しながらしていました」

「フォトゥエレ（性行为）が好きか？」

「好きです！大好きです！」

「そうか。ただ、隠れてマストウルバーリー（自慰）をするのは駄目だと言っただろう？」

「ごめんなさい。ずっとそのことばかり考えていると思われるのが嫌だったんです」

「お前が淫乱なのは分かっている」

「恥ずかしい」

「マストウルバーリー（自慰）をするところを見せろ」

「はい」

仰向けになったアルミニアは大きく足を開き、ピステイッラ（めしべ）を私に見せながら、その奥に指を突っ込んでかき回した。

金髪の少女の息はたちまち乱れ、腰はくねり、可愛らしい口からよだれが溢れてくる。

少しすると彼女はうわごとのように「ご主人様」と呟き、最後には呻き声を上げて身体をすくませた。

アルミニアが果てたのを見計らい、私は絵を彼女に見せる。

「どうだ？ 良い出来だろうか？」

金髪の少女は肩で息をしながら目を見開いた。

「それは、この前描いて貰ったものですか？」

「そうだ。お前だ。どう見える？」

「卑猥な格好をしています」

「今もしていたな？」

「はい。いつもご主人様とフォトゥエレ（性行為）の事ばかり考えています。すみません」

「いつからそうなった？」

「ご主人様に、ピスティッラ（めしべ）を触ってもらおうようになって、しばらくしてからだと思います」

「それまでは嫌だったか？」

「いいえ。でも、怖かったです」

「何が怖かった？」

「捨てられるのが怖かったです。ご主人様はご飯を食べさせてくれたし、ぶたなかったし、優しくして貰っていたから、転売されるのが嫌でした」

「フォトゥエレ（性行為）を断ったら転売されると思ったか？」

「はい。でも、ご主人様とフォトゥエレ（性行為）するのが嫌だったわけではありません。それで気に入られないかもしれないと思うと怖かったんです」

「今はどうだ？」

「もっと怖いんです。こんな気持ち良いことを教わったのに、転売されたらと思うと怖くて何も考えられなくなります。エゲリアも同じ気持ちなんですよね？」

「さあ、どうかな？」

「私は彼女ののように、ご主人様のお役に立てるように無いですし、余計に怖いです」

アルミニアはそう言いながら、股間をまさぐるのを止めなかった。

私は絵を机に置くと、ベルトを外して全裸の少女の傍らに座る。アルミニアは自慰を止め、私にしがみついて臭いを嗅ぎ始める。

「ああ、いい臭い。フォトゥエレ（性行為）したくなってきます。駄目ですか？」

「どんなフォトゥエレ（性行為）がしたい？」

「ご主人様は何もしなくて良いです。私が全部します」

「そういうことは、馬の逆乗り」だな？」

「はい。だから、フォトゥエレ（性行為）してください。プリアープスを恵んでください」

「いいだろう。始めろ」

私が許可を与えると、アルミニアはそれまでの緩慢な動きが嘘だったかのように、ベッドから飛び下りて銀箔張りの大きな鏡と三脚を部屋の隅から運んできた。

彼女は姿見を三脚に立てかけると、私の衣服を剥ぐ。

全裸になった私は鏡に足を向けて横になった。

アルミニアはただちに股間に顔を寄せ、勃起したハスタ（男根）に手を添える。

彼女はそれをしごきながら先端を頬張り、強く吸ってくる。

長い間エゲリアと一緒に犯していた成果があり、金髪の少女の性技もかなりの腕前まで育っていた。

私は身体の力を抜いて、奴隷の奉仕に身を任す。

「そろそろいいぞ」

口交を堪能した私は、アルミニニアにフォトゥエレ（性行為）を促した。

少女は私の身体を跨ぎ、腰を中程まで落としてからメントウラ（剛直）に手を添えて、自らのクンヌス（女性器）に先端を迎え入れる。

「ああ、三日ぶり！」

両脚を限界まで開き、腰を落としたアルミニニアは感極まった声を上げた。

鏡に映った少女の顔は既に惚けている。

彼女は美しい金髪を振り乱し、狂ったように腰を振った。

寝室の外にまで聞こえるほどの大声を出して叫び、一転してだらしな顔つきになると失禁する。

しばらくすると、騒ぎを聞きつけたエゲリアが入り口に立った。

彼女はアルミニニアの正気を失った様子を見て嘆息する。

「可哀想に。とうとう、悪人に身体を変えられちゃったのね」

「こら、エゲリア。誰が悪人だって？」

「分かってるくせに。それで、アルミニニアはどれぐらいフォトゥエレ（性行為）を我慢させられたの？ 昨日は私がご主人様の相手をしていたから、してないのは知ってるけど」

「三日です！ 三日我慢出来ませんでした！」

「三日も？ それは大変だったわね」

「大変だった！ もう、頭がおかしくなっていました！」

「分かるわ」

エゲリアは目を細め、服を脱ぎだした。

「私は二日ももたないから。この悪人に、フォトゥエレ（性行為）漬けにされちゃったのよ」

踊り子はベッドに上がってくると、私の隣に身体を横たえる。

「どう、ご主人様。お望みの結果になった？」

「予想以上だな。アルミニニアにはもつと時間を掛けるつもりだったからな」

「転売されるのが怖かったんでしょう？」

「そう言っていた。お前も同じ気持ちだとも言っていたな」

「同じ奴隷だから分かるわ。ここ以上に良い場所なんてなさそうだし」

「そうかな？」

「故郷にいても、こんな綺麗な服を着るのは無理だったし、踊っているだけで何もしなくていい人生なんて絶対であり得なかったし」

「なるほどな」

「でも、一番大きいのはご主人様よ。こんな気持ちの良い事を教え込まれたら、誰もここから離れたくなくなるはずよ」

「そう言われたいから仕込んだんだ」

「悪人」

アルミニニアが無心に腰を振っている背後で、私はエゲリアとサーウィウム（ディープリクス）を交わす。

それがきっかけとなって、私は口を塞がれた状態で放精した。



気が抜けた私はアルミニアの太股を叩いてフォトゥエレ(性行為)を終わらせる。

汗まみれの少女はピステイッラ(めしべ)からペニスを抜くと、私の胸に倒れ込んできた。

しかし、珍しく眠気は襲ってこないようで、満足そうな笑みを浮かべている。

「凄く良かったです。ご主人様はどうでしたか？ エゲリアと話していたみたいですけど」

「気持ちよくなければ、お前の中に出したりしないよ」  
「良かった」

アルミニアは私の胸に顔を擦りつけてきた。

彼女の呼吸が整うのを待っていると、今度はユリアがクビクルム(寝室)を覗きに来る。

「旦那様。子も授かったことですし、多少のことは多めに見ますが、ここまで大きな声を出されると、妻としてはともかく奴隷としては穏やかな気持ちでいられないのですが」

「奥様。アルミニアがとうとう仕込まれたんですよ」

「最近、顔つきが女になっていたから、何となくそうじゃないかと思っていたわ。私がこの子の年の頃は、まだ処女だったのに」

「ご主人様が我慢出来なかったせいですよ」

「そうね。貴女の言うとおりだわ」

女奴隷と女主人の見解が一致する中で、私はアルミニアを除けて起き上がった。

「二人とも、私が悪いみたいな言い方をするな」

「旦那様が悪くなかったら、一体誰が悪いんですか？ 私だって、もうこんなですよ」

ユリアはストラ、ストロピウム(ブラジャー)、スプリガークルム(下着)と順番に脱いで丸裸になった。

彼女は私の手首を掴み、股間を触らせる。

妻のクンヌス(女性器)はお漏らしをしたように濡れていた。

「少し休ませてくれ。三対一は辛い。もう、一回出してるんだ」  
私は手を振ってベッドを下り、執務室に逃げ出した。

しかし三人の奴隷はすぐに追いつくと、私をソファに座らせる。

「アルミニア。貴女はもう出して貰ったんだから、旦那様が二度目を出来るようにご奉仕なさい」

ユリアに命じられたアルミニアはソファの前で跪き、萎えかけた私のプリアープスを頬張り、睾丸をくすぐった。

自分でも信じられなかったが、ペニスはたちまち力を取り戻していく。

「旦那様。今日のお仕事はお休みになって下さい」

ユリアは私の左側に座ると、顔を近づけてきた。

私は右側に座ったエゲリアの乳房を揉みしだきながら、奴隷になりきっている妻と舌を絡めあった。



伝説によると、国家としての古代ローマは紀元前八世紀に現在のイタリア共和国にあるローマ市で建国されました。ローマ市は紀元三三〇年に皇帝がコンスタンティノポリス（現在のトルコ共和国にあるイスタンブール）へと遷都した段階で全土の首都としての役割を終え、帝国が東西に分裂した後の紀元五世紀以降は一時衰退しました。これ以降も、ローマの名を冠した国家は続いていくのですが、本書ではその詳細について割愛します。

前述したように、古代ローマという名称で指し示すことが可能な年代は1000年を超えるもので、これを日本に置き換えると平安時代から現代までを含むこととなります。つまり、時代の経過と共に政治制度、社会状況が変化しているため、これらを一括して説明することは不可能です。

そこで、本書では“*Vitae Cune Servitris*”（奴隷娘たちとの生活）が執筆されたと推測されている一〜二世紀に年代を絞り、更に場所を首都であるローマに限定した上で、古代ローマの政治経済、生活などについて説明していきたいと思えます。

## I 古代ローマの政治経済

### 【産業】

古代ローマは典型的な農業国家でした。商工業に従事する人々の身分は低く、職人に至っては大半が奴隷か解放奴隷でした。

数少ない例外的な場所として、ギリシアのタルソス（現在のトルコ共和国、タルソス）やギリシアのパトライ（現在のギリシャ共和国、パトライ）が挙げられますが、これらは亜麻や山羊の毛、羊毛などの産地に隣接した都市で、織物が盛んだったという特殊な事情がありました。

また古代ローマの農地は、現代の先進国のように短期間で作物の品種改良を行い、除草剤や肥料を上手に利用する事によって、単位面積あたりの収穫量を劇的に増やすだけの科学技術（特に一九四〇年代から一九六〇年代に起きた農業技術の革新を「緑の革命」と呼びます）は無く、主要作物の単位面積あたりの収穫量は低かったものと思われまます。

これが何を意味しているのかというと、

(A) 食糧生産に従事しないで生活できる人達の数が少なかった。

(B) 人口を増やすためには、農地を増やすしかなかった。

の2点ということになります。

まず(A)から考えましょつ。

たとえば、現代の日本で働いている人達の中に、農業や漁業といった食糧生産を行っている人達（第一次産業）が含まれる割合は、二〇一〇年の段階で7.4%に過ぎません。つまり、残りの92.6%の人達は、食糧生産に従事せず別の仕事をしていても餓死せずに生活できていることを示

しています。

この比率が古代ローマではどうだったのかははっきりしませんが、現代よりも遙かに高かったことは間違いないでしょう。ということは、食糧生産に従事せずに生活できた人達の数はそれほど多くなかったはずです。

これが商工業が発展しない最大の理由でした。食糧生産に従事している人達は、作った作物の大半を自分で食べてしまいます。余った食糧（余剰食糧）はほとんど無いので、商工業を専門として生活する人達を養うだけの力が社会全体にないのです。

次に(B)ですが、これは農地を開墾するが、他国を侵略しない限り、人口増加が望めないことを意味しています。つまり、自国の人口が増えたら、これを養うには他地域への進出以外の選択肢がほぼなく、それはたいいの場合、戦争を引き起こしました。

### 【インフラ・科学技術】

「すべての道はローマに通ず」ということわざがある通り、古代ローマでは公道の整備が盛んに行われていました。三世紀末の段階で、国営道路の総数は372本、延べキロ数は約8万5千キロというとても長い長さです。このような条件が整っていたにも関わらず、陸路での商品流通はほとんど行われず、道路は軍隊の派遣、公的通信のクルスス・プブリクス（郵便制度）、そして富裕層が自らの私信を遠隔地に送るため奴隷に代わっ

て依頼するタベラーリウス（飛脚）の移動に用いられる程度でした。

騎馬民族ではなかった古代ローマ人は主に徒歩で移動していました。馬車は高価かつサスペンションがなかったため、座った状態での長時間移動は激しい振動のせいで困難でした。そこで富裕層は人力で担ぐ輿に乗っていましたが、長距離の移動には不向きでした。

陸路の移動に適していた商品は、高額で軽い装飾品、貴金属、そして自分達で歩けるセルウス（奴隷）でした。

他の商品の輸送は船舶が受け持ちましたが、「産業」の項目でも述べたように、古代ローマでは商業に従事するのは身分の低い人間だと考えられていました。そこで、船舶に関しては、ギリシア人、フェニキア（現在のシリア・アラブ共和国近辺）人、アレクサンドリア人の関係者が多く、後にローマ系市民も参加することになるのですが、ネアポリス（現在のイタリア共和国、ナポリ）、タレントウム（現在のイタリア共和国、ターラント）、シラクサなどのイタリア半島南部の出身者が多く、ローマ市民と言ってもイタリア系（後述）が主体でした。

商船の大きさは搭載量1000〜1500トン規模のものが多かったようですが、船の構造が悪かったのか海難事故が続発しました。たとえば、首都ローマには、毎年推定で20〜27万トンの小麦がティベリス川（現在のテヴェレ川）から船で搬入されていましたが、その約20%が沈没するか積み

荷を失う事故を起こしていました。

未熟だったのは船舶だけではありません。医療分野はもっと酷く、紀元前三世紀になるまで医師という職業が存在しませんでした。また、医師の必要性が理解されてからも、その社会的地位は低く、奴隷が解放奴隷の仕事であると理解されていきました。

紀元前四六年になると、医師に従事する者にローマ市民権（後述）を付与するという法律ができましたが、それに伴い科学技術が劇的に発展したわけではなかったため、現在の医療知識で判断すると毒物を投与していた、リスクの高い手術方法が選択されたなどの問題が頻発していたために死者が絶えず、医師と人殺しが同義と見做されることも少なくありませんでした。

一方、武器などに使用していた鋼鉄（炭素を含んだ鉄）の重要性は理解されており、最初から炭素を含んでいる鉄鉱石が重視されました。有名な産地としてノリウム（現在のオーストリア共和国、ケルンテン州、ザルツブルク州、シュタイアーマルク州、ニーダーエスターライヒ州など）が挙げられます。

更に、これらの鉱石を採掘する技術は当時の他分野の水準よりも高く、採掘現場に用水路を引いて目当ての鉱物を不純物と一緒に水で押し流す（水力採掘）、火で熱してから（火力採掘）水をかけて一気に冷まし、急激な温度変化（熱衝撃）で岩盤を割るなど、比較的高度な技術が使用されていたことが判っています。

特に水力採掘はルイナ・モンティウム（山崩し）と呼ばれ、ヒスパニア・タッラコネンシス（現在のスペイン全土とポルトガル北部）で砂金を採取するのに利用されたことが良く知られています。

現在でも、スペインのレオン県には、水力採掘によって崩された跡地が、ラス・メドゥラスという名前が残っています。

### ローマ市民

古代ローマについて学ぼうと思った際に、最も厄介なのがローマ市民の定義です。

伝説によると、ローマは紀元前七五三年にロームルスという王によって建国されたことになっていますが歴史的な証拠はなく、実在人物がどうかも確定していません。

ロームルスは当時の古代ギリシア世界、エーゲ海沿岸（現在のトルコ領）で起こったトロイア戦争で敗走したトロイアの武将、アエネアースの子孫だとされています。アエネアースは各地を流転した後、イタリアのラティウムに定住して、地元民のラテン人と一緒にラウイニウム（現在のイタリア共和国、ブラティカ・ディ・マーレ村）という国を作ります。

ロームルスはこのラウイニウムのお家騒動が原因で、紆余曲折を経て、弟のレムスと一緒に都市国家ローマを建国します。そこはラウイニウムから20キロしか離れていない場所でした。

ここで興味深い事件が起こります。建国時のローマは男性の比率が異常に高かったため、近隣

## ローマ市民／軍制の変化

に居住していたサビニ人を騙して未婚の女性を誘拐して妻にしたのです。いわゆる「サビニの女たちの略奪」です。

これをきっかけに、ラテン人はサビニ人と混合。続いてローマの北部にいたエトルリア人と抗争を開始。ところが、この抗争で恐らくローマは敗北し、エトルリア系王家の支配下に入ります。

しかし、紀元前五〇九年にエトルリア人の王であるタルクィニウス・スペルプスをローマ市民が追放して共和政に移行しました。これ以降、ローマはゲンス（氏族）と呼ばれる血族集団の中でも人数が多かった大氏族出身のパトリキ（貴族）を中心に結成された元老院が事実上の最高機関として様々な政治的決定を下していくことになりました。これが成功し、抗争していたエトルリア人の諸都市を版図に組み込んでいくまでが、神話に彩られた古代ローマ王政期からローマ共和政初期までの大まかな流れです。

既に気付いている方が多いと思われるのですが、この段階でローマにはラテン人、サビニ人、そしてエトルリア人という3つの民族が混ざっていました。従って、当時の事情に詳しくない人が見ても、ある人物がラテン系ローマ市民か、サビニ系ローマ市民か、あるいはエトルリア系ローマ市民かは判然としないのです。しかも、ラテン人とサビニ人は初期に婚姻関係を結んでいますから、血筋としても「どっちなのか？」はよく判りません。

更に、共和政時代のローマはイタリア半島に点

在する各都市国家と同盟を結び、戦争に勝利することによって勢力範囲を拡大していくのですが、それに伴ってローマ市民の範囲も拡大していきます。また、紀元前一世紀前後にガイウス・マリウス（紀元前一五七～紀元前八六）が軍制改革を行い、ローマ軍を市民軍から職業軍へと変えた結果、ローマ市民にとって重荷だった軍役の義務がなくなった（後述）ため、この権利は魅力的なものとなりました。

特に大きかったのは税金です。共和政ローマの途中までは、ローマ市民には「戦時負担金」という税金の一種が義務づけられていました。ところが、戦争に勝ち占領地が拡大して、そこからの収奪で国家経営が可能になると、ローマ市民からの直接税は免除されるようになります。この他にも、不平等ではありましたが、選挙権、被選挙権、裁判権、控訴権などの諸権利が保障されていました。そこで、紀元前九〇年に、イタリア半島にある都市国家群が引き起こしたのが同盟市戦争です。彼らが要求したのはローマ市民権の付与でした。これは同年に成立したユリウス法によって実現し、紀元前八八年までに戦争は終息します。

次の変化はアウグストゥス（紀元前六三～紀元十四）の時代に起こりました。アウグストゥスは属州（占領地域）の住民でも補助兵（後述）として志願すれば税金を免除し、なおかつ満期除隊をした場合は世襲制のローマ市民権を付与するようになりました。ローマ市民しか議員になれない元老院の力を抑えて共和政派などの旧勢力の復権を防ぎ、

東方に拡大した属州の安定支配にも役立つ施策です。これで、占領地域の住民から次々とローマ市民が登壇することになります。

最終的にカラカラ帝（一八八～二一七）が一二二二年に発布した「アントニヌス勅令」によって、ローマ帝国内の住民全てにローマ市民権を付与します。その目的は税收の増加にあったようですが上手くいかず、ローマ帝国が滅亡する遠因となったという説もあります。

### 「軍制の変化」

前述したように、マリウスが軍制改革を行うまで、ローマ市民、あるいはローマ市民権と軍務は切っても切れない関係にありましたが、元々はエトルリア諸国で行われていた制度の模倣だったようです。

徴兵の対象となったのは17歳から46歳の男性です。任期が6年の国民皆兵制というのが通説で、基本的に武装は自弁だったため、武器の購入が難しい貧困層が戦力として期待できず、これが常に大きな問題になりました。

逆にお金があれば強力な武装が購入できるため、軍隊内では所持している資産によって5段階の区分がありました。このため、軍隊における名称と資産の程度が一致するという現象が起きました。たとえば日本語では「騎士階級」と翻訳されることの多いエクイテスですが、その実態はローマ市民内における富裕層を指しました。つまり、騎馬民族でなかったローマ人にとって、幼少期か

ら乗馬の訓練を受けられる者は金持ちの子弟ぐら  
いしかいかなかったわけです。

従ってローマ軍は次第に人数が多かった歩兵、  
それも重装歩兵と呼ばれる武装度が高い歩兵が主  
力になっていきます。そして、彼らの多くがプレ  
ブス（平民）と呼ばれる階級で、ローマ軍が活躍  
するに従って自分達の権利を主張し、パトリキ（貴  
族）と呼ばれる上位の階級と対立関係に陥りまし  
た。これを「身分闘争」と呼びます。

ここで厄介なのが、プレブスは平民という日本  
語訳のイメージと異なり、様々な武装が自弁でき  
る程度には裕福だったという点です。更に、「ロー  
マ市民」の項目でも述べたように、ローマの支配  
地域が増えると、それまではローマ市民と認定さ  
れていなかった人々が、ローマ市民の資格を持つ  
ケースが増えてきます。

たとえば、オクタウィウス氏は紀元前五世紀頃  
に設けられた植民都市、ウエリトラエ（現在のイ  
タリア共和国、ヴェネト）に住んでいたウォ  
ルスキー族の血縁で、身分的には平民でしたが、  
最終的には初代ローマ皇帝であるアウグストゥス  
を輩出しています。

つまり、ローマの支配地域が増えてくると、身  
分的には平民でありながら、その実態はローマ以  
外のイタリア半島における大土地所有者という人  
達が出てくるわけです。こうして、財力や政治的  
発言力を蓄えた平民の中から、既存のパトリキと  
婚姻関係や協力関係を結び、元老院の議員にまで  
なる例が出てきます。これをノビレス（新貴族）

と呼ぶのですが、あくまでも慣習であって法的な  
規定はありません。

その反対に、社会的地位が著しく低下してしま  
う事例もありました。決定的だったのは、軍事力  
が増大し、他国を支配下に収め始めた共和政中期  
から後期です。

まず、イタリア半島から他地域への徒歩による  
行軍は、戦争を長期化させました。そこで、何年  
にもわたって自分の農地を放置せざるを得ないプ  
レブスが出てきます。

次にローマ軍が敵対勢力を敗北に追いやった場  
合、その地域にある農地の一部を自分達のもの（国  
有化）にして、更に降伏した人々（捕虜）を奴隷  
にしていきました。これらの農地の多くは、一部の  
パトリキ（貴族）に貸し出されることになりました。  
また、この農地を奴隷に耕させる農場経営法  
が成立します。これをラティフンディウムと呼び  
ます。

ラティフンディウムによって作られた作物の値  
段は安価だったため、自作農や中規模農民、つま  
りプレブスの一部を経営的に圧迫することになり  
ます。そして、彼らの多くが最終的に土地を手放  
し、首都ローマに流れ込んでくるようになりまし  
た。当然のことながら、彼らは既に資産を失っている  
ため武器を自弁できず、ローマ軍が弱体化する原  
因になりました。

そこで前述したマリウスによる軍制改革が起こ  
り、ローマ軍は市民軍から職業軍へと変質します。  
つまり、没落農民の子弟を軍人として雇用し、常

時軍務に就かせるようにしたわけです。兵役期間  
は6年から原則25年へと延長され、武器は基本的  
に支給されるようになります。

また、マリウスはアウクシリア（助っ人）と呼  
ばれる補助兵による部隊を編成し、正規部隊を支  
援させました。アウクシリアはローマ国内に居  
住しながら市民権を持たない者で構成されるが、  
ローマの同盟国から供出されました。アウグス  
トゥスが前者の参加者で満期除隊した者にローマ  
市民権を与えたのは前述した通りです。

しかし、この軍制の変化は社会に大きな問題を  
もたらしました。それまでは6年で退役してくれ  
ていた兵士達が長期間軍隊に残ることによって、  
軍隊の社会的影響力が増してきたのです。元老院  
の議員達もこの事実はよく認識しており、軍団が  
イタリア半島内部に侵入しないように、ルピコン  
川（現在のルビコーネ川）を超えてはいけない（当  
時のルピコン川は、イタリアと属州ガリア・キサ  
ルピナの境界線になっていました）という法律を  
作るのですが、それでも武装勢力の持つ有形無形  
の影響力を排除することはできず、最終的には職  
業軍人によって支持された人物がローマの支配権  
を握ります。これが、いわゆる皇帝です。

「實は投げられた」の言葉と共にユリウス・カ  
エサル（紀元前一〇〇〜四四）が自分の軍団を率  
いてこのルピコン川を渡り、共和政ローマへの反  
逆者から一転して国家の権力と金を握る独裁官と  
なった前四九年の内戦は、この典型例でした。

ただし、カエサルは元老院による共和政の枠組

## 複雑な階級制度

みを尊重しました。彼の暗殺後、養子として初代ローマ皇帝となったアウグストゥスも「軍最高司令官」であるインペラートル（皇帝）は個人名でのみ名乗り、国家の統治者としてはプリンケプス（第一人者）と呼称していました。これは元老院の議員達との関係を配慮したためだったようです。この体制が維持されたその後の約300年間をプリンケプス（元首政）とも呼びます。そもそも「アウグストゥス」も尊厳者という意味で、軍事的な意味は持ちません。

しかし、当時のローマでは公共、あるいは社会制度に用いられる金銭と私有財産の境界線は曖昧で、共和政時代でも属州統治の執政官は自らも大きな利益を得ていました。アウグストゥスも政治的に上手く立ち回り、クレオパトラ（紀元前六九〜前三〇）を倒して手に入れた大農業地帯のエジプト（アエギュプトゥス）を皇帝私領とした事で、彼に富と権力が集中するような流れを作り出しました。

更にアウグストゥスは暗殺などの危険を避ける目的で、プラエトリアニ（親衛隊、あるいは近衛兵）を設立させ、イタリア半島内に軍を駐留させる政策を採ります。しかし、この政策は結果として失敗に終わります。

アウグストゥスの死後に後を継いだティベリウス（紀元前四二〜紀元三七）が、プラエトリアニの兵舎をローマ近郊に建設する許可を出したため、ローマのすぐ側に常備軍がいるという事態を招いてしまったのです。これは、皇帝が政敵を武

力で威圧し殺害するには好都合ですが、プラエトリアニが反旗を翻した場合皇帝自身が殺される危険性が高いというリスクを伴いました。そして、後に彼らは独自の利益追求を行い、政治を混乱させる原因の1つになりました。

### 「複雑な階級制度」

ローマ市民の定義が時代によって変化したように、ローマの階級制度も時代によって大きく変わりました。たとえば、前述したように最初は王政、次は共和政と移行した段階で、既に王という階級は廃止されているわけです。

帝政初期のローマでは、まず大枠として、ローマ市民、ペレグリーヌス（異邦人の意味。法的にはローマ帝国に居住する自由身分の外国人を指した。英語で巡礼者を意味するピルグリム, *pilgrim*）の語源となった）、そしてセルウス（奴隷）という3つの階級がありました。

しかし、これも前述したように、ローマ市民内にはパトリキ、ノビレス、プレブスなどの慣習的な階級があったわけです。

これを更にややこしくするのがリーベルトゥス（解放奴隷）という階級です。

リーベルトゥス（解放奴隷）とは奴隷身分から解放された人々の総称で、ローマ市民権がありました。奴隷から解放される方法は幾つかあり、

(A) 主人が死亡した際、遺言によって解放される。ただし、アウグストゥス帝は遺言によって解放で

きる奴隷の人数を上限100人とし、他にも様々な細かい制限を設けた。

(B) 公的文書によって解放されたことを公開する。

(C) ローマ市内の場合は、パシリカ・ウルピア（一二年頃に完成した公会堂。トラヤヌスのフォルム内にあり、司法や行政の事務処理が行われていた）に行き、監察官リストにローマ市民として登録する。その際に、「棍棒による解放」という儀式を行う。これは政務官の前で主人が奴隷を棒で叩くというものだった。こうした暴力的な方法が苦手な人は、奴隷の手を取って「私はこの男を解放する」と宣言するという儀式を執り行う場合もあった。

が代表的なものだったようです。

ただし、解放奴隷は元主人に対して毎年一定の日数だけ労働奉仕をする義務がありました。これをオペエラと呼びます。更に解放奴隷の多くは元主人の庇護下に入ることが習わしとなっていました。この関係をクリエンテラと呼び、庇護する側をパトロヌス、庇護される側をクリエンテスと呼びました。

厄介なのはここからです。このクリエンテラは市民同士でも行われていました。つまり、権力があるローマ市民が、権力の無いローマ市民を庇護するのです。元々、パトロヌスの語源はパテル、つまり父親でした。パテル（父）はファミリア（家族）を率い、彼らを庇護する義務がありました。

こうした立場にある男性をパテル・ファミリアス（家父長）と呼び、家父長を自明の存在とする社会を家父長制、あるいは父権制と呼びます。

古代ローマは典型的な家父長制社会であり、特に共和政の中期以降はゲンス（氏族）よりもファミリア（家族）の方が重視されていました。この家父長制度を家族以外の他人にまで延長した制度がクリエンテラであり、主人と解放奴隷の関係は、その最初の形式を最後まで残していたものと思われま

す。ローマ市民同士のクリエンテラは、元主人と解放奴隷のクリエンテラと異なり、クリエンテス（庇護される側）が複数のパトロヌス（庇護する側）を選択できました。これが新しい形式のクリエンテラだったわけ

です。たとえばAというローマ市民がいたとして、Bという大物貴族とCという大物貴族と同時にクリエンテラを結ぶことが認められていました。また、ローマ市民間の力関係は相対的なものだったので、Dという人物のパトロヌス（庇護する側）であるEという人物が、Fという人物のクリエンテス（庇護される側）であるという事態も往々にしてあり

ました。クリエンテラの間係を結ぶと、クリエンテス（庇護される側）には、

(A) 選挙の際にパトロヌス（庇護する側）が有利になるように票を投じる（あるいは政治活動する）。

(B) 毎朝、パトロヌス（庇護する側）の家に行って挨拶する。これをサルタテオ（表敬訪問）と呼ぶ。

(C) パトロヌス（庇護する側）が外出する際、一緒になって歩く。そうすることによって、パトロヌス（庇護する側）には取り巻きが多く、権威があり、かつ人気者であるように見せかける。

という慣習的な義務が生じました。

一方のパトロヌス（庇護する側）ですが、

(D) クリエンテス（庇護される側）が裁判に掛けられた場合、弁護をする（パトロヌスの多くは法律を始めとする高等教育を受けており、裁判の際に弁護ができるように訓練されていた）。

(E) クリエンテス（庇護される側）が困窮している場合は、サルタテオ（表敬訪問）の際に小銭や食べ物を与えた。これをスポルトウラと呼ぶ。

という、やはり慣習的な義務があったようです。

クリエンテラは親から子に引き継がれることが一般的だったようです。そして、有力なローマ市民の中には、クリエンテス（庇護される側）を増やしたいという理由で奴隷を解放する事例もありました。これは、パトロヌス（庇護する側）という立場がかなり高いステータスだったことを伺わ

### 【奴隷】

クリエンテス同様に、所有していると高いステータスがあると見做されたのがセルウス（奴隷）でした。法律で定められていた奴隷は、原則として戦争捕虜、あるいは奴隷の女性が産んだ子供のみとされていましたが、

(A) 父親から嫡子と認められず、出産直後に捨てられた子供。

(B) 生活が苦しくて、自らを売って奴隷となった者。

なども含まれていました。ただし、ギリシアと同様、ローマでも一般市民の債務奴隷化は違法とされてい

ました。奴隷を「販売」するのは奴隷商人で、中東系の人物が多かったようです。これは共和政後期から帝政時代のローマの総人口に占める中東系の割合が高かったことと関係があると思われま

す。共和政後期の前一六八年に行われた「ヒュドナの戦い」によって、アンティゴノス朝マケドニア王国を滅亡させたローマは、地中海沿岸部の諸国家を政治的に支配する力を持った存在になってい

を支える農業生産の中心はエジプト、哲学や自然科学などの文化の流入源はギリシアでしたし、後の遷都先であるコンスタンティノポリスは現在のトルコです。後に帝国の国教となるキリスト教はパルスティナ起源ですし、シリアも東方諸国からの交通・交易の要衝地でした。そして、共和政ローマが滅ぼした最大の敵国カルタゴは、北アフリカのチュニジアにありました。

一方、現在のドイツの大部分を占めるゲルマニアの征服には手を焼き、アウグストゥス時代の紀元九年には「トイトブルクの戦い」で3個軍団が全滅する大敗北まで喫しています。後にローマ帝国の後継国家を自称して、カエサルに由来する「ツァーリ」を皇帝が名乗ったロシア帝国も、その支配領域はローマ帝国とはほとんど重なっていませんでした。

奴隷商人は戦鬪行為で軍隊が獲得した捕虜を、あるいは奴隷が産んだ子供を彼らの所有者から買い取りました。

奴隷商人に買い取られた奴隷は、通常の手順であれば奴隷市場で販売されました。奴隷売買には「高等按察官告示」という規則があり、これに沿って行われる必要がありました。この規則により、奴隷商人は奴隷に関する様々な情報を公開する必要がありました。重要なのは出身地や疾患の有無だったようです。

こうした情報は木札に書かれ、奴隷の首からぶら下げられました。彼らはその状態で高い競り台の上に立たされ、売買の対象となったようです。

奴隷の値段は性別、年齢、能力などによって大きく変わりました。あくまでも推定ですが、15歳〜40歳の健康な成人男性の平均価格が10000セステルティウス（通貨の単位に関しては【通貨】の項目を参照して下さい）、女性の場合は8000セステルティウスあたりが相場だったようです。ただし、何らかの技術を持っている者であれば、値段が上がりました。

売り手と買い手の間で交渉が行われ値段が決まったなら、双方で契約書を交わして売買が確定しました。その際に、奴隷商人側には保証人を立てる必要がありました。奴隷売買には輸入税の他に値段に応じた税金が課されていたため、契約書の内容は比較的細かったようです。

こうして買われた奴隷ですが、大きく分けて農地で生活するか、都市部で生活するかという運命が待ち構えていました。農地で生活する場合は畑を耕す、羊を飼うなどの労働に従事することになったわけですが、その生活は悲惨の一言でした。奴隷が寝泊まりしていた場所はエルガストゥルム（終身刑の牢屋）と呼ばれ、多くの場所では主人の信任を得た解放奴隷（農場管理人）によって監視され、ほぼ全ての時間を労働に捧げなければなりませんでした。結婚できるかどうかは農場管理人の判断次第で、家畜との違いは「言葉を喋るか喋らないか」だけでした。

一方、都市部で生活することになった奴隷ですが、アクアリウスと呼ばれる水運びを専門にする奴隷、パン屋で働く奴隷など、いくつかの例外を除けば重労働に従事する必要はなかったようです。美容、料理、読み書き、踊りができるなどの専門技術を持った奴隷は優遇される傾向にありました。その点でも、自らの母語がそのまま長所になるギリシア人は他地域の出身者よりも優位に立っている状況がありました。

奴隷の用いられた方は、主人の立場によって大きく変わりました。貧しい主人であれば奴隷を働かせて賃金を掠め取るという、「搾取」という言葉がぴったりの行いをしている場合すらあります。その代表的な存在が娼婦だと思われま

す。裕福な主人であれば、職人や商人としての才能が見込める奴隷にベクーリウム（特有財産）を渡して商売を始めさせ、その利益を掠め取るということがありました。ただし、この奴隷が特に優秀な場合は解放され、自前の店を持つこともあったようです。

商売に関与しない奴隷の多くは、主人の護衛、毒味役、掃除、宴会の配膳など、日常生活の様々な作業に従事していました。このタイプの奴隷を最も多く抱えていたのが皇帝で、コップの種類によって渡す奴隷が違っていたという馬鹿馬鹿しい使役の方法すらありました。こんな事ができるのは、前述したように公私の区別が曖昧だったからで、少なくとも古代ローマにおいて、最大の金持ちが皇帝だったことは疑いようもありません。

しかし、皇帝は奴隷を別の目的でも使役していました。行政官です。そのほとんどが読み書きを出来る能力があり、役所での事務作業に使役され

ていました。この他にも、テルマエ（公衆浴場）のマッサージ係や、ウィギレス（警察消防隊）の構成員など、奴隷を使う場面はいくらでもありました。

古代ローマにおける市民の生活は奴隷なしでは成り立ちませんでした。しかし、奴隷の扱いは「喋る家畜」あるいは「喋る道具」程度に過ぎず、市民権はなく、発言に信憑性はないとされ、裁判の際には必ず拷問されました。拷問せずに取り調べても、嘘しかつかないと思われていたからです。

更に家内奴隷の場合、主人が何らかの事情で殺害された場合は、主人が助けを求めたのに被害を止めることができなかつたと言う理由で、拷問後に処刑されました。この法律が面白いのは、主人が毒殺された場合は例外としていた点で、これは毒殺では主人が助けを求めることは困難だろうと考えられていたからです。

けれども、対外戦争が一段落し、奴隷の一大供給源だった戦争捕虜が見込めなくなると、奴隷に対する法的な扱いは厳しいものから少しずつ緩和されていくことになりました。

まず、自分で稼いだ金を持つことができ、規則に沿っていれば婚姻も可能になりました。このため、自分が貯めた金を主人に支払って、解放奴隷になるというケースも出てきます。

それでも奴隷の数が減るのは止められず、価格は上昇し、制度そのものが衰退していきました。

やがてローマ帝国は東西分裂とゲルマン系などの各部族の侵入で変質し、四七六年に西ローマ帝

国が滅亡して、時代は奴隷制の上に皇帝が君臨する「古代」からキリスト教Ⅱ教会が絶対的な権威となつて農奴制が強化される「中世」へと移つていったのです。

## II 古代ローマの日常生活

### 【名前】

古代ローマの市民階級に属する男性は、共和政期から概ね3つから4つの名前を持っていました。最初から順番に、プラエノーメン（個人名）、ノーメン（氏族名）、コグノーメン（家族名）、そしてアグノーメン（添え名）です。

まずプラエノーメン（個人名）ですが、これは日本人名なら名前、英名ならファーストネームを意味しました。日本人の名前と決定的に異なるのはバリエーションでした。とにかく数が少ないせいで、個人名なのに識別が難しいという、おかしな状況だったのです。

2つめのノーメン（氏族名）ですが、共通の祖先を持つ血族集団を指します。

3つめのコグノーメン（家族名）ですが、本来はあだ名でした。プラエノーメン（個人名）もノーメン（氏族名）も同じ、つまり同姓同名だった場合に区別をする必要があったからです。プラエノーメンの数が少ない以上、同姓同名は頻繁に起こりました。従って、同姓同名がいなければ、

3つめの名前も必要が無いため、プラエノーメン（個人名）とノーメン（氏族名）だけの名前だった人もいたことが分かっています。

コグノーメン（家族名）は差別化を図る目的で、人格的、身体的特徴をつけられることが多く、バルプス（吃音）、カルウス（禿げ）、ルスクス（片目）、ブルートゥス（馬鹿）、デンタートゥス（出っ歯）など、現代では差別に該当する通称もありました。

しかも、時代を経るにつれて、コグノーメンは通称から氏族の低位集団、つまり家族名（ファミリーネーム）となつていきます。そのせいで、赤毛という家族名なのに黒髪だったり、沈黙という家族名なお喋りだったり、名前と本人の特徴が一致しない事態が起こりました。

そこで4つめのアグノーメン（添え名）が登場します。これは、出生直後の特徴、尊称など様々だったようですが、やはり時代を経ると世襲化されるケースもあつたようです。

これら4つの名前ですが、時代によって呼び方に変遷があります。ローマ共和政前期にはプラエノーメン（個人名）とコグノーメン（家族名）の組み合わせが一般的でした。たとえば、ガイウス・ユリウス・カエサルなら、ガイウス・カエサルと呼んでいたわけです。ところが、共和政後期になるとプラエノーメン（個人名）、ノーメン（氏族名）、コグノーメン（家族名）の全てを呼称するのが一般的になりました。たとえばルキウス・コルネリウス・スッラなら、このフルネームを呼んでいたわけです。

これが帝政期に入るとコグノーマン（家族名）だけで良いということになり、たとえばルキウス・アントニウス・セネカなら、最後のセネカだけを呼ぶようになりました。

続いてローマ市民の女性の場合ですが、男性のようにプラエノーマン（個人名）がありませんでした。女性は父親のノーマン（氏族名）の女性形を名乗るのが一般的でした。たとえばガイウス・ユリウス・カエサルの娘であれば、ノーマン（氏族名）にあたるユリウスの女性形、ユリアを名乗りました。

しかし、時代を経るに連れて、女性の名前に父親のコグノーマン（家族名）の女性形を用いることが一般化します。たとえば、マルクス・ウィプサニウス・アグリッパの娘なら、コグノーマン（家族名）であるアグリッパの女性形、アグリッピナを名乗りました。

そして、ノーマン（氏族名）の女性形にせよ、コグノーマン（家族名）の女性形にせよ、プラエノーマン（個人名）と同じように、同名が大量に出現するのは避けられません。たとえば、姉妹の場合は同名になるのが避けられないということです。そこで、名前の前に大や小をつけて区分する方法が採られたようです。

解放奴隷の場合は、元の主人のプラエノーマン（個人名）とノーマン（氏族名）の後に自分のコグノーマン（家族名）をつけていたようです。たとえば、マルクス・アントニウスの娘である、アントニアに仕えていた奴隷、パッラスが解放され

た後は、女主人であるアントニアの父親、マルクス・アントニウスの名前を拝借して、マルクス・アントニウス・パッラスと名乗っていたようです。

### 〔寿命〕

発掘された墓碑に刻まれた享年から、古代ローマ人の平均寿命は男性が約41歳、女性が約29歳だったと推定されています（総人口が不明なため、正確ではありません）。

現代人に比べると、平均寿命が異常に短いのは乳幼児の死亡率が高いからです。たとえば、60歳で死亡した人と、2歳で死亡した人の平均寿命は、 $(60+2) \div 2 = 31$ なので、31歳になると全ての人が死んでしまうような錯覚を与えますが、実際には60歳まで生きた人がいる、ということなのです。

また、年齢によって男女の死亡率に差があり、10歳以下の児童の場合は男児が多く、20歳から30歳以下の場合には女性が多かったことも分かっています。これは、男児が遊びの際に誤って死亡したケースが多かった可能性を、女性の場合には出産に伴う諸症状（産後の肥立ちなど）によって死亡したケースが多かった可能性を示唆しています。

女性の平均寿命が男性よりも短いのは、女性の識字率が低いことと相関関係があると思われるます。つまり、文章による知識習得の分野に衛生学、あるいはそれに類するものが含まれているため、識字率が低いと非衛生的な生活を送りがちになることが、平均寿命と関連していると考えられているのです。

たとえば、江戸期の信州諏訪地方に残る宗門改め人別帳に基づいて、2歳以下の乳幼児の死亡例を排除して男女の平均寿命を調査した結果では、一六七一年から一七二五年までは男性が36.8歳、女性が29.0歳だったのに、一七二六年から一七七五年までは、男性が42.7歳、女性が44.0歳と、女性の平均寿命が急激に伸びていることが分かっています。

これが、女性の識字率が向上した結果として、衛生的な生活が可能になったのではないかと推測されているわけです。ちなみに、乳幼児の死亡例を排除しているのは、前述した平均寿命の問題があるからです。

識字率で男女格差がそれほどない場合、女性の平均寿命が延びる理由としては、

- (A) 男性ホルモンなどの影響で、男性の方が女性に比べて攻撃的になりやすく、その結果として事件や事故に巻き込まれて死ぬケースが多い。
- (B) 識字率の男女差が解消されても、女性の社会進出が進まない場合、男性のみがストレスフルな環境に晒されるため、疾患や事故や自殺で死亡するケースが目立つ。

などが想定されているようです。

以上の理由から、古代ローマでは女性に対する高等教育が、それほど重視されていなかったのではないかと、という推測が成り立ちます。ただし、それは短命の原因の1つに過ぎず、後述する結婚

制度なども絡み合っていたのは間違いないでしょう。

### 【教育・その1】

ローマの教育制度は時代によって大きく変化するため、一概に説明することはできません。王政期には一家の長である父親が教育係を兼任していたようですが、詳しいことはよく分かっていません。

共和政になると家庭教師や学習塾に近い制度が確立してきたようで、紀元前3世紀にローマのコンスル（執政官）になった、スプリウス・カルウイリウス・マクシムスの解放奴隷、カルウイリウスが初めて定額の有償教育を行ったと考えられています（それまでは、教え子の親が任意で謝礼を支払っていたようです）。

また、紀元前一四六年にアンティゴノス朝マケドニアを滅ぼした第二次マケドニア戦争において、ローマ軍はギリシア都市国家によるアカイア同盟の中心、コリントスを占領して全住民を奴隷とし、他の同盟市からも多くの人々を連行しました。彼らの多くは高い教育水準を持っていた市民で、これがローマに多くの知識や教養をもたらしました。これ以後もギリシア人は奴隷あるいは解放奴隷としてローマに流入を続けました。

紀元前8世紀にホメーロスが作った『イーリアス』の登場人物、トロイアの武将アエネアアースのイタリア渡来がローマ建国の起源であるとうェルギリウスが『アエネイス（Aeneis）』で語っ

た事で、ローマ文化のギリシア化は決定的になりました。この長編詩は、アエネアアースの子孫を称するユリウス氏族の一員、初代皇帝アウグストゥス（紀元前六三〜紀元十四）への称賛を込めていたからです。キリスト教伝道の影響もあり、最終的には東ローマ帝国（ビザンツ帝国）でギリシア語の単独公用語化まで行き着きました。

帝政期のローマにおける市民階級の教育は、7歳の頃から始められたようです。通うのはルードゥス・リテラールム（初等学校）という個人経営の学習塾で、フォルム（公共広場）の近くにある柱廊や屋外で行われていました。

教育内容に性差は無かったようで、男子だけでなく女子も通学していたようです。また、裕福な家庭の子供には、護衛兼荷物持ちとして奴隷が同伴していました。

初等学校の授業内容は文字の読み書きと算数でした。古代ローマ初の成文法とされる、十二表法や古典文学を暗唱する場合もあったようです。

子供たちはめいめいが腰掛けを持参していました。机はなく、木製の板に彫られたローマ字を、木製のペンでなぞって書き方を覚える訓練、書板という蠟を引いた板（四隅が枠になっており、蠟が擦れて字が消えないような仕組みになっていました）に金属（主に青銅製）の棒で字を書く訓練などをしていました。また、文字を読む場合は朗読が基本で、黙読というスタイルは一般的ではありませんでした。

算数を習う時には、四玉珠算板（ローマそろば

ん）が用いられる場合があります。これは、青銅製、あるいは大理石の板に溝を彫り、そこにボタンのような玉をはめ込んで、そろばんとして使用するというものでした。ただし、この道具はローマ独自のものではなく、その原型は紀元前四〇〇年前から五〇〇〇年前のメソポタミアまでさかのぼれるようです。

現在の日本と異なり、ローマではアラビア数字を使用していません。ローマ数字を使用していました。子供たちは足し算、引き算だけでなく、かけ算や割り算まで教わっていました。

古代ローマでは教師による体罰が認められていたようです。ただし、初等教育を担う教師の社会的地位は非常に低く、ルードゥス・リテラールムの収入だけで生活することは困難でした。そこで、彼らは代書屋の仕事も兼業している場合が多かったようです。

初等教育の期間はおおよそ4年程度でした。女子がこれ以上の教育を受けることは希で、男子も裕福な階級で無ければ学校卒業後に働き始めるのが一般的でした。しかし、このような初等学校があったお陰で、ローマ市民の識字率は同時代の他地域に比べると、抜きん出て高かったのではないかと推測されています。

### 【教育・その2】

古代ローマの上流階級に属する男児は、初等教育を終えた後も勉強を続けました。まず、身分の低い人々と異なり労働する必要がなかったのと、

出世の条件として高い教育を身につけている必要があったからです。

現在の中等学校に類する教育は、グラマティクス (Grammaticus) と呼ばれる教師から、ギリシア語を習うというものでした。前述したように、古代ローマではギリシア風の教養を身につけることが望ましいとされていたため、現代日本にたとえるのであれば、英会話教室に通って英語で読み書きを習うようなものだったと思われまゝ。以上の理由から、グラマティクスにはギリシア人奴隷が好まれたようです。

また、ギリシア語を勉強するのと平行して、ギリシア・ローマの古典も学ばれました。この学習は一般教養も兼ねているため、グラマティクスは単に古典を教えるだけでなく、天文学、数学、地理なども教える技量が要求されたようです。

実は、この時期にどんな学習をしていたかを類推できる証拠があります。それは教科書として使われていた古典作品です。古典を勉強するために、グラマティクスは生徒に教科書を読ませる必要がありました。別項で詳しく説明しますが、古代ローマには活版印刷がなかったため、本は人間（主に奴隷）が写筆する必要がありました。そこで、教科書として利用された古典作品は、後世に数多くの写本が残りました。これが、現在の欧米や日本で、古代ギリシアや古代ローマの作品として親しまれているのです。

この時期にグラマティクスによって好んで取り上げられたと考えられている作家に、現在でも実

在が確定していない吟遊詩人のホメロス（紀元前8世紀頃?）、『年代記 (Anales)』の作者として著名な詩人、エンニウス（紀元前3世紀〜紀元前2世紀）の2名がいます。

時代が下ると、エンニウスから『アエネーアース (Aeneis)』で教科書の地位を奪ったウエルギリウス（紀元前70年〜紀元前19年）、ウエルギリウスと並び称された詩人ホラティウス（紀元前六五〜紀元前八）、そして政治家としても活躍し、書き残した文章が後のヨーロッパで頻りに参照されたマルクス・トゥッリウス・キケロ（紀元前一〇六〜紀元前四三）の3名が好んで取り上げられました。

繰り返しになりますが、今日までこの5名の作品が残ったのは、複数のグラマティクスが彼らの作品を教科書として採択したために、写本が数多く作られ後世に残りやすかったという事情があります。これを裏返すと、とても教科書として選ばれそうにない『変身物語』や『恋愛術 (Ars amatoria)』を書いた詩人、オウィディウス（紀元前四三〜十七）の名が残ったことの方が例外的なのに分かります。

話を元に戻しましょう。古典作品を中心に行われる教育の期間は3〜4年だったようです。7歳から初等教育を開始した場合は、15歳前後になっている勘定となります。

この段階で、更に教育を受ける場合はレートル（修辞学教師）に師事することになります。ここで教わったのは雄弁術の基礎だったようです。

古代ローマでは、自分の主張を通すために、弁論によって聴衆を納得させるのが美德とされていました。特に政治と裁判で、この能力が重視されました。そうになると、何が何でも弁舌で相手に勝たねばなりません。

このあたりは「言挙げ」という強力なタプーを抱えている日本人には理解できても共感が難しいところです。明治維新に伴う神仏分離、太平洋戦争敗戦によって、神道的な教義が語られる機会が減ってしまったため、当の日本人でさえ「言挙げ」という単語を知らない場合も多いのですが、これは「神の意志に背いて宣言すること」で、言挙げに誤りがあると、神の怒りで命を失うという禁忌です。

つまり、日本では不言実行が美德とされてきました。この「言挙げ」のタプーは現在でも脈々と息づいており、インターネット上で大言壮語して失敗した人間を、みんながよってたかって袋叩きにする、といったような形で顕現します。

しかし、このような禁忌のない古代ローマでは、文章はもちろんのこと、喋り方、身振り手振りや演出に至るまでを総動員して、自己の主張を相手に飲ませるレートルケー（修辞学）という学問が成立します。特に前述したキケロが『弁論家について』という著作を発表すると、これが一種の教科書として広く読まれるようになったようです（現在でも岩波文庫から出版されているため、日本語で読むことが可能です）。

また、このキケロから影響を受けたとされるマ

ルクス・ファビウス・クインティリアヌス(三五年〜一〇〇年?)が修辞学学校を開き、当時の皇帝ウエスパシアヌスから金銭的な援助を受け、『弁論家の教育』という大著を執筆したあたりが修辞学の最盛期だったと考えられています。しかし、帝政期が長く続き、言論の自由が制限されるようになる、修辞学は形骸化して廃れます。ところが、様式化してしまったことが幸いしたのか、クインティリアヌスの著作はローマ帝国滅亡後もヨーロッパで読み継がれていくことになりました(こちら京都大学学術出版会から出版されているため、日本語で読むことが可能です)。

レートルによる教育は、特定のテーマにおけるメリットとデメリットの分析を始めとして、(古代ローマ時代の)歴史的著名人の立場でものを考えたり、2人の生徒が相容れない2つの見解を交代しながら主張していく「説得と反駁」という授業などを行いました。2つめの授業は演説力を磨くこと、3つめの授業は裁判でのやりとりを念頭に置いた訓練だったようです。

初等教育と異なり、中等教育以上の授業は、生徒の自宅で行われるか、特別に設置された教室を利用していたようです。また、レートルによる授業は典型ですが、現在で言うところの理系科目はほとんど教えられていませんでした。そして、更にグラマティクスもレートルも、現在の教師のように一種の聖職として尊敬されていたわけではありませんでした。

## 【書籍】

【教育・その2】でも説明しましたが、古代ローマには活版印刷がなかったため、本は人間(主に奴隷)が写筆する必要がありました。こうした写筆を行っていたのが、書字工房でした。書字工房で制作された本は、書店で販売されていたのですが、この2つの業種は細分化されておらず、書字工房が書店を兼ねることが多かったようです。また、工房兼書店は主に教養のある解放奴隷が経営していました。【教育・その1】で説明したように、古代ローマ人は知力を尊敬すべき要素とは見做していませんでしたし、写字を担当する職人に関しても同様の扱いでした。

本は書き写される素材によって、大きく4つに分類可能でした。1つは書字板(蠟びき板)で、四角く枠を作った板に、蠟を垂らして平坦にした部分に、金属製の棒で文字を彫り込む、という方法で作られました。書字板は書き直しができる反面、大量の文字を書いたり保存するには不向きだったため、主に文字数が少なくて済む詩集に利用されたようです。

2つめはパピルス紙で、これはパピルス草(カミガヤツリ)の茎を加工して作る紙のようなものでした(正確には製法が異なるので紙とは見做せないので、本書では便宜上パピルス紙と呼称します)。本物の紙と比べると、折り曲げる力に弱かったため、複数のパピルス紙をアラビアゴム(ナイル地方原産のアラビアゴムノキという植物の樹皮を傷つけ、そこから染み出た分泌物を乾燥

させたもの)で貼り合わせて巻物にするのが一般的でした。この巻物は、ヴォリューム(Volumen)と呼称されました。現在でも、ある特定の作品の巻数をヴォリューム、あるいは短縮してV〇Lと数えるのは、この時の名残です。また、巻物はカプサと呼ばれる革製で円筒形の容器に入れられ保管されていたようです。

パピルスへの筆記は、やはりパピルスを加工した筆と、アラビアゴムに燐を混ぜたインクによって行われていたようです。

3つめは羊皮紙で、これは皮をなめして紙のように薄く平らに加工したものです。ただし、日本語の呼称はおかしく、まず皮は羊からとられるとは限らない上に、やはり紙ではありません。パピルスよりも使いやすい反面、製造単価が高かったため、小冊子などに用いられる傾向がありました。また、初期はパピルス同様に巻物にしていたのですが、ローマ帝国後期に入ると、羊皮紙を2つに折りたたんだり4つに折りたたんで、これに表紙をつけて販売するというスタイルの本が発売されるようになりました。

パピルス紙では、製造上の理由から裏面に書き記すことが難しかったため、このスタイルが流行し始めると、やがて表にも裏にも書ける羊皮紙が、パピルス紙を駆逐していくことになりました。

最後の1つは麻布で、これを蛇腹状に折って表紙をつけたものが販売されていたようです。

いずれにせよ、現在のような印刷技術が存在しなかったため、書籍の制作には長い時間がかかり

ました。

### 【衣類】

古代ローマで衣類の原材料になったのは、羊毛と麻でした。麻の産地は主にエジプトで、加工された製品がローマ帝国内で流通していたとされます。農本主義で商工業があまり発達しなかった古代ローマでは珍しい事例です。現代日本のように合成繊維はもちろんのこと、綿や絹も生産されていませんでした。帝政期になると、中国から絹が輸入されていたようですが、その量は少なく、一部の上流社会のステイタスシンボルとして、衣裳や室内装飾に利用されました。

古代ローマで用いられていた代表的な衣類には、以下のようなものがありました。

#### ■スプリガークルム

麻製の腰巻き、あるいは禪状の下着でした。女性用のものは、男性の腰布より短く、薄かったようです。シチリア島のピアツァ・アルメリーナ郊外にある古代ローマの別荘、ヴィツラ・ローマーナ・デル・カサーレからは、ストロピウムとスプリガークルムを着用したとおぼしき女性のモザイク画が発見されていますが、現代の水着であるビキニにそっくりに見えます。ただし、この別荘が建設された時期は四世紀以降です。本書で扱っている時代よりも200年も後なので、一〜二世紀のローマにモザイク画のような格好をした女性が実在したかどうかは定かではありません。

#### ■トゥニカ

チュニック (Tunic) の語源となった、膝丈ほどの長さのある貫頭衣で、腰のあたりにベルトを巻いて留められました。羊毛製の場合はベージュ色だったと考えられています。現在のTシャツに相当する衣類で、室内はもちろん、外出、寝間着としても用いられました。

また、トゥニカを着用すると、膝から下が露出するため、身なりを気にする男性はすね毛の脱毛をしていた事が分かっています。これは、ギリシア文化の影響だったようです（後述）。

#### ■トガ

古代ローマの正装で、長い布でした。元々は古代エトルリア人の正装だったものが、王政期のローマに輸入されて定着したようです。時代によって形状が変化しており、1〜2世紀には約6メートルほどの半円形でした。トガはトゥニカの上から着用するのですが、独りでこれを着こなすのは不可能で、着つけ奴隷の助けが必要だったと考えられています。また、余った布は左手に持つのが習わしでした。

トガは高い社会的地位の象徴で、ローマ市民以外の着用は許されませんでした。また、布の色や模様によって年齢や社会階級が分かるように、厳密な決まりがあったようです。

元々は身分の高い女性もトガを着用していたのですが、共和政後期から廃れ、次第に娼婦が姦通罪を犯した女性が着用する衣裳という認識に変

わっていったようです。

#### ■パリュム

ギリシアから伝わった外套(マント)の一種で、寒さをしのぐためにトゥニカの上から羽織りました。トガと異なり、男女共に着用していたようです。

#### ■フェミニナリア

古代ローマ軍の騎兵が着用したズボンです。ズボンは騎馬民族の間で発展した衣類だったため、古代ローマの市民は「野蛮な衣裳」として敬遠していたようです。

#### ■ブラーエカ

ズボンの一種です。元々はゲルマン人の衣裳で、彼らと交流したことがきっかけでローマ市民の間にも広まりました。しかし、フェミニナリアと同様に「野蛮な衣裳」と見做されたため、ローマ市内で着用する場合はトゥニカの裾よりも短く切っていたようです。

#### ■ストロピウム

幅広の布、あるいは革製の帯で、乳房に巻いて寄せて上げ、高く大きく見せる目的がありました。また、女性の乳房が小さな場合は、大きく見せるために詰め物をする人もあったようです。

■ストラ

女性用の貴頭衣ですが、トゥニカと異なり足首よりも丈が長く、波打つように襷(ひだ)が入っていました。また、ウエストを紐で締めるだけでなく、胸のすぐ下側も締める点も異なっています。これには乳房を強調する目的がありました。

ストラは共和政後期から着用が一般化した衣類で、奴隷や娼婦には着用が許されていませんでした。ストラの形状は古代ギリシアの衣類であるキトンによく似ており、これもギリシア文化の輸入ではないかと考えられています。また、男性用のトゥニカに比べると生地が薄く、色も豊富で、刺繍が施されている場合が多かったようです。

■ゾーナ

胸の下から下腹を覆う幅広の帯です。トゥニカを着用し、その上からオーバーワンピースの要領でストラを重ね着し、更にその上からゾーナを巻いて締めるのは、女性にとって寒い時期の装いだったようです。

■パッラ

パッラとも呼称されます。女性用のシヨールで、トガが軽量化されたようなものでした。上流階級の女性は、このパッラをドレープ(ゆったりとしたひだを入れること)ができるように羽織るのがお洒落だとされました。また、道を移動する際にパッラを頭から被り、顔を見せないようにすることもあったようです。

【靴】

寒冷な地域で生活する人々を除いて、古代ローマ人は素足に靴というスタイルを好んでいました。靴の種類は様々で、トゥニカほど統一感があったわけではないようです。

■カリガエ(Caligae)

ローマ軍で履かれていた革紐を編んだサンダルのような軍靴で、底が厚く小さな鉄製の釘が打ちつけられ、スパイクの役割を果たしていました。

■カルケウス(calceus)

ローマ市民だけが履くことを許されていた革製の靴でした。トガと同様に、地位によって細かな規定があったようです。

■カルバティナ(carbatina)

一枚の牛革で作られたサンダルです。ローマ市民以外でも履くことができました。

■ソレア(solea)

足の親指と人差し指で挟んで保持するシンプルなサンダルで、靴底は革製かコルク製でした。主に室内履きとして用いられていたようです。古代ローマでは、日本と同様に住居に上がる時には靴を脱ぐことが作法とされました。そこで、他所の家に向かう場合は、ソレアを持参して、屋内に上がる際に履き替えていたようです。

【化粧と装飾品・その一】

古代ローマにおける上流階級は、男女を問わず身だしなみに気を遣っていました。

男性のファッションは皇帝の政治的な立場によって流行が変化しました。つまり、兵士に支持されている皇帝であれば髭を伸ばし、そうでなければ髭を剃っていました。そして、上流階級の人々は皇帝のスタイルを模倣するのが無難だったため、その時の皇帝に合わせてヒゲを剃ったり伸ばしたりしていました。

理容専門の奴隷を抱えている富裕層でない限り、髭の毛を切ったりヒゲを剃ったりするには理髪店に行く必要がありました。しかし、古代ローマの理髪術は現代と比較すると非常に劣っており、ハサミで毛髪を切った跡が段々状に残り、髭を剃るためのシェービングクリームが存在しなかったため、施術中に剃刀(三日月状だった)が頬などを切り裂く事故が頻繁に起きました。そのせいで、理容師が客に怪我をさせた場合の法律があったほどです。

すね毛の脱色や脱毛に関しては両論があり、アウグストゥス帝は行っていたようですが、詩人のオウィディウスは『恋愛術』の中で「去勢者のようだから止める」という趣旨の記述をしています。オウィディウスは紀元8年にアウグストゥス帝によって首都ローマから追放されており、その原因が『恋愛術』であることはほぼ間違いないと言われているのですが、前述の一文がきっかけだった可能性があります。

一方、現代でも一部の男性にとって悩みの種となる禿げは、毛が抜けた頭皮に煤を塗る、人毛で作ったカツラを被るなどの対処法がありました。毛生え薬も売られていたようですが、効き目があったかどうかは甚だ怪しいといしか言いようがありません。

次に、上流階級の男性が身につけていた装飾品ですが、衣類を留める飾りピンと指輪の2種類が多かったようです。特に指輪には封蝋に捺すための印章が彫られており、執務を執り行うのに必要な道具としての側面もありました。

### 【化粧と装飾品・その2】

男性の化粧や装飾品に比較すると、女性のそれは遙かに多様で複雑でした。ファンデーション、口紅、眉墨、アイシャドウ、美容クリームと、現在の女性が使っている化粧品のほとんどが、この時代には既に揃っていました。違っていたのは成分で、ファンデーションには鉛白、口紅には辰砂（赤色の硫化水銀Ⅱ）などの毒性が強いものが使われる場合があります。また、アイシャドウには蟻を煮詰めて練ったものを使う場合もあったようです。

ところが、化粧品の数が増えて厚塗りになっていくと、今度は落とすのに苦労するようになりま。そこで古代ローマを代表する名医、ガレノスが2世紀頃に発明したと言われているのがケロートウムという化粧落とし（クレンジングオイル）で、これが後のコールドクリームになったという

説があります。

更に、美顔パックも開発されていました。古代ローマを代表する博物学者であるガイウス・プリニウス・セクンドゥス（？〜七九）が書いた『博物誌』には、仔牛の脚の骨を40日間煮込んだ汁を美顔パックとして使用する方法が紹介されています（現在のコラーゲンパックに相当）が、この他にも顔にできた腫瘍に雌牛の胎盤を使ったり、ニキビにバターを塗るなど、様々な処置があったことが記録から分かっています。

化粧品の次は髪型ですが、こちらも男性以上に豊富でした。

まず地毛ですが、火鉢で熱して使用するヘアアイロンがありました。カールもあったので巻き毛を作ることも可能でした。髪染めにも幾つもの種類がありました。青やオレンジは娼婦に義務づけられた染髪だったため、上流階級では行われませんでした。

また、裕福な家の女性であれば、カツラや付け毛を使いました。特に好まれたのは赤毛と金髪で、それらはゲルマン人の毛髪を刈り取って作られ、なおかつローマ市内に持ち込まれる際に高額税金が課せられたにも関わらず、むしろ一種のステータスとして惜しげもなく使われました。

ヘアスタイルの流行をリードしていたのは皇后とその取り巻きで、帝政初期には加速度的に派手になっていき、トラヤヌス帝時代に頂点を迎えます。彼の皇后であるポンペイア・プロティナが流行らせた『プロティナ風』ヘアスタイルは、頭部

の前方で毛髪が扇形に広がって上を向くというもので、地毛だけで再現することは不可能でした。このような方向に派手になっていくヘアスタイルが流行したのは、古代ローマの女性が低身長だった事に対するコンプレックスがあったからではないか、という説があります。

また、こうした複雑なヘアスタイルを女性個人で行うことは不可能でした。そのため、オルナートリスク（美容師）という専門の奴隷がいました。ヘアスタイルほど人目を引かない化粧法に、スプレーニウム（つけぼくろ）がありました。これも、顔の印象を変えるのに効果的な方法なので、現在でも用いられています。

次に装飾品ですが、ヘアアクセサリ、プレスレット、ネックレス、イヤリング、指輪などがあり、こちらも男性より種類が豊富だったことが分かっています。

最後にむだ毛の処理ですが、これは当時の女性のほうが現代以上に敏感だったことが判っています。陰毛すら脱毛していたのです。脱毛の方法は毛抜き（青銅製で現在の毛抜きとほぼ同じ形状のもの）が遺跡から出土しています。で抜くか、クルミの殻を熱し、それで皮膚を擦るといっ荒っぽいものだったようです。

### 【時計】

古代ローマで正確な時間を計ることは不可能でした。また、当時の人間も、このことに対する自覚がありました。

時間を計るのに広く用いられていた方法は日時計だったと考えられています。また、その方法は幾つかありました。

たとえば、ローマ帝国の初代皇帝であるアウグストゥスが作らせた日時計は柱型日時計で、陽光が柱に当たってできた影によって時間を判断するというものでした。ただし、その柱に当たる部分には、古代エジプトで作られた宗教的な記念碑であるオベリスク（エジプト名はテケン）が用いられました。エジプトからの略奪品だったので。ちなみに、このオベリスクは、現在でもモンテチトリーオ宮殿前に建っています。一七九二年に地中に埋もれていたオベリスクを掘り返し、この場所に立て直したそうです。

この他に一般的だったのがソラリウムで、これは小さな穴から射入させた陽光を、内側にある半球形にくり抜かれた部位に当て、時間を判断するというものでした。

もう一つはディプティク（diptych）と呼ばれる2枚の板を蝶番でつないだものを利用した日時計で、片方の板は垂直式日時計、もう片方の板は水平式日時計になっている、というものでした。小型のディプティクは携帯することが可能でした。

また、容器を利用した水時計も用いられていましたが、こちらは高価だったため、富の象徴と考えられていたようです。水時計が初めて使用されたのは紀元前一五九年頃で、容器に開けた穴から水を垂らして時刻の経過を計りました。水時計は

日時計と異なり、天候が良くない日でも時間を計れるというメリットがありました。この道具は裁判所でも利用されました。原告と被告の双方が、同じ時間だけ口頭弁論ができるように、比較的厳密に時間を計測する必要があったからです。

古代ローマでは1日を昼間12時間、夜12時間という単位に分けて数えていました。分や秒という概念が確認できるのは十三世紀以降なので、古代ローマにはこうした概念は無いが、あったとしても一般的ではありませんでした。

もちろん、この12分割法は正確ではなく、日照時間の長い夏期には1単位が75分、短い冬期には45分と大きなばらつきがありました。

ちなみに、ラテン語で正午をメリディス（Meridies）と言うため、それ以前をアンテ・メリディエム（Ante Meridies）（AM）、それ以降をポスト・メリディエム（Post Meridies）（PM）と呼称していました。つまり、現在の日本や欧米で、午前はAM、午後をPMと表記するのは古代ローマが起源です。

また、夜間は12時間を3時間毎に分け、ウィギリア（夜警時間）と呼んでいました。ただし、繰り返しになりますが、こちらでも昼間と同様に正確なものでした。

以上のことから、古代ローマ人の多くは（現代日本人と比較すると）遅刻に寛容だったと考えられています。

### 【照明】

古代ローマ人は日の出と共に起床して、日没後

には就寝する生活を送っていたため、コミッサティオ（無礼講）などに参加しない限り、夜更かしをする事は希でした。

夜間の照明に使われていたのは主にランプ、ロウソク、たいまつの種類で、特にランプは後にローマンランプと呼ばれる水差しのような形状をしたテラコッタ（素焼き）の大量生産品が頻繁に用いられました。ランプの燃料は主にオリブオイルでした。ランプの芯には石綿が利用されることが多かったようです。富裕層の場合、室内照明に利用するランプに青銅製で装飾性重視かつ大型のものを使用する場合があります。

一方のロウソクですが、古代エトルリア文明から輸入されたもののように、パピルスの芯に蜜蝋（ミツバチが巣を作る時に分泌する成分で、ミツバチの巣をお湯に溶かし、不純物を濾過してから冷やすとできる）を固めたものを使用していたようです。蜜蝋は写字板や封蝋（蜜蝋を垂らした上に指輪に彫られた印章を捺す）にも利用されていました。

また、寒冷でオリブが採取できず、ランプの燃料となるオリブオイルが確保できない地域では、牛脂をロウソク代わりに使用していたと言われています。

松明は燃えやすくなった木の棒の先端に火をつけるというもので、ランプやロウソクに比べると風に強かったので屋外で利用されたようです。

【通貨】

あらゆる高度に発達した文明と同様に、古代ローマにも通貨がありました。通貨が無ければ、食糧を始めとする様々な物品やサービスを入手するのに、縁故が暴力などの手段が多用されるからです。ただし、交換レートも含めて貨幣制度は時代によって大きく変化するため、その全てを扱うことはできません。ここでは一〜二世紀に絞って話を進めます。

首都ローマの造幣局は、カピトリヌスの丘（現在のカンピドリオ）の『ユーノ・モネータ神殿』の側にありました。このため造幣局は『アド・モネタム』（モネータ神殿そば）と呼ばれるようになり、更に時代が進むと短縮化されて『モネータ』になりました。これがやがて金銭そのものを呼称する単語になり、現在でもスペイン語のモネータ（moneda）や英語のマネー（money）として残っています。このモネータを中心に鑄造されていたのが以下の貨幣です。

■アウレウス

金貨です。基本的に高額取引以外で使用されることはありませんでした。

■デナリウス

銀貨です。ローマ帝国内で流通した主要な通貨の1つで、聖書にもデナリオンという名称で登場します。アラブ地域の通貨単位であるディナールの語源だったという説もあります。

■セステルティウス

黄銅貨です。ローマ帝国内で流通した主要な通貨の1つで、会計をする際の基本単位として用いられました。

■デュボンディウス

セステルティウスと同じ黄銅貨ですが、セステルティウスの半分の価値しかありませんでした。

■アス

銅貨です。

■セミス

アスと同じ銅貨です。アスの半分の価値しかありませんでした。

■クオドランス

青銅貨です。アスの4分の1の価値で、一世紀頃には最小単位の貨幣として認識されました。

これ以外にも少額貨幣、あるいは特定の地方でしか通用しない通貨がありますが、本書では割愛します。

各貨幣の交換レートですが、セステルティウスを基本単位とすると、

1アウレウス＝100セステルティウス＝25デナリウス

1デナリウス＝4セステルティウス

1セステルティウス

2デュボンディウス＝1セステルティウス

4アス＝1セステルティウス

8セミス＝1セステルティウス

16クオドランス＝1セステルティウス

となります。

推計によると、4人家族が最低水準の生活を送るには、年間で約500セステルティウスが必要だったようです。

また、古代ローマを代表する風刺詩人の1人であるユウエナリス（六〇〜一三〇）によると、ローマ市民として体面を保つためには年間2万セステルティウスの金銭と、2人の奴隷が必要だったそうです。更に、ユウエナリスはそこそこの暮らしをするには40万セステルティウスの財産が必要だとも書いています。これは、当時のローマにおける法定金利が5%だったからで、40万セステルティウスで金貸し業を行うと、年間の利益が2万セステルティウスになるという計算でしょう。

ちなみに、この時代における最高の金持ちが皇帝で、初代皇帝アウグストゥスの遺産総額は推定で140億セステルティウス、二代目皇帝ティベリウスの遺産は不動産を除いて300億セステルティウスだったと言われています。

【住宅・その1】

最盛期における古代ローマの人口は、ローマ帝

国全土で約五〇〇万人。首都ローマだけに絞ると約一二〇〜一五〇万人だったと考えられています。もちろん、当時は正確な国勢調査が行われていなかったため、これらはあくまで推計に過ぎません。

しかし、推計ではありませんが、首都ローマの居住区とおぼしき場所に平屋建てを建てても、全人口を収容しきれなかった可能性は非常に高かったと考えられています。

その証拠がインストラ（集合住宅）です。インストラはラテン語で島（insula）を意味する単語です。インストラは団地、あるいはマンションのようなもので、ケーナークルム（住戸）と呼ばれる複数の部屋で構成されていました。元々はシリアやシチリアの建築様式だったようで、ローマでは紀元前二世紀あたりから建設が始まったそうです。

インストラの1階は店舗として利用されることが多かったようです。店舗には中2階を備えているものもあり、こうした場所は店の経営者が寝泊まりするか、そこがポピーナ（軽食堂）の場合は売春を行う部屋として使用されていました。

2階以上は主に住宅として利用されていました。当時の技術では3階以上に生活水を供給することはできませんでした。また、エレベーターも無いので、階段を利用する以外の方法で部屋への出入りをするのは難しかったようです。

従って、インストラは階数が上がれば上がるほど家賃が安くなる、すなわち貧しい人々が住む場所とされていました。また、家主は少しでも多くの

収益を上げようとして、インストラの建設費を安価に抑え、にもかかわらず高層化を試みました。

その結果、インストラは4階までは煉瓦かコンクリートを使って作られているのに、5階からは木造という構造が一般的になりました。階数は6〜7階が平均で、その上に屋根裏部屋がありました。屋根は赤色の屋根瓦に覆われていました。屋根瓦は粘土を日干しにしたもので、形状は平瓦、その瓦と瓦のつなぎ目には、穴の空いた円筒を半分に切ったような、凹み瓦が被せられていたようです。

煉瓦の外壁には漆喰が塗られ、クリーム色をしていました。ただし、建物の裾から1.5メートルほどの高さまでは、ポンペイレッドという赤色で塗られ、手垢、泥、商売の最中に起きる汚れなどを誤魔化していました。

前述したように、建物の3階から上は水が供給されず、なおかつ階段が急で昇るのも大変だったため、室内が水拭きされることは減多にありませんでした。これに加えて、暖房や調理目的で火鉢が利用され、その燃料としてしばしば動物の糞を乾かしたものが使われていたこと、ランプの燃料として燃やしたオリブオイルの煤で、室内は真っ黒かそれに近い色に変色していたと推測されています。

部屋には風呂場はおろか台所もトイレもありませんでした。また、当時の古代ローマでは窓ガラスは超高級品でした。従って、貧しい人は窓を板戸で塞ぐか光を通す程度の薄い布か革で覆うしかありませんでした。当然のことながら採光は優れ

ておらず、昼間でも薄暗かったようです。

ところが、上階が恐ろしい理由は、不潔さだけではありませんでした。安普請のため容易に倒壊したことから、火事があると逃げ場が無いので焼死か墜落死する可能性が高かったのです。こうした事故が頻発したために、皇帝アウグストゥスはインストラの高さを70ローマンフィート（約21メートル）に制限し、ウイギレス（警察消防隊）を結成して防火に当たらせました。しかし、それでも六二年にローマ大火が起こってしまったため、皇帝ネロはインストラの高さを60ローマンフィート（約18メートル）に制限したのですが、違法建築は無くならなかったようです。

一方、インストラの2階は富裕層が住んでいました。場合によっては水道が引けたので、トイレや調理場付きの部屋もあったようです。少しでも採光を良くする目的で、部屋は窓沿いに並んでおり、その窓には高価なガラスがはめ込まれていました。また、窓の外にはマエニアムと呼ばれる幅の狭いバルコニーが設置されている場合がありました。ここには植木を飾るなど、狭い空間でもガーデニングが行われていた事が記録から分かっています。

更に、室内も重要な部屋の床には白黒でモザイクが施される場合がありました。色が無いのは、経費削減が目的だったようです。

ローマにあったインストラの数ですが、発見されたセプティミウス・セウエルス帝期（一九三〜二一〇）の土地台帳によると、四六六〇二棟あり

ました。それでも、ローマの全人口が収容可能なわけではなく、しかも又貸しによる高い家賃が原因で、半年ごとの契約更新の時期が来ると、ローマ市内に家を追い出された人達がホームレス化する姿が見られたと言われています。

### 【住宅・その1】

【住宅・その1】で説明したように、ローマの庶民の多くはインストラに住んでいたわけですが、貴族やそれに類する超富裕層はドムス (domus) という一軒家に住んでいました。ドムスはラテン語で家屋を意味する単語で、後に英語に伝わった際に domus (家庭の) という単語になりました。ドムスの最大の特徴は、屏と住居の壁が同じという構造でした。この特徴のため、ドムスの外周には窓がほとんどなく(あっても侵入が難しい高所に設置されたようです)、更にバルコニーもありませんでした。これは、古代ローマよりも更に古いエトルリア人が住んでいた農家の様式を踏襲したもので、住居の壁が防壁を兼用する仕組みになっていました。

ドムスの門は、この壁の一部に設けられており、警備の奴隷によって守られていました。当時のローマの治安は劣悪で、貴族階級でも夜間の外出は危険だと言われていました。また【住宅・その1】で説明したように、町にはホームレスが溢れていたため、物乞いを侵入させないためにもドムスの形状は便利でした。

ドムスの2番目の特徴は、中央部にコンブル

ウィウムという天窓が設けられていたことです。この天窓の下にはアトリウムという広間があり、ここには雨水を溜める貯水槽がありました。ドムスではこの貯水槽の水を生活用水として利用していたわけですが、農家だった時代はこの場所で火が焚かれ、天窓から煙を逃していたのではないかと考えられています。また、アトリウムを備える形式のドムスを、アトリウム型ドムスと呼称する場合があります。

アトリウムの両側には、クビクルムと呼ばれる寝室がありました。前述したように、ドムスは外周に窓を持たないため、クビクルムは常に薄暗い場所でした。現代日本人の感覚では、物置や押し入れに近い場所で、光源は口ウソクヤランプだけだったと推測されています。

また、アトリウムの一角には2階へ続く階段がありました。2階は主に婦人と女性の寝室として利用されていたようです。これもドムスが皆と家を兼ねた場所だった名残でしょう。

アトリウムを挟んで入り口の反対側にあったのがタブリウムというリビング兼執務室で、家の主人がここで客と会ったり事務作業をしていたようです。また、紀元前1世紀半ばから2世紀にかけて、タブリウムの後ろにペリステリウムという中央に貯水槽を設けた中庭が造られている家屋もあり、ペリステリウム型ドムスと呼称する場合があります。

更に、ケーナ(夕食)を寝そべって食べる習慣が定着すると、ペリステリウムの脇にトリクリ

ヌム(食堂)と呼ばれる宴会場が設置されました。また、これらの主人や来客が利用する部屋は、衝立やカーテンによって視界を遮られ、一定のプライベートが確保されていたようです。

ドムス内部に風呂がある事は希でした。トイレも無いのが普通で、排尿、排泄はテラコッタの尿瓶やおまるにしていました。暖房は暖炉が無い場所では火鉢を利用していましたが、ハイポコーストと呼ばれる床暖房が設置されたドムスもあつたようです。これは、床下に造った空間に熱した空気を流して暖めるというもので、建造費もさることながら、熱した空気を造る目的で火を焚く奴隷の存在が欠かせませんでした。

ドムスの建築に使用された材料ですが、初期は木材で、一世紀半ば頃になるとコンクリートに漆喰仕上げが変わっていきます。すると、壁にフレスコ画、床にはモザイクで装飾が施されるようになります。繰り返しになりますが、ドムスは外周に窓を持たない構造なので、薄暗い室内でもちゃんと「見える」ようにしなければならぬという必要性から、これらの装飾は派手にならざるを得なかったようです。更に時代が進んで二世紀から三世紀にかけては、壁や床を大理石で仕上げるのが流行りました。

ちなみに【住宅・その1】で紹介した土地台帳によると、ローマ市内にあったドムスの数は一七九〇戸でした。単純比較でインストラの26分の1はあつたことになり、決して少ないとは言えないのですが、それでも金銭的な余裕のある者でな

ければ住めなかつたのは間違いないでしょう。

### 【家具・調度品】

古代ローマの代表的な家具はテーブルでした。使用数が多かったと推測されているのが三脚の丸テーブルですが、他にも様々な形状のもの、例えば折りたたみ式のものまであったようです。素材は木か青銅が多く、大理石が用いられることもありました。

テーブルと対になる椅子ですが、テーブルと同様に木製や青銅製が多かったようです。従って臀部を乗せる面は硬く座り心地が悪かったため、クッションを多用していたことも分かっています。

衣類はアルカ・ウエステイアリアという木製の長持ちに収納されました。上部が蓋になっており、下部には獣脚がついています。食器や筆記具などの壊れやすい高級品はタンスに収納されましたが、この家具は古代ローマで初めて広まったと考えられています。

この他に、富裕層のみが持っていたと思われるのが貴重品箱です。鍵付きの強固な長持ちで、重要書類や貴金属製の貴重品が入れられています。古代ローマの富裕層は、この箱を客人の目につきやすい場所に置き、自己の権勢を誇ったようです。

貴重品箱と同様にステイタスシンボルの役割を果たしたのが銀製の食器でした。こちらは陳列用のテーブルに飾られたようです。銀製の食器が買

えない場合は、青銅製やガラス製の食器が並べられました。

趣味かステイタスシンボルの境界線が曖昧なのが古美術品で、ローマに隣接していた古代エトルリア（紀元前八世紀～一世紀？）の小さな像や鏡などが好まれたようです。本書で著述している時代が、一～二世紀であることを考えると、最低でも二〇〇年ほど前の品々ということになります。

### 【寝具】

古代ローマにおける寝具は身分によって異なりました。奴隷や貧民は雑魚寝が基本で寝具があっても藁敷きの布団ぐらいです。家内奴隷の場合は廊下、家事労働をしている奴隷であれば台所、場合によっては奴隷用の部屋で眠ったようです。主人が信用している奴隷の中には、不寝番として主人の寝室の前の床で眠るケースもあったようです。

一方、彼らを使役している身分が高い階層の人々は主にベッドで眠りました。ベッドは古代エジプト時代には存在が確認されている寝具で、古代ローマ時代の段階で既に三〇〇年以上の歴史がありました。

現在のベッドと比較すると脚が長く、踏み台が無ければ乗ることが難しかった点と、マットレスを置く場所が板ではなく革紐を網状に編んだものだった点が大きく異なります。全体的な形状は背もたれのあるソファに似ている事が多かったよう

ですが、これはベッドとソファを兼用していた名残です。

頭部側にベッドボードがあるのは今と同じですが、これは枕が落ちないように設けられたものでした。枕の詰め物には羽毛が用いられることが多かったようです。一方のベッドマットに用いられた詰め物としては、麦藁と羊毛が確認されています。いずれにせよ、古代ローマのベッドには、今のベッドマットのようなスプリングはなく、寝心地の点で見劣りしていたのは間違いないと思われます。

### 【火】

古代ローマ社会には、電気やガス燃料を各家庭に配給するインフラがなかったので、料理や暖房用の火は自分達で起こさざるを得ませんでした。

その代表的な方法として、火打ち金と火打ち石を打ちつけて火花を出す「火花式」が挙げられます。古代ローマでは、鉄製でアルファベットのCに似た形状の火打ち金を片手で握り、チャート（石英）二酸化ケイ素が主成分の岩石）のかげらに打ちつけて、火花を起こすのが一般的だったようです。

ただし、火花を出しただけでは火になりません。これを燃えやすい火口（ほくち）につけて火種を作る必要があります。古代ローマでよく用いられた火口は、ツリガネタケと呼ばれる釣り鐘の形状をしたキノコの一様だったようです。

ツリガネタケはサルノコシカケの仲間で、プナ

ヤカバの枯木に生えます。ただし、このキノコがそのまま火口になったわけではなく、子実体（つまり、いわゆるキノコの形状をした物）を煮てから叩いてほぐし、乾燥させたものが使われていたようです。

火花が火口について火種になったら、軽く息を吹きかけ燃焼を促進させます。そこに麦藁を近づけ火を移し、そこから更に木炭などに火を移すことによって、初めて料理や暖房などに火を用いることが可能になりました。

インストラ（集合住宅）に住んでいる場合、ケーナークルム（住戸）に竈や暖炉を設置することはほぼ不可能でした。人々が使用していたのは移動式の火鉢で、暖房と調理の兼用でした。貧しい家庭では、薪の代わりに乾燥させた動物の糞を燃料として利用していました（現在でも牛糞やらくだの糞を乾燥させて燃料として使用している地域はあります）。

こうした火鉢が火元になる事はしばしばあったようです。消火設備が貧弱で、避難通路の確保さえままならないインストラの上階に住んでいる住民にとって、火災は死とほぼ同義でした。

特に六二年に起こった大火事、いわゆるローマ大火の後には、各戸に消火用の水を準備しなければならぬという法律が定められました。

## 〔水〕

どの都市でもそうですが、飲料に適した水の確

保は重要でした。古代ローマの場合、建国初期は井戸や雨水を貯水する方法で水を確保していたようなのですが、人口の増加によってこれでまかないきれなくなると、水源から水道を引いて飲料水や家庭生活用水に当てました（上水道）。水道は紀元前三一二年に着工されたアッピア水道を端緒に、二二六年に建設されたアレクサンドリア水道を最後として、約500年間の間に合計11本の水道が建設されました。これらの水道の1日に供給できる水の量は、約一三万立方メートルだったと推計されています。

水源から運ばれた水は調整池に集められ、場合によっては浄水槽を通してローマ市内の共同水槽に流れ込んでいました。共同水槽は約70メートルおきに設置されており、トラバーチン（大理石の一種。ローマ近郊のティブル、現在のティボリから産出されたために、「ティブルの石」が訛ってトラバーチンとなった）製の石版で四方を囲まれた水槽に、メルクリウスという神の顔を模した石像の口から水が流れ込むという仕組みでした。

インストラの住人は、共同水槽まで行って水を自室まで運ぶ必要がありました。インストラの中には、アクアリウスと呼ばれる水運びを専門にする奴隷がいる場合もありましたが、彼らを使役できるのは富裕層のみだったようです。余談になりますが、このアクアリウスは奴隷階級の中でも最下層に位置する存在でした。

水道料金は原則として無料でした。しかし、共同水槽を満たして余った水が、フッコニカと呼ば

れる洗濯屋兼染物屋や、個人経営の共同浴場に流れていた場合は、これらの経営者から料金が徴収されたようです。

また、技術が発達してくると、水道が鉛管を通して地下から配水されるようになった区域もあります。こうした場所では、水道管を分岐させるための貯水槽も作られました。個人宅に水道を供給する権利は皇帝にあり、自宅で水道が使用できるのは、権力者と懇意である証拠でした。このサーピスは有料で、水の使用料に限らず蛇口の太さで料金が徴収されました。

ドムスという高級住宅に住んでいる場合は、水道に頼らない古来からの水の確保手段を用いることが可能な場合がありました。それは、住宅の中央部にあるアトリウムという天井が吹き抜けの広間に設置された貯水槽に雨水を溜めるといったものです。

ドムスの屋根はアトリウムに向かって傾斜する構造になっており、雨が降ると雨水がアトリウムに流れ込み、インブルウィウム（雨水溜め）に溜まる仕組みになっていました。ただし、敷地面積が狭いドムスでは、こうした構造を採用することができなかつたようです。また、時代が下るとドムスにはペリステリウムと呼ばれる、より広い中庭が加わり、ここにも水盆や噴水が設置されていたようです。

## 〔下水〕

ローマの低地は元々湿地帯で、人が住むのに適

した場所ではありませんでした。初期の定住者は、丘の上で生活していた事が分かっています。たとえば、パラティヌスの丘は代表的な居住区で、戦闘時の防衛にも適していたようです。

しかし、人口が増えてくるにつれて、湿地帯の水をすぐ側のティベリス川（現在のテヴェレ川）に流し、乾燥した土地を確保する目的で下水道の建設計画が持ち上がります。これが後にクロアカ・マキシマ（Cloaca Maxima、一番大きな下水の意味）と呼ばれる下水道で、紀元前六〇〇年頃に建設が始まったのではないかと推測されています。

クロアカ・マキシマは当初開渠（かいきよ・蓋をしていない水路）として建設されたようですが、やがて暗渠（あんきよ・蓋をしている水路）に変更されました。これらの下水を建設する技術は、古代ローマに隣接したエトルリアからもたらされたのではないかと推測されています。

下水道は全長約一キロ、幅は最大で五メートルあり、驚くべき事に現代でも一部が使用されています。古代ローマ時代のクロアカ・マキシマに流されていたのは、主に公衆便所や公衆浴場、噴水、上水道の余った水などの公共機関に関わる排水で、これに雨水が加わる場合があります。整備されていたローマの道は、ロバの背型と呼ばれる中央が盛り上がった形状になっており、雨が降ると道の両側に雨水が流れ落ちる仕組みになっていました（ついでに路上のゴミも流してくれます）。そこから水は排水溝へと導かれ、下水へと流れ込みました。

この下水に繋がる排水溝は、神を象ったものが多く、その中でもトリトン（ギリシア神話の海神ポセイドンの息子。半人半魚の容姿をしているとされる）の顔を模したものは、現在でも「真実の口」という名称で、ローマのサンタ・マリア・イン・コスメディン教会に飾られています。一九五三年に公開された映画『ローマの休日』で有名になった「真実の口」ですが、その正体はマンホールの蓋なのです。

ちなみに、クロアカ・マキシマ自体にもエトルリアから伝わったとされるクロアキナという女神が祀られていました。いわゆる便所神、あるいは下水の神の類いで、同様の便所神を祀る習慣があったのは、日本くらいではないかと言われています（日本では烏桕沙摩明王が有名な便所神でしょう）。

クロアカ・マキシマの問題点は河川の氾濫に弱いことでした。ティベリス川の水位が上がると排水が不可能になり、場合によっては水が逆流して公衆便所の便座などから溢れだしたようです。また、前述したように、この下水道は主に公共施設の排水を受け持っており、個人宅の汚水は必ずしもきちんと流されていたわけではなかったようです。

### トイレ・トイレ

古代ローマでは、住居にトイレがあることは希でした。室内で用を足す場合はテラコッタ（素焼き）の尿瓶やおまるにしていたようです。インス

ラ（集合住宅）の場合、尿は1階にある瓶に集められました。集められた尿は、定期的に奴隷によって回収され、フッコニカと呼ばれる洗濯屋兼染物屋に運ばれました。当時のローマでは、尿が洗剤の原料の1つとして利用されていたのです。

また、ローマ市内の道路の角や道沿いには、大きなアンフォラと呼ばれる2つの持ち手がある首の長い陶器の横に、穴が空いたものが設置されており、ここで小用を足すことが可能でした。このアンフォラに溜まった尿も、やはり奴隷によって回収され、フッコニカに運ばれました。

大便を排泄をする際には、公衆便所に行くのが一般的だったようです。公衆便所は「公衆便所請負人」と呼ばれる徴税請負人の一種が経営しており、有料でしたが料金は格安でした。便所の地下には下水道が通っており、そこから河川に排泄物を流す仕組みになっていました。

便所内は仕切りが無く、壁面を背にしたベンチのような場所に一定の間隔で鍵穴状の穴が空いており、これが便座の役割を果たしていました。また、便座兼ベンチの前には溝が彫られており、そこには水が流れていました。

この水流は、排便後の尻拭きに用いられました。といっても、手ですくっていたわけではありません。便所には大きな水槽が設置されており、そこには棒が入っていました。この棒の先端には海绵（実物を見たことが無い人は、お化粧に使われるスポンジを想像してください）が刺してあり、これで肛門周辺を拭きました。そして、股間を2度

拭きしようと思ったら、前述した溝に海綿を浸していたのです。そうしなければ、水槽の水が付着した排泄物で汚れてしまうからです。股間を拭き終えると、海綿は排泄物同様に便座から排水溝に捨てられたようです。

前述したように、公衆便所には仕切りが無かったため、隣に座った人と話をするなど、社交場としての役割を果たしていました。冬期にはハイポコーストと呼ばれる床暖房が用いられる場所もあり、居心地は良かったようです。

現存する記録によると、ローマ市内における公衆便所の数は、紀元三二五年の時点で144カ所、紀元前三三年には1000カ所以上だったそうです。しかし、類推人口が100万人を超える大都市では、この数でもとても足りなかったため、公衆便所が使用できないほど貧しい人達は、単純な竪穴式の肥だめに排便をしていたようです。これらの肥だめも定期的に清掃されていたようですが、その詳しい方法は分かっていません。

### 【トイレ・その2】

【トイレ・その1】でも説明したように、トイレのある住居は希でした。特にインストラ（集合住宅）の3階以上のケーナークルム（住戸）には、そもそも生活水そのものが供給されていませんでした。現代日本のように、水道管の水圧を上げて3階以上の家屋に配水したり（直結給水方）、屋上にある貯水槽に水を溜めてから、重力の力を利用して各戸に配水する（貯水槽方式）のも、当時

のローマにおける科学技術の水準では不可能だったからです。

これも【トイレ・その1】で説明したように、インストラの上階に住んでいる住人は、その場で用を足したい場合はおまるに排泄し、その後1階にある排尿用の瓶まで運ぶ決まりになっていたのですが、階下まで行くのが面倒臭いという理由で、窓から投げ捨ててしまうことも少なくなかったようです。というのも、帝政ローマには、糞尿を窓から投げ捨てることを禁止する特別法があったことが確認されているからです。しかし、それでも糞尿の投げ捨てが止まらなかったようで、やがて住宅前の汚物を家主が清掃することを義務づける法律も作られました。

2階以下の住居には生活水が供給されている場合もあったのですが、調理などに使用した水を下水として再利用したのと、現代日本のように水道管を住居に巡らすことができなかったため、しばしばキッチンとトイレが同じ場所にありました。

### 【食事・その1】

古代ローマにおける食事も、時代と共に大きく変化したものの一つです。またローマ周辺しか領地が無かった頃のローマ人は、主に大麦を粉にしたり粥にしたりして食べていたと考えられています。

紀元前八世紀頃になると、イタリア半島の南西部に位置する地中海最大の島、シチリア島にギリシア人による植民が開始されます。このシチリア

植民者からイタリア半島にもたらされたと言われているのがパンの製法でした。

初期のパンはエンメル麦という2粒形小麦の一種が原料として用いられていたようです。しかし、帝政期になると普通小麦、あるいはパン小麦が主要な作物に変わります。小麦は製粉技術と密接な関係のある作物でした。これは、小麦にグルテンというタンパク質が豊富に含まれており、粉にして水を加えると様々な形に加工できたため、大麦などの農耕初期に重要だったと思われる作物を押しつけて主食となりました。

古代ローマの政治家の一部には、小麦を確保することが重要事だという認識があったようです。これは、それまでローマ軍の基幹として様々な戦闘に従事してきたローマ市民（主に中小規模農家）が、戦争の国外化と長期化によって数年間も離農したことから、戦勝によって得られた外国人奴隷の大量確保に伴う大土地経営に押しつぶされたことで、困窮していたという事情がありました。

たとえば紀元前一三三年に、護民官の地位を得たガイウス・グラックス（紀元前一五四〜紀元前一二二）は、ローマ市内に住んでいるローマ市民に、小麦を格安で販売する法律を成立させました。しかし、グラックスは敵対した元老院から二二一年にセナトゥス・コンスルトウム・ウルティムム（元老院最終通告）を出され、支持者と共に殺害されてしまいました。

次にプブリウス・クロディウス・プルケル（紀元前九二〜紀元前五二）が紀元前五八年に護民官

として当選すると、ローマ市内に住んでいるローマ市民に小麦を無料で配給する法律が成立します。ところが、このクロデイウスも対立する護民官のティトゥス・アンニウス・ミロとの抗争で殺害されてしまいます。

しかも、共和政末期のローマ軍は志願制で給与が与えられるプロフェツィオナル集団に変貌しており、既に自作農を中心とした市民軍ではなくなっていました。そこで、ローマ市民でありながら貧しい人々を救済するために、無料で小麦が与えられるようにと、制度の意義が変わっていきま

した。といつても、無料配給制度が完全に機能していたわけではありません。配給を受けられるのは、ローマ市在住のローマ市民かつ男性のみでした。受給資格がある人物は、15万から31万人の間だったようです。配給は月に1度で、推計によると一家4人に必要な5分の2の量しかありませんでした。従って、ローマ市民であれば一切働かず暮らせるというわけではなかったようです。

このことを証明するのは発掘された遺体で、歯や骨の痕跡から繰り返し飢餓があったことが確認されています。ただし、飢餓はほとんどの都市部で起きていたことで、現代でもいわゆる先進国を除けばしばしば見られます。食糧事情に限って言えば、農村部の方が良いというのは今も昔も大きく変わっていません。

さて、受給された小麦は、そのまま食べるわけにはいきませんでした。石臼で挽いて小麦粉を作

り、パンにする必要がありました。そこで、パン屋という職業が重視されました。食糧配給で受け取った小麦を、滞りなくパンにする目的で、パン屋は世襲制が義務づけられました。にもかかわらず、廃業する店舗が出てくると、ローマ政府はパン職人の学校を作ってその数を維持しようとした。パン職人はきつい労働だったため、なり手の多くは解放奴隷だったと言われています。

### 【食事・その2】

古代ローマ人の食事の摂り方も、やはり時代によって変遷しているようです。

初期はイエンタークム(朝食)、ケーナ(昼食)、ヴェスペルナ(夕食)という順番だったようなのですが、やがてケーナの比重が大きくなるに連れて、食べる時間が昼から夕方にならなくなり、それに引きずられるようにヴェスペルナ(夕食)が簡素化、または無くなりま

す。代わりにブランディウム(軽めの昼食)という習慣が定着するのですが、そもそもケーナが昼食なので、朝食、あるいは昼食が2回あるというおかしなサイクルになってしまいます。従って、本書ではイエンタークム(朝食)、ブランディウム(軽めの昼食)、ケーナ(夕食)として話を進めていきます。

まず、イエンタークム(朝食)ですが、古代ローマの食事の中で最も量が多く、重要視されていました。主食として食べられていたのは、フォカッチャという平たく発酵したパンでした。この

パンをミルクやワインに浸していたようです。

金銭的な余裕のある家庭では、甘味料として深皿に入れた蜂蜜が出され、副食として卵、チーズ、メルカ(羊などの乳で作ったヨーグルトの一種)、果物、木の实なども食べられました。

更に、前夜の残り物として肉や魚がある場合は、これらも食べていたようです。現代人は失念しがちですが、古代ローマに冷蔵庫はなく、保存食以外の食糧を長期保存することは困難でした。このため、腐った肉の臭いを誤魔化す目的で、香辛料が多用されました。

また、上流階級では、朝食後に歯の手入れを行っていました。これは、仕事の大半を午前中に済ませるといふ習慣のせいで、人と会って話をする際に歯が汚れていたり口臭がするのを防ぐ目的がありました。

歯の掃除は主に銀製の爪楊枝によって行われました。歯磨き粉として重曹、あるいは尿を使用することもあったようです。口臭予防として利用されていた代表的な植物はパセリでした。口臭を誤魔化すための香料入りドロップも販売されていたようです。

次のブランディウム(軽めの昼食)ですが、食べていた人といなかった人がいたようです。現在の日本でも、1日2食で済ませる人がいるのと一緒でしょう。

ブランディウムは主に飲食店で食べられたようです。代表的な店舗形態として、タヴェルナ(ワインバー)とポピーナ(軽食堂)がありました。

タヴェルナは一種の立ち飲み屋で、ワインを飲みながらフォカッチャなどをつまむ場所でした。現代日本とかなり違うのはワインの飲み方で、泥酔をしないように水やお湯で薄めるなどの方法が採られました。特別な飲み方では、蜂蜜や松ヤニが混入されたようです。帝政期よりも更に古い時代には、薦を加工した杯にワインを入れ、アルコール成分を杯に吸わせていたという説もあります。一方のポピーナですが、こちらは座って飲食が可能でした。タヴェルナと比較すると食べ物のメニューも豊富で、ブルス（麦がゆの一種）、ゆで卵、オリーブ、煮豆、煮た肉、羊や山羊のチーズ、塩漬にしたイワシなどがあったようです。ポピーナにはもう一つ、現代では考えにくいサービスがありました。売春です。店のウエイトレスは客との交渉が成立すると、店の奥にある中2階で性行為に応じました。その代金も格安で、料理の支払いと一緒に Rowe 行われていたようです。さて、食事の説明をするのが厄介なのはここからです。まず、ポピーナは夕方まで店を開けていました。現代日本にたとえるのであれば、居酒屋的な営業です。従って、先ほど紹介したメニューはケーナとしても食べられていました。こうした場合で好まれたのは、シウトウム（ビール的一种）でした。古代ローマでは気候の関係で葡萄が育ちやすかったこともあり、ワインが高級な酒類、ビールは低級な酒類という扱いだったのですが、ポピーナでは人気の飲み物だったようです。二つ目は前述した煮た豚肉で、これは古代ロー

マ人が軟らかい食べ物を好む傾向があったからなのですが、古代ギリシア人は煮た肉を食べる習慣を野蠻と見做していたようで、ローマ人に「茹で肉喰らい」という蔑称をつけていました。これが影響したのか、ウエスパシアヌス帝（九〇〜九七）の時代になると、食堂で茹でた肉を販売することが禁止されてしまいます。しかし、店の経営者は茹でる場所を屋外に出すことによって、法律をかくくくっていたようです。更に、インストラ（集合住宅）のように調理する場所がないが限られている場合は、こうした食堂で作られた料理を出前することもありました。多くのポピーナはインストラの1階に店舗を構えていたため、出前は容易でした。

**【食事・その2】**  
インストラに居住するような一般庶民の食事と異なり、富裕層のケーナ（夕食）は豪勢かつ政治的でした。彼らは頻繁に晩餐会を開きましたが、これには有力者との顔つなぎなどの意味がありました。晩餐は日没直前からはじまり、場合によっては8時間近く続いたようです。まず、招待客が相手の家に着いたら奴隷に自前のナプキンを渡ししました。続いて奴隷に足を洗って貰い、【住宅・その2】でも紹介したヘリステリウムの脇にあるトリクリナム（食堂）に案内されます。トリクリナムにはコの字型に臥台が置いてあり、1つの台に3人が左側を下にして寝転がりま

した。そして、左肘の下にクッションを置き、右手で寝転がったまま料理を掴んで食べました。汚れた手は奴隷が洗ってくれました。ゲップをすることは提供された料理に満足したという証拠であり、むしろ推奨されました。食べかすは床に捨てていました。放屁も見逃されました。排尿がしたくなったら奴隷を呼び、その場で尿瓶に用を足しました。明確に禁じられていたのは政治関係の話題でした。こうした食事の様式は古代ギリシアから輸入されたものですが、晩餐に女性が同席することが許されていた点が異なりました。初期は女性だけ普通に座っていたようですが、共和政後期、もしくは帝政期には男性と同じように寝転がるようになったようです。正式な晩餐会は、前菜の後に料理が3品、肉料理、そしてデザートが2品の合計7品が出されました。その間に詩の朗読、楽器の演奏、踊りなどの催しが奴隷によってなされました。晩餐が終わると、引き続き「コミッサティオ（無礼講）」が開かれました。ワインを濾した溶液を水で薄め（約80〜60%の濃度にするのが一般的でした）、主催者が何らかのルールを決めて（主に一気飲みが多かったようです）、参加者が次々とお酒を飲んでいくのです。この時は「ワインを飲んで酔わない」というモラルは適用されなため、参加者の大半は泥酔状態に陥ったようです。ただし、既婚女性だけは泥酔はおろか飲酒も許

されていませんでした。酔った勢いで夫以外の男性と肉体関係を持つかもしれない、と疑われていたからです。そこで、妻には毎朝夫にキスをする義務がありました。これを「接吻制度」と言います。飲酒をしていた場合、キスをすれば口中の臭いや味で判ると考えられていたからです。もしも飲酒が発覚すると、妻は夫によって殺害されることすらありました。

深夜も近くなるとコミッサティオもお開きになります。また、その後には乱交パーティーをしていた（特に踊り子奴隷がいる場合は）という説があるようなのですが、大量飲酒の後で性行為ができたかどうかは疑わしく、あくまでも「あってもおかしくなかった」という推測のようです。

確実にあったのは、食べ残しの料理を招待客が持ち帰ったことで、アポポレータ（会食者への土産物）と呼ばれていました。アポポレータは建前上、家で待っている奴隷のために持ち帰るとされていましたが、実際には本人達が翌日のイエンタークム（朝食）で食べていたようです。このため、アポポレータは現代アメリカのドギーバッグ（犬のために持ち帰るという建前で、食べ残しを持って帰るための容器）としばしば比較されま

す。  
以上がローマ時代の食事情です。また、当時のローマで食べられた食材と食べられていなかった食材は、次の表にまとめて表示してあります。



◆古代ローマで食べられていた食材（1）

食材	調理方法	備考
豚肉	煮る、焼く、燻製、ソーセージ	肉類の中でもっとも食べられていた。ソーセージはルカニカ（現在でもルガニカという名称で作られている）が代表的だった。
鳥	煮る、焼く	ツグミ、フラミンゴ、キジ、ニワトリ、アヒルなど。フォアグラや卵も好まれた。
魚	煮る、焼く	肉より高価だった。メバル、ヨーロッパキダイ、クロダイ、アナゴ、マグロ、タコ、ヒラメ、シタビラメ、ウツボ、ウナギ、チョウザメ、ウツボ、スズキなど。
獣肉	煮る、焼く	ラクダ、イノシシ、ウサギ
軟体動物・甲殻類など	煮る、焼く	エスカルゴ、牡蠣、伊勢海老、カニ、小海老、車海老、ウニ
野菜	煮る、生食	アスパラガス、カブ、キャベツ
豆類	煮る	ヒヨコマメ、ソラマメ、ヒラマメ
チーズ		
メルカ		羊か山羊の乳を使ったヨーグルト。
乳		ラクダの乳が最高級品だった。牛乳は好まれなかった。
果物	煮る、焼く、干す	リンゴ、干しブドウ、乾燥イチジク、焼き栗、モモ、アンズなどが人気。サクランボ、洋ナシ、ナツメヤシ、ブドウ、ザクロ、マルメロの実、クルミ、ヘーゼルナッツ、アーモンド、松の実など。

◆古代ローマで食べられていた食材（2）

食材	調理方法	備考
菓子	焼く、煮詰める	甘味料として広く使われていたのは蜂蜜だが高価。蜂蜜に変わる甘味料として、サトウキビ、茹でイチジク、サバ（ムストと呼ばれる完熟させたブドウの果汁を鉛でコーティングされた青銅器で煮詰めて作るシロップ。ただし、この製造の過程でシロップに鉛が溶け出しており、大量に摂取すると鉛中毒を起こす危険があった）などを用いていた。
子ども用の菓子		薄切りのパンを牛乳に浸して揚げ、蜂蜜を塗って食べる。
スパイス		サフラン、胡椒、クミン、生姜、ニンニク、クローブ、ゴマなど。
香味料		オレガノ、セージ、ミント、ジュニパーベリー、パセリなど。
ガルム	調味料	古代ローマの魚醤。魚（イワシ）の内臓を細かく切り、塩水に漬けて発酵させたもの。
ワイン	酒類	水で薄めたり、ハチミツを混ぜて飲んだ。

◆現在のイタリアで食べられていて、

古代ローマでは食べられていなかった食材一覧

食材
インゲン豆、カカオ（チョコレート）、コーヒー、七面鳥、ジャガイモ、トウガラシ、トウモロコシ、トマト、ナス、パスタ類全般、モッツァレラチーズ（水牛の乳）、落花生、リゾット

【浴場】

古代ローマで個人宅にバルネウム（風呂場）がある事は希でした。住民の大半はテルマエ（公衆浴場）で汗を流しました。テルマエが作られるようになったのは紀元前一世紀頃からで、ガイウス・セルギウス・オラタという商人が、ヴェスヴィオ火山（現在のイタリア、ナポリ）近郊にあるフレグレイ平野で行われていた、温泉の蒸気を利用するラコーニウム（発汗室）と呼ばれる湯治にヒントを得て、浴場を建設したという逸話があります。この時に考案されたのが、「住宅・その2」の床暖房で説明したハイポコーストです。余談になりますが、オラタはナポリ湾で最初に牡蠣の養殖を成功させた人物だという説もあるようです。

以上の理由から、初期の浴場はラコーニウム（発汗室）を中心に設計されていきました。浴場内は狭く、発汗とマッサージュが主要な目的で、料金も高かったようです。ただし人気が無かったわけではなく、紀元前三三年の段階で、ローマ市内には私営の浴場が約170カ所もあったことが分かっています。

浴場では部屋を暖める目的で大量の木材が燃やされました。そこで、浴場がある場所からは煙が立ち上るため、容易に場所を特定できたようです。これは、現代日本にある銭湯の煙突と同じようなものだったと思われます。

現代人がイメージする古代ローマの大浴場ができたのは、ティトゥス帝（三九〇〜八二）が八〇年に建てさせたティトゥス浴場が端緒ではないかと

言われています。決定的だったのはトラヤヌス帝（五三〜一七）が一〇九年に建てさせたトラヤヌス浴場だったようです。

大浴場の入浴料金は格安でした。トラヤヌス浴場の場合、入場料は兵士と子供と奴隷は無料、男性は1クオドランス青銅貨ですみました。例外は女性で1アス（4クオドランス）かかりました。男女で料金差があった理由はよく分かりません。

テルマエでは入場した後もお金がかかりました。脱いだ衣服を奴隷に預けると1クオドランス、浴場に入るのには2クオドランスと、何かサーピスを受けるたびに課金される仕組みでした。

入場後はアポデュテリウム（脱衣場）に向かいますが、ここは男女別でした。テルマエでは全裸になる必要は無く、トゥニカのまま、あるいはスプリガークム（下着）一枚の格好でも入浴可能だったようです。

トラヤヌス浴場の場合、アポデュテリウム（脱衣場）を出た場所が運動場になっていました。ここでは様々な球技をしたり、レスリングをしたり、走ったりする人達がいきました。入浴前の発汗を促すのが目的で、このため脱衣場でトゥニカを脱がない人もいるわけです。問題なのが、この場所が男女共用だったことです。トラヤヌス浴場では、運動場から先の施設で男女が双方を視察することが可能でした。古代ローマには混浴の習慣が無かったため、このような風紀の乱れは常にモラリスト達から批判されていました。

初期のテルマエは男女別に利用できるように

設計されたにも関わらず規則は守られず、ハドリアヌス帝は男女で浴場の使用時間を区切る法律を定めましたが効果はなく、二世紀の後半にはなし崩し的に混浴が常態化していました。ただし、現在の日本の温泉と同じく、混浴の場に女性が来るか来ないかは、彼女達の気持ち次第だったようです。つまり、女性の大多数が混浴であることを了解した上で入浴していました。

スポーツを終えて発汗したら、身体を洗います。古代ローマでは石鹸が使用されておらず、皮膚の汚れを落とすのに油と砂が使われていました。まず、オリブオイルを全身に塗布し、次に細かい砂をまぶし、これをストリギリスと呼ばれるヘラの形をしたあかすりでこそぎ落とすのです。古代ギリシアや古代ローマでは、レスリングなどの競技をする際に全身に油を塗る習慣があったため、入浴前に運動をしていけば、自然と油まみれになっていくはずでした。ちなみに、この油を塗ってストリギリス（あかすり）でこそぎ落とすという身体の洗い方だけに絞ると、紀元前5世紀まで遡ることができるようです。

身体を綺麗にしたら、いよいよ入浴です。トラヤヌス浴場では、浴室はテピダリウム（微温浴室）、カルダリウム（温浴室）、ラコーニクム（発汗室）、フリギダリウム（冷水浴室）に分かれていました。

テピダリウム（微温浴室）は天井が高く、空気の温度はそれほど高くないサウナのような場所で、運動せずに入浴した人が身体を温める役割が

ありました。従って、運動を終えて入浴する人達は、この場所を素通りしていたようです。

カルダリウム（温浴室）は高温のサウナ兼風呂場で、ハイポコーストによって床まで熱されているため、木製のサンダルを履いて火傷を避ける必要がありました。

ラコーニクム（発汗室）は乾式サウナの種類で、空気の温度は60度近くまで達し、短時間しかいられない場所でした。

最後のフリギダリウム（冷水浴室）は身体を冷やす場所でしたが、カルダリウム（温浴室）との温度差が激しかったせいで、しばしば心臓発作を起こす入浴客がいたようです。ただし、女性はフリギダリウム（冷水浴室）にとどまる習慣が無かったため、このような事故に遭うことは希でした。

フリギダリウム（冷水浴室）の先にはナタティオ（プール）があり、泳いで遊ぶことが可能でしたが、古代ローマ人には水泳の習慣は無く、漁師などの限られた職業の人達だけが、必要に迫られて「海で浮く」技術を習得しているくらいだったようです。

プールの先にはマッサージルームがあり、料金を支払えばテルマエ専属のマッサージ奴隷に施術して貰うことが可能でした。富裕層の中には、専属のマッサージ奴隷を連れてきて、施術をさせていた場合もあったようです。

公衆便所同様、公衆浴場は情報交換や商談をするのにつけての場所だったため、富裕層でも頻繁に利用していました。また、テルマエでの入

浴を愉しむ皇帝もいたようです。

### 【娯楽・その1】

古代ローマにおける娯楽も時代の変遷と共に変化していますが、帝政期における公的な行事として、死刑、剣闘士、戦車競技、演劇の4つが挙げられます。

まず死刑ですが、これは欧米諸国でも十八〜十九世紀までは民衆が喜ぶ見世物の代表的なものでした。日本でも江戸期までは公開処刑が行われ、戦場で戦うことが職業だった武士階級は見学を推奨され、他の階級の間でも喜んで観に行っていたことが様々な記録から分かっています。

帝政期の首都ローマで死刑が執行された場所として有名なのは、「タルペアの岩」と呼ばれる場所で、カピトリヌスの丘（現在のカンピトリオ）にある断崖絶壁を指しました。ここでは、盗みの現行犯で捕まった奴隷と反乱分子が投げつけられて殺害されました。落差は約40メートルだったと考えられています。

もう一つはコロッセオと呼ばれる（正式名称は「フラウィウス円形闘技場」だったようです）アンフィテアトルム（円形劇場）で、こちらは七〇年に建設がはじまり八〇年に完成したと言われています（収容人数推定5万人）。余談になりますが、同時期に完成したのが【浴場】で紹介したティトゥス浴場です。

アンフィテアトルム（円形劇場）で行われた著名な処刑法が猛獣刑で、訓練されたライオンなどに

に罪人を襲わせていました。また、ここまで大がかりではなくとも、古代ローマ帝国内に建設されたアンフィテアトルム（円形劇場）では、頻繁に公開処刑が行われていました。

次のグラディアトル（剣闘士）ですが、演劇と実戦を兼ねた一大娯楽ショーでした。グラディアトル（剣闘士）のなり手は奴隷や戦争捕虜でしたが、ローマ市民が志願する場合もありました。

剣闘士候補者は、ルウドス・マグヌス（剣闘士養成場）でラニスタというトレーナーから指導を受けて訓練を積み、特定の役割を演じます。たとえばレティアリウス（投網剣闘士）は片手に網、もう片方の手に三叉の矛を持った漁師を象徴する剣闘士であり、魚の兜を被ったミュルミッロ（魚人剣闘士）は、ウツボを模した剣闘士でした。大きな楯を持ち、そこに身体を隠しつつ一瞬の隙を突いて攻撃する様子が、ウツボに似ていると考えられたからです。

グラディアトル（剣闘士）の試合は前述したアンフィテアトルム（円形劇場）で行われました。猛獣対剣闘士、あるいは剣闘士同士の対戦が多かったようです。

アンフィテアトルム（円形劇場）への入場には骨でできた札が必要でしたが、料金はかかりませんでした。代わりに札には席が指定されており、自由に座ることはできませんでした。

席は身分が高い者ほど闘技場に近い場所に座れるようになっていました。たとえばコロッセオでは1階が富裕層、2階が一般的なローマ市民、3

階が解放奴隷を含む身分の低い人達で、4階は女性席でした。

剣闘士同士の戦いは実戦であり、賭けの対象となり、死傷者が続出しましたが、敗者が必ず殺害されるというわけではありませんでした。というのも、たとえばAという剣闘士が奴隷だったとして、この人物が試合に負けて殺害されたなら、競技会の主催者はこの剣闘士奴隷の所有者に賠償金を支払う必要があったからです。

それでも凄まじい数の剣闘士が殺害されていたのは事実で、紀元前七三年〜七一年にかけて、逃亡した剣闘士による大規模な反乱であるスパルタクスの反乱（第三次奴隷戦争）を引き起こす原因の一つになっています。

グラディアトル（剣闘士）の社会的身分は非常に低いものでしたが報酬と知名度は高く、現在ならプロスポーツの選手のような立場でした。一部の女性からの人気も非常に高く、セックスシンボルとして崇められることもありました。

このため、ローマ市民の中には自発的に剣闘士を志す者もいたようです。コンモドゥス帝（一六九〜一九二）のように、皇帝自らがコロッセオに出場した（剣闘士としてではなく、動物を言矢で射るなどのデモンストラーションがメインでした）事すらあったようですが、さすがにこれは常軌を逸した行動と見なされました。

### 【娯楽・その2】

古代ローマで剣闘士と同じくらい人気があった

のが戦車競技でした。といっても、現代のような分厚い装甲に守られ、砲塔を備えた自走車両ではなく、チャリオット(戦闘馬車)の一種を指します。

戦闘馬車は二輪の馬車を2〜4頭の馬に引かせるといふ兵器で、御者は馬を操る事に専念し、その後ろに乗った者が攻撃を担当していました。ただ鞍や鐙などの馬具が発達していなかった時期に、戦車は重要な戦力と見做されていました。ただし、古代ローマ軍が戦車を使っていたという記録はありません。つまり、古代ローマが絶頂期を迎えていた時代には、既に時代遅れの兵器だったと見做すべきでしょう。更に、戦車競技に出場する戦車はレース用に製造されたもので、軽量化した分だけ壊れやすく、実戦には不向きだったと考えられています。また、そのせいで競技用戦車は現存していません。

戦車には4頭立てのクワドリガ工と2頭立てのビガ工がありました。格が高かったのはクワドリガ工の方で、これは馬力のある自動車によるレースを格上と見做す現代とそれほど違いありません。

戦車競技はギリシアから伝わった文化で、主にキルクス(競技場)と呼ばれる場所で行われました。現在の競馬場に該当する場所で、細長い楕円形をしており、中央にスピナ(分離帯)が設けられ、コースを周回することで順位を決めました。

首都ローマで最大の競技場はキルクス・マキシマ(現在のローマ市にあるチルク・マッシモ)で、紀元前4世紀には存在が確認されている古いものを整備していったようです。最も労力をかけたの

がトラヤヌス帝(五三〜一七)の在位時期で、25万から30万人の観客を収容する能力があったと言われています。

戦車競技の制度が整備されたのはネロ帝(三七〜六八)の時期で、本人がアウリガ工(御者)となつてレースに参加したという記録が残っていますが、コンモドウス同様に、これは上流階級の人間としては逸脱した行為でした。アウリガ工の大半は奴隷で、競技中に高確率で死傷者が出たからです。そして、グラティアトル(剣闘士)同様、アウリガ工(御者)も身分の低さに反して報酬と知名度が高く、憧れの存在と見做されました。

キルクスの入場が無料であった事、席が決まっていたこと、レースが賭けの対象だったことは剣闘士の試合と基本的に同じです。

### 【娯楽・その他】

演劇も戦車競技同様に、ギリシア伝来の文化でした。紀元前三世紀に活躍した詩人で翻訳家だったルキウス・リウィウス・アンドロニクスによって、ギリシアの演劇がラテン語に翻訳されたのが発展の契機だったと考えられています。ちなみに、このアンドロニクスもタレントウム(現イタリア共和国、ターラント)出身のギリシア系奴隷だったようです。

古代ローマと古代ギリシア演劇の最大の違いは、オルケストラ(orchestra)の有無でした。これは舞台の前に設置された円形状の土間で、ギリシア演劇ではここで踊りを踊ったり合唱した

り、楽器を演奏するのが一種の決まり事になっていました。

ところが、古代ローマの演劇では合唱よりも台詞のやりとりが重視されたため、オルケストラを舞台の一部として組み込む必要性がありませんでした。そこで、古代ローマの演劇場からはオルケストラが消えました。更に長方形の舞台を広く使う目的で、演劇場の形状も半円形に変化しました(舞台の幅が円の直径になるため)。余談になりますが、現代のオーケストラ、いわゆる管弦楽団の語源が前述したオルケストラになります。

古代ローマにおける初期の演劇は、木造の仮設舞台で行われていましたが、グナエウス・ポンペイウス(紀元前一〇六〜紀元前四八)によって紀元前五五年に初の恒久的劇場であるポンペイウス劇場(収容人数推定5000人)が完成してからは、この場所を中心に観劇が行われるようになってきました。

演劇は年間で20日〜25日開催されました。主催者は富裕層で、入場料は無料でした。ただし、席順が決まっていたのは剣闘士の試合や戦車競技と一緒にでした。

演じられたのは、喜劇、悲劇、ミムス劇(踊りやパントマイムを取り入れた一種の道化劇)でした。喜劇と悲劇を演じる俳優は原則として男性のみでした。従って、日本の歌舞伎同様に女形がいきました。俳優は口にラップパ状の拡声器が着いた仮面を被って演じることが多かったのですが、これは音響設備や大型ビジョンがない時代の大劇場対

策だったと思われる。

しかし、古代ローマ人に人気があったのは、古代ギリシアのミモス劇から発展したミモス劇でした。本来は私邸で行われた滑稽な物まね劇、寸劇だったようですが、堅苦しい悲劇や喜劇に比べると遙かに面白かったようです。

また、ミムスの女性役は女性が演じ、その内容は前述したギリシア由来の悲劇や喜劇に比べると卑猥かつ政治に対する批判が含まれている場合が多かったようです。この2つが混ざるのは、どちらも感情移入をしないことによって成立する娯楽（たとえば、為政者に感情移入をしていたら、彼らを批判したりきき下ろすのは難しいでしょう）だからなのですが、それ故に何度も禁止令を出され、俳優がローマ市外に追放されるなどの処罰を受ける場合もあったと言われています。

ちなみに、グラディاتور（剣闘士）、アウリガ工（御者）同様、俳優の社会的地位も低く、大半は外国人が解放奴隷だったと言われています。そして、彼らも興業が大成すれば莫大な収入を得ることが可能でした。

#### 【娯楽・その4】

公的に認められていなかった（正確には禁止されていた）娯楽の代表が博打です。トランプやそれにかわる札は古代ローマには存在せず、サイコロ博打が主体だったと考えられています。基本的なルールは、複数のサイコロを振り、その目の合計を当てるといったものだったようです。

ガイウス・ユリウス・カエサル（紀元前100〜紀元前44）が元老院に対して反逆した際に「賈は投げられた（res accedat）」と述べたという逸話はあまりにも有名ですが、これは古代ローマの上流階級の間にすらこの博打が広まっていた証左でしょう。ちなみにカエサルの後継者であるアウグストゥス帝は、この博打の依存症だったという説があり、1日で20万セステルティウスをすったという逸話が残っています。

#### 【結婚・その1】

結婚も時代と社会階級によって大きく変わった制度の1つです。

まず、伝説によると古代ローマが建国した時期は略奪婚でした。これは、建国時のローマでは男性の比率が圧倒的に高かったため、近隣に居住していたサビニ人を騙して未婚の女性を誘拐したという内容で、後に『サビニの女たちの略奪』というモチーフとして繰り返し芸術作品に取り上げられるようになります。ただし、考古学的な証拠はありません。

確実だと思われるのはクム・マヌ（手権婚）という方法で、妻を法的に夫の娘とすることが結婚を意味していました。この制度では、妻は夫の完全な支配下にあり、ドス（持参金）も夫の自由に使うことが可能で、離婚も自由に言い渡せるという酷い代物でした。

そこで紀元前二世紀頃から一般化したのがシネ・マヌ（無手権婚）という制度で、こちらは結

婚後も法的に女性の父親は以前のままで、ドス（持参金）を自由にする権利も彼女（妻）にあるというものでした。更に妻からも離婚の申し立てを行うことが可能になり、仮にその言い分が正当であると認められた場合、夫にはドス（持参金）を返却する義務がありました。たとえば、【教育・その2】で取り上げたキケロは妻であるポンポニアとの夫婦仲が悪く、離婚した際に持参金の返却に苦勞したと言われています。

古代ローマの法律において、結婚可能年齢は女性が12歳、男性が14歳でした。基本的に一夫一婦制で、一夫多妻、あるいは一妻多夫は認められていなかったようです。財産相続権があったのは嫡子のみでした。

この2つの条件をクリアせねばならなかったため、上流階級の結婚は非常に難しいものになってしまいました。まず、結婚する家同士の家柄や財産が釣り合った上で、更に夫となる男性の将来性が認められねばならなかったせいで、男性の晩婚化が進みました。一定以上の年齢になり、実際に社会で働いてみないことには、有能かどうかの判断ができなかったからです。続いて妻には複数回の出産が期待されたため、若年時の結婚が推奨されました。

この結果として男性が20代後半から30代、女性が10代という年の差婚が常態化するのですが、これは生物としての人間に反した行為でした。他のほ乳類同様、人間は性的二形と言って男性と女性に肉体的な性差があります。生殖行為に絞って述

べると、男性は性成熟が早く、精通直後から女性を妊娠させられるのに対して、女性は外見の成熟（外見に限って言えば15歳程度で胸の大きさなどは固定してしまいます）に比べて性成熟が遅く、若年不妊が起きやすいだけでなく、医療が発達していない地域では、出産を乗り切れずに死亡する事例が相当数あるのです。

古代ローマでも同様の事態が起きていたのは間違いなく、【寿命】の項目でも述べた女性の平均寿命が29歳になってしまった主要な原因の1つだったと推測できます。ちなみに、日本では一八九九年の段階で妊婦10万人に対する死亡数は409.8人（約0.4%）、実数では6420人とかなり多いものでした。これが二〇一三年になると、妊婦10万人に対する死亡数は3.4人で、実数は36人でした。医学技術の進歩が、妊婦の命を救っている端的な事例でしょう。

もちろん、古代ローマでは高度な医療技術が期待できるはずもなく、妊娠と出産は神頼みでした。その代表的な神として知られるのが、巨大な男根を持つ男性の姿として描かれることが多かった豊穡神、プリアープスでした。

しかし、無事に出産を終えて（古代ローマでの出産方法は、椅子に座って行う座産が主流だったようです）も次の試練が待ち構えていました。古代ローマでは身体障害は不吉の象徴とされていたため、赤ん坊に障害があったり未熟児だったりした場合は、その場で助産婦によって殺されてしまいます。首を絞めて殺害するか、水に沈めて殺害

するケースが多かったようです。

このチェックを問題なく通過すると、赤ん坊は身体を洗われ、家の床に置かれました。

当時の出産は親族一同にとつての大イベントで、赤ん坊の周囲には何人もの血縁者が集まっています。この中で、父親が赤ん坊を抱え上げ、自分の子供である事を親戚一同に宣言することによって、ようやく嫡子と認められました。この儀式をトッレ・リベルムと呼びました。

しかし、父親がトッレ・リベルムを行わない場合、子供には悲惨な運命が待ち受けていました。妻が強姦されて妊娠してしまった、不倫をしていた、子供の数が多すぎて養育できないなどの理由によって父親から認知されない子供は、出産に立ち会った助産婦が引き取る場合が多かったようです。その際に、ローマ市内であれば「乳の塔」と呼ばれる野菜市場の近くにあった円柱のそばに遺棄されるか、乳児を扱う奴隷商人に売り飛ばされました。助産婦は古代ローマにおける乳児売買や奴隷産業の一翼を担う存在だったのです。

### 【結婚・nequi】

【結婚・その1】でも説明したとおり、帝政期における古代ローマの支配層の結婚は、いわゆる年の差婚が多く、これが様々な問題を引き起こしていました。1つは前述した若年女性の妊娠、出産の失敗による死亡です。

もう1つの大きな問題は女性の不倫でした。古代ローマ社会は極端な男尊女卑で、夫の不倫は「自

分よりも身分が高い相手とセックスしてはいけない」というルールさえ守っていれば黙認されました。しかし妻は貞節を求められ、夫以外の男性と肉体関係を持つことを禁止されていました。

ところが、ここで年の差婚の欠陥が露呈します。例えば夫が35歳、妻が15歳で結婚したとしましょう。15年後には夫は50歳。男性としては相当くたびれてくる年齢です。一方の妻は30歳。性嫌悪症でない限り性的には成熟した年齢になります。

これで不倫が起きないはずがなく、現実には高確率で不貞が発覚しました。

たとえば、共和政後期から帝政初期の優秀な軍人、マルクス・ウィプサニウス・アグリッパ（紀元前六三〜紀元前十二）は41歳の時に、彼の盟友アウグストゥス帝の娘であるユリア（紀元前三九〜紀元十四）と結婚していますが、彼女の年齢は18歳でした。当初、2人の結婚は上手くいっていましたが、アグリッパが男性として衰えると、ユリアは公然と浮気をするようになります。彼女はアグリッパの子供を身ごもっていた時期に、他の男性とセックスをすることによって、不倫の子がでないようにしていたと伝わっています。

娘の乱行に頭を痛めたのが、アウグストゥス帝は紀元前十八〜紀元前十六年に「姦通法（Lex Julia de adulteris coercendis）」を制定するのですが、夫が浮気相手を殺害しても良い条件として、

(1) 自宅に妻と相手が不倫している現場を取り

押さえること。

(2)不倫相手がルパーナル(娼館)関係者か、俳優、踊り子、歌手として舞台上上がった経験がある人物、前科者でローマ市民としての権利を回復していない人物、そして妻、夫、あるいはそのどちらかの父親、母親、彼らの息子、娘の解放奴隷。

の2つが定められていました。

この法律から妻が不倫相手を選ぶパターンが推定できます。まず、ルパーナル(娼館)に関しては説明不要でしょう。ちなみに相手が男娼とは限らず、妻が娼婦と関係している現場を夫が取り押さえ、殺害したという記録があるそうです。

次の歌手や踊り子や俳優も分かり易い例で、観劇で相手を物色した妻が、自宅に呼んだというケースでしょう。いわゆる「役者買い」という行為で、これも江戸期の日本にあった風習です。

最後の1つは明らかに家令を念頭に置いた規定です。彼らの多くは妻方の父親か母親の解放奴隷で、妻のドス(持参金)を管理するのが仕事でした。しかし、女主人にとって最も身近かつ従順な男性だったため、性的な欲求不満を解消するにはうってつけの相手でもありました。夫にとって最も危険な存在が、この家令であったことは想像に難くありません。

ちなみに、もっとアクティブな不倫相手を選ぶ女性もいました。グラティアトル(剣闘士)です。こちらも妻がアンフィテアトルム(円形劇場)で相手を物色し、自宅に呼びつけていたようです。

【娼楽・その1】でも説明したように、グラティアトルは古代ローマにおけるセックスシンボルのな扱いだったので、上流階級の夫人が一緒に駆け落ちするという事例すら発生しています。

しかし、前述の浮気は相手を選んでいただけ、まだ憤み深い部類に入りました。セックスの相手欲しさに娼婦の身なりをして、金を取った上で男性を漁る上流階級の女性が存在していたのです。帝政ローマ期を代表する歴史家であるタキトゥスによると、この女性はウイステリアという名前で、恐らくルパーナル(娼館)にいたところを摘発された際に、取締官に対して「女性が売春する自由」を主張したとされています。これは姦通罪の適用を避ける上手い言い訳でもありました。

というのも、娼婦に姦通罪を適用するわけにはいかなかったからです。そんなことをすれば、売買春が不可能になってしまいます。

仕方がないので元老院は、一九年に祖父、父、夫が騎士階級の女性に「貞操を換金すること禁止する」、すなわち売春禁止の元老院議決を發布することにします。ところが、それでも上流階級女性の売春はなくなり、あろうことが第四代皇帝クラウディウス(紀元前十〜五四)の皇后である、ウアレリア・メッサリナ(二〇〜四八)が、深夜になると宮殿を抜け出し、娼館でスキッラという変名で客を取っていたという事実が明らかになります。

生没年を見れば分かる通り、この夫婦も30歳以上の年の差婚でした。メッサリナはそれでも性

欲を満たせず、最後はガイウス・シリウスという元老議員と重婚。夫を殺害しようとしたところ、計画が漏れて逆に殺されてしまいました。

### 【結婚・その3】

【結婚・その1】と【結婚・その2】で説明したように、古代ローマにおける上流階級の結婚制度はある程度分かっていますが、庶民の結婚生活に関してはよく分かっています。そもそも莫大な財産を持っていないので、財産分与を巡っての揉め事とは無縁であり、結婚という制度にこだわる理由が無かったとも言えます。そこで、財産のない夫婦の大半は事実婚だったのでないかと推測されています。

ただし、階級の上下を問わず、為政者によって結婚を禁止されていた組み合わせがありました。具体的には、

(A) 兵士。帝政期の古代ローマ軍は職業軍人の集まりで、「愛する者がいると命がけで戦わなくなる」という理由で結婚が禁止されました。そこで、恋人ができて内縁関係で済ませ、除隊後に正式な結婚をするというケースが多かったようです。

(B) 属州の役人と、現地女性の結婚。これは、いわゆる「現地惚れ」を防ぐ目的でしょう。ローマ帝国のために派遣された役人が、現地人のために便宜を図りだしたら、現代以上に深刻な問題を引き起こすことは容易に想像できます。

(C) 奴隷との結婚。身分制度の維持が目的でした。ただし、奴隷を一旦解放すれば結婚が可能でした。このため、若い女奴隷を解放し、結婚しようと思つたら逃げられたという老齢の男性が相当数いた、という逸話が伝わっています。

(D) 元老議員家系と賤業者(娼婦や俳優)。これも身分制度を維持する目的で設けられた制限だと思われまふ。

(E) 四等親以内の親族同士。近親姦防止が目的と思われまふ。

の5つでした。

### 「セックス」

古代ローマ人のセックスに対する価値観は、現代人とは大きく異なっていました。原因はユダヤ教系の一神教、特にキリスト教が世界的な宗教にまで発展していなかったからです。従って、三八〇年に皇帝テオドシウス1世によってキリスト教が国教化した前後から、ローマ人も現代人に近い性道徳に移行していったのではないかと考えられています。

ユダヤ教系の一神教は、「生殖目的以外の性行為を禁止する」という、世界的に見てもあまり類例のないタブーがあります。具体的には同性愛と小児性愛、マスターベーション、性欲を解消するだけが目的のセックスなどを禁忌としています(禁忌の程度は時代や地域によって異なります)。たとえば、現代の欧米では小児性愛を厳しく処罰

する反面、同性愛には寛大ですが、イスラム教国では小児性愛に寛容な反面、同性愛には不寛容といった感じ(です)。

ここからややこしいのですが、ユダヤ教とイスラム教は一夫多妻制度を公認して、より高確率で男系の血統が残る方法を選択していますが、キリスト教は恐らくローマ帝国内で普及したことが原因で、一夫一婦制の同意婚を採用しました。そして、この煽りを喰らったユダヤ教は、絶え間ないキリスト教徒の弾圧により、最終的には一夫多妻制を放棄して、一夫一婦制に鞍替えせざるを得ませんでした。

一方の日本ですが、鎖国以降はキリスト教を徹底的に弾圧しており、開国後は他の東アジア地域と同様に、キリスト教に感化されて宗旨変えを行ったのは、主に儒教の信奉者達だったという経緯があります。そして、中国や朝鮮半島と比較すると、日本の儒教信奉者は武士階級に集中していたために、先進国の中では例外的にキリスト教的な価値観がそれほど浸透していません。

以上の前提を踏まえた上で、古代ローマ人の性道徳について見ていきましょう。

まず、念頭に置かなければならないのは宗教です。古代ローマ人は多くの日本人と同様に多神教の信者であり、性的興奮はウエヌス神(ギリシア神話の性愛の女神であるアフロディテと同一視された女神。現在ではヴィーナスの名称が一般的)からの恵み、あるいは【結婚・その1】で紹介した男根神、プリアープス(プス)がもたらすものとしてい

ました。従って、性行為が罪深く後ろめたいもので、できるだけ隠れて行うべきだという発想もありませんでした。セックスで快楽を求めることは是とされ、最高の快楽を伴った方が妊娠しやすいと考えられていました。

そのため、子供の目につく場所にも性行為の画像や男根を飾っていました。特に勃起したペニスは幸運のシンボルであり、ローマ市内のいたる場所に勃起したペニスを模した装飾品や絵が飾られていました。また、祠に祀られている男根を軽く撫でることによって厄除けができると信じられていたり、青銅製の勃起した男根をペンダントとして身につけることがお守りになると考えられていました。特に有名なのが、小さな青銅製の男根を細い鎖で束にして繫いだもので、これを揺らすと音が出るためティンティンナーブラ(鈴)と呼ばれていました。

このような習慣は古くからある日本人の宗教観によく似ています。現在でも、愛知県小牧市にある田縣(たがた)神社、熊本県熊本市にある弓削神社、新潟県岩船郡関川村にある雲母(きり)神社、愛媛県宇和島市にある多賀神社、神奈川県川崎市にある金山神社など、勃起した男根を祀る神社は日本各地にあります。

古代ローマの性道徳について、次に考慮すべきなのは身分差です。古代ローマでは奴隷制度や女性差別が自明の価値観として認められていました。従って、支配層に属するローマ市民男性は、セックスの最中でもイニシアティブを握らねばな

らないとされていきました。

自分よりも社会的な地位が低い者との性行為を「下淫」と呼びますが、ローマ市民男性にとって下淫は守るべき不文律でした。性行為の相手は同じローマ市民女性、女奴隷、そして若い男奴隷に限られました。

ここで気付いていただきたいのが、男性同性愛の扱いで、「ローマ市民男性はセックスの最中にもイニシアティブを握るべし」というルールは彼らの間にも適用されました。古代ローマでは同性愛者やバイセクシャルを意味する単語は存在せず、差別がなかったかあっても微少だったことは確実なのですが、それはあくまでもローマ市民男性がセックスの最中にイニシアティブを握っている時だけでした。

これを破ってローマ市民男性が、相手に奉仕する立場になったり、受けの立場でセックスをしていることが明らかになると「キナエドゥス」あるいは「パティクス」と呼称され、下層民に落とされた上で選挙権や裁判権も剥奪されてしまいました。ローマ市民男性に許されていた同性愛行為は、若い少年を相手に自分がリードするセックスだけでした。

そして、このルールの延長線上にオーラルセックスの禁止がありました。古代ローマ人にとって口は神聖な器官であり、これで性器を愛撫することは避けるべき行為でした。従って、ローマ市民男性がフェラチオやクンニリングスをすることは禁忌と見做されていました。特にフェラチオを強

要されることは避けねばならないとされていきました。このタブーはかなり強かったようで、元老院議員が「オーラルセックスをした」と告発された場合、それは裏切り行為を働いたのと同義と見做されました。また、フェッラートル（マンコ舐め野郎）という単語には、ローマ市民男性にとって最大級の侮辱の意味がありました。

更にオーラルセックスをしないという目的のため、グループセックスも謹むべきであると考えられていました。しかし、ややこしいことに、ローマ市民男性が「フェラチオをされる」ことは禁止されていませんでした。

そして、これらの性行為に対する価値観にもギリシア的な要素が紛れ込んでいました。セックスの相手として、美少年や美少女の奴隷を買い求めるといふ習慣です。こうした行為は現在ではれっきとした犯罪ですが、当時の富裕層の間では常態化していたことが分かっています。

セックスは主人がしたい時に行われ、奴隷に拒否権はなく、それが当然のことだと了解されていきました。従って、異性間であろうと同性間であろうと、奴隷と主人の間には性的な関係があると見做すのが暗黙の了解でもありました。この点で、古代ローマが「退廃していた」と批判されるのはやむを得ないでしょう。

この性奴隷と似たような境遇にあったのが娼婦でした。

彼女達の大半は、奴隷としてルパーナ（娼館）に売られ、客を取らされていました。また、「化

粧と装飾品・その2」でも説明したように、娼婦は毛髪を青かオレンジに染めることが義務づけられていました。

娼館は入り口にローマンランプを2つ吊していたため、夜間の識別が容易でした。安価な娼館は内部がカーテンで囲われられており、客は狭い空間でサーピスを受けました。高級な娼館では、壁にエロティックな絵が描かれていたりするなど、装飾も凝ったものだったと考えられています。ローマ市内ではローマの起源となった場所とされる、アウエンティヌスの丘現在のアウエンティヌ（近辺に高級娼館が立ち並んでいました）。

そして、ここでも文化のギリシア化がありました。高級娼婦をケーナ（夕食）やコミッサティオ（無礼講に呼ぶという風習です。彼女達は、ただセックスするのではなく、宴席で楽器演奏や舞踊をする必要がありました。つまり、日本の芸者や芸妓に近い存在だったようです）。

しかし、高級娼婦よりも更に高額のサーピス料を請求できる商売がありました。娼婦です。前述したように、古代ローマの性道徳では、ローマ市民男性が相手にできる男性は若い男という不文律があったため、娼婦は短期間しか活動できなかったのが原因だと思われまます。そして、奴隷が大半だった娼婦と異なり、娼婦は後に莫大な財産を貯めた者が多かったことも分かっています。

この点でも、古代ローマは徹底した女性差別社会だったのです。

## セックス



# 『ローマ式奴隷との生活』

二〇一六年三月二〇日発行

著◆トウリヌス

翻案◆鳥山仁

イラスト◆大和テクノ

解説協力◆中西正紀（たちばな科学文化研究所）

発行人◆小野寺一

編集人◆樺昭子

発行所◆三和出版株式会社

東京都豊島区巢鴨四丁目二六番地一〇号 三和ビル

編集◆〇三（五九〇七）七〇一五

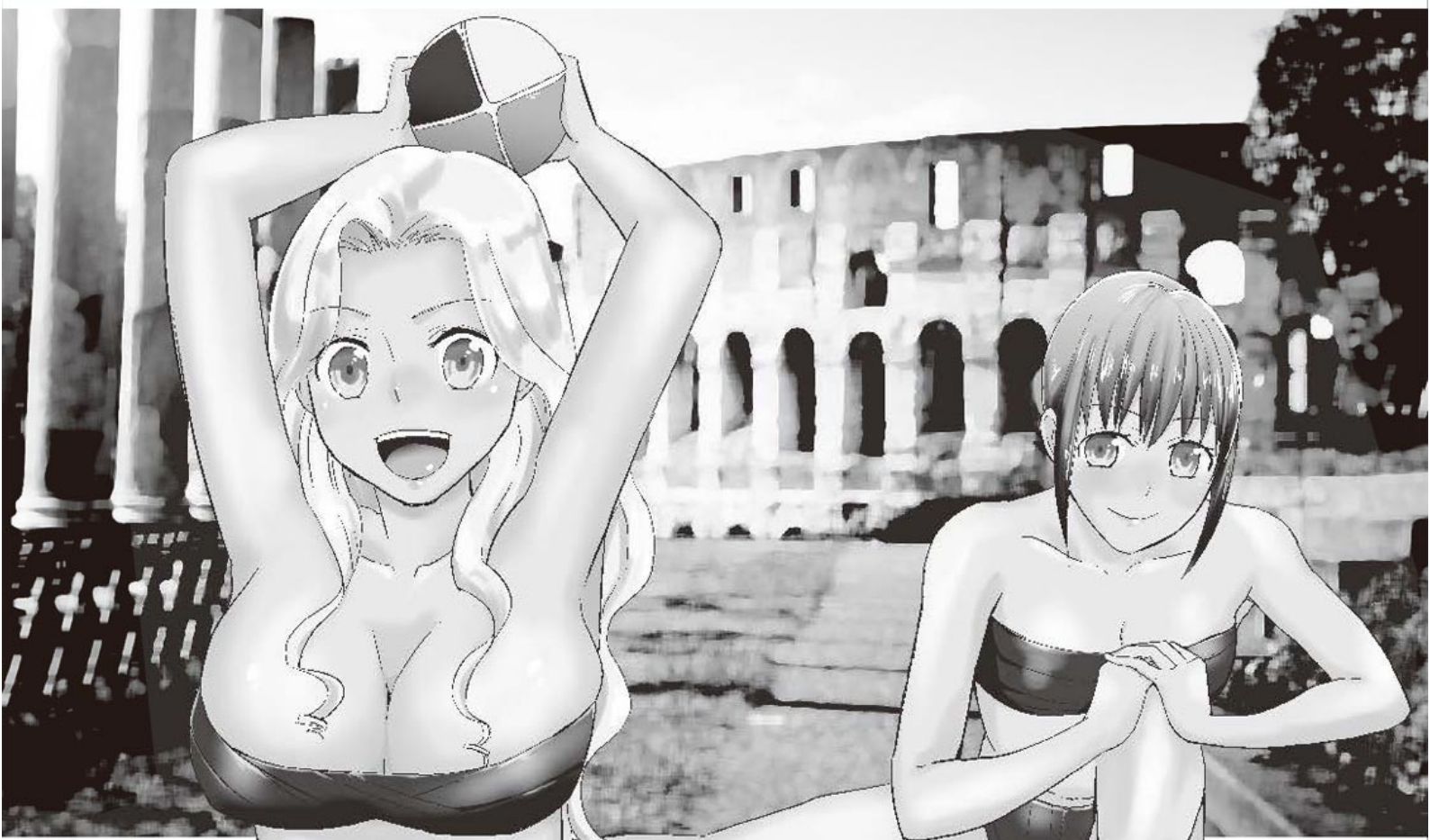
営業◆〇三（五九〇七）七〇一一

印刷◆図書印刷株式会社

乱丁本・落丁本はお取り替えいたしません。

本書の一部あるいは全部について著作者から文書による承諾を得ずにいかなる方法においても無断で転載・複写・複製することは固く禁じられております。

あまりにも反道徳的な内容であるという理由から長期間にわたって公的な出版ができず、好事家が秘蔵していたとされる古代ラテン文学『Vitae Cum Selvuris (奴隷娘たちとの生活)』。この古代ローマを舞台にした裕福な男性と奴隷少女達のハーレムを描いた小説の現代語訳版が本書である。当時の社会制度・文化・生活が理解できる詳細な解説付き。



# 奴隷との生活 ローマ式

Vitae Cum Selvuris

## CAUTION!!

本書は古代ローマを舞台にしたフィクションです。実在の人物・団体・事件などとは一切関係ありません。また、現代日本において人身売買は犯罪です。古代ローマを偲んで奴隷制度を再現しようと試みるなどの行為は、くれぐれも慎んで下さい。

あまりにも反道徳的な内容であるという理由から長期間にわたって公的な出版ができず、好事家が秘蔵していたとされる古代ラテン文学『Vitae Cum Selvuris (奴隷娘たちとの生活)』。この古代ローマを舞台にした裕福な男性と奴隷少女達のハーレムを描いた小説の現代語訳版が本書である。当時の社会制度・文化・生活が理解できる詳細な解説付き。



奴隷との生活  
ローマ式

Vitae Cum Selvuris